

東京立正女子短期大学紀要

第 33 号

目 次

社会学的思考の再検討

——スコットランド啓蒙批判とその課題から——

..... 有 泉 正 二 (1)

電子メールを利用した短期カウンセリングの特徴について

..... 幸 田 達 郎
楡 木 満 生
(立正大学) (20)

質問紙研究のための実験デザイン..... 土 田 昌 司 (39)

外国人観光客の誘致への提言..... 下 田 將 文 (52)

利潤率の傾向的低落法則と置塩理論..... 東 浩 一 郎 (72)

言語と自閉症に関する一考察

——ヒューマンマインドを反映する不完全なコミュニケーション——

..... 中 岡 典 子 (101)

フロイト研究 (1)

——Sigmund Freudの年表——..... 飯 田 宮 子 (124)

《編集後記》 (149)

2005

東京立正女子短期大学

社会学的思考の再検討

——スコットランド啓蒙批判とその課題から——

有 泉 正 二

1. はじめに

「社会」、「社会問題」、「社会学」などのことばは、こんにちでは広く一般的に流通し、そのような概念を使って日常の世界や出来事を語ることに對しては、何の違和感も問題もなくおこなわれているように思える。そして、最近では、むしろ社会学者のほうが、学術的な用語として、あるいは重要課題として、もはやこれらのことばをそのまま使用して論じることが少なくなってきた。

しかし、社会学（者）は、時々、正しい自己理解を求められる。社会学者であれば「経験的に」そうせざるをえないことが認められるであろう。「社会学はどのような学問であるのか」という質問に対しては、なかなかうまく答えられずにきているのだから。そこで、社会学はしばしば再検討される。

本稿の論題として示した「社会学的思考の再検討」とは、多くの「再検討」がそうであるような、様々の社会理論を批判的に吟味すること（ある社会学理論への批判）を第一義の目的としているのではない。むしろ、社会学者たちが、社会学的に思考しているところ（社会学からの批判）に注目する。つまり、社会学的思考自体から社会学的思考に自覚的な方向性に対して、「再検討」を通じて接近することを目的としている。

さて、私たちが再検討するのは社会学的思考であるが、そのように言うためには、少なくとも思考すべき対象と個性性をもたなければならない。いわば、研究対象としての「社会」と社会学の個性性が必要になる。そこで、本稿での議論の出発点として、およそ「常識」と呼びうるような事柄をあらかじめ確認しておきたい。

まず、社会学は「社会」の発見とともに始まったということである。P. L. バーガーの言葉を借りれば、「社会学は、研究方法の発見と研究対象の発見が同時におこなわれた点で、当初からきわめて特殊な学問であった。つまり、社会学はもともとただ単に社会研究の新しいアプローチであったばかりでなく、それ自体が『社会』という現象そのものの発見の重要な一部分だったのである」(Berger & Kellner 1981=1987: 4)。

そして、社会学と「社会」は、近代を始まりとする。社会学が特殊近代的であるということについては、19世紀にオーギュスト・コントが『実証哲学講義』ではじめて「社会学 (sociologie)」という名称を使用したという事実がある。しかし、「社会」については、現在、この概念が多様な解釈を可能にしているので、認識を共有しておく必要があるだろう。単純化して述べれば、古代ギリシアにはポリス（都市国家）が、そして、中世ヨーロッパにはキリスト教的共同体（カトリック教会＝教皇を中心とした聖と俗二王国）が存在していた。このような人々の集合体が、日常語の広義の意味で社会と呼べないわけではない。しかしながら、古典古代の政治的に組織された共同体、そして、中世のキリスト教的共同体は、人間の善き生や共通善という目的に向けた政体あるいは支配権のあり方について数多くの議論がなされていたものの、都市国家やカトリック教会を中心とする統治の形態が、他の共同体を包括する唯一の正しい秩序であることをあらかじめ想定している。つまり、そこでは、「社会」自体が問われるべき、あるいは観察される対象となっていない。このような理由から、「社会」は近代以前には発見されていなかった。

さらに、社会学は、社会科学 (social science) という学問領域に属する政治学・経済学・法学などに比べて、新しい学問といえる。そして、「経済は近代経済学以前にもひとつの現象として知られていたし、政治秩序は近代政治学以前にも知られていた」(Berger & Kellner 1981=1987: 5) のに対して、「社会」と社会学は近代に遅れてやってきたがゆえに、社会学では、学問としての独自性、すなわち社会科学の中で特色のある思考であることが「社会」とともに示されることになる。

これまで確認したことから、私たちは再検討に向けて「社会」を問われるべ

き対象として思考するための固有の課題に向かうことになる。その入り口は、近代黎明期にトマス・ホップズが『リヴァイアサン』で描きだした、「社会秩序はいかにして可能か」という、いわゆる「秩序問題」である。これが固有の課題であるといえるのは、実際に、これまで多くの社会学者が秩序問題について言及してきたからであるが、秩序問題を体系的に論じたタルコット・パーソンズによれば、この課題に対する社会理論の構築が、功利主義との訣別を通じてなされたとみられているからである。功利主義「批判」がおこなわれたというところは、個別性に向かうための一つの指標となる。そのため、本稿で「社会秩序はいかにして可能か」という「秩序問題」は、このような点で有効な、社会学的思考上の問いとして吟味されることになる。

以上のような事柄を踏まえて、考察に際しては、スコットランド啓蒙を「鏡」として使用する。というのも、コント以前の「社会学前史」にあたるものの、「秩序問題」という課題を描き出したホップズを批判することによって自らの思考を明らかにしてきており、しかも、社会学において批判されてきた功利主義思想の基本的な要素を生み出したからである。それゆえ、本稿の課題となる「社会学的思考の再検討」の範囲は、スコットランド啓蒙（功利主義としての）に対する批判に言及しながら、社会学を駆動させる問い、つまり課題を中心に考察することで再発見できる社会学的思考に限られることになる。

2. 課題としての秩序問題

社会学は、「社会」を固有の主題として設定し、かつその主題がいかにして可能かという問いを自らの内にもって反省的な考察を加えるにいたったときに、独自性を標榜できるようになったといわれている（大澤 1997：265, Luhmann 1981=1985：9-33）。すなわち、社会秩序（主題）に関して、それが一般にいかにして可能かという問いを課題とするとき、社会学は自己反省の学としてその熟成の条件を整えたことになる。

ここで、「社会秩序はいかにして可能か」（「Xはいかにして可能か」）という問いを成立させるためには、現実の偶有性（contingency）についての認識が

必要となる。偶有性とは、現に存在している社会秩序が他でもありえた可能性に基づく。それゆえ、社会秩序の「いかにして可能か」という問いの構成は、社会秩序を担う者が、社会秩序以外の何ものかをも実現できるところにある（大澤 1997：266；左古 1998：5）。すると、ある社会的な状態が現実化している（実現化しようと考えられる）のはいかにしてなのか、という形式における「成熟した自己反省」とは、自分たちの生きている社会に対して、それが「いかにして」と反省的に問い続けられること、というような意味になるであろう。しかし、私たちが本稿の課題にそって考えなければならないのは、このような一般の秩序問題における自己反省機能とはいえない。むしろ、その前に、社会に対して課題を見てしまうことや解答することをめぐっての「自己反省」が必要となる。

まず、秩序問題を検討する際には、課題に対して提示される「いかにして」という解答について、それが「現状としての秩序」を説明しようとしているのか、それとも「あるべき秩序」を構想しようとしているのかの間の混乱（盛山 1991：12）は避けなければならない。そこで、再検討の範囲内で必要な秩序問題として、ホッブズのそれと、功利主義（文化あるいは経済学）批判とみられるものに限定して、課題としての秩序問題の性格と解答との関係を概観することから始めたい。

前者のホッブズの秩序問題について、その問いを解明した左古に倣えば、秩序問題は懸案性、とりわけ恐慌における人間の立場から問われる課題としての性格をもつ。イギリスの歴史を振り返ってみた場合、ホッブズの「万人の万人に対する戦争状態」としての自然状態は、17世紀に続いていた王党派と議会派の対立による内乱に対応している。当時の人々は、長期化する内乱の最中にあって、「継続的な恐怖と暴力による死の危険」（Hobbes 1985＝1992：211）を感じており、常軌を逸した群衆の中にいるがゆえに、恐慌の状態に陥っていた。このような無秩序状態の中で、「社会秩序はいかにして可能か」というホッブズの秩序問題は提起される。課題の形式に照らして述べれば、解答として、主題の社会秩序はコモンウェルスであり、「いかにして」は「設立による」社会契約となる。新たに構築することが目指される「設立によるコモンウェルス」

は、理解を欠いた恐怖に理由を与えるべく、あたかも主権者には絶大なる権力があるという擬制に基づいている。そして主権者を中心として、個々人を統制するための市民法が制度化される（左古 1998：175－181）。したがって、「社会秩序はいかにして可能か」は、まず、それが不可能な状態（戦争＝自然状態）から、「このようにして」の秩序のかたちが示される。この「社会」は、秩序の懸案を解消すべく構想されている「あるべき」社会秩序の姿である。

ホブズ的秩序問題について課題とされているところが確認されたならば、次に、私たちは、「功利主義批判としての秩序問題」についても、同様の事柄に注目して見ていくことにしよう。西欧社会学は功利主義文化に対する応答であったといわれているように（Gouldner 1970＝1978：78）、19世紀以降、近代資本主義社会の興隆に伴って生じた功利主義批判の秩序問題もまた、現実的な課題をもっていた。例えば、コントの生きた19世紀初頭のフランスは、フランス革命によって絶対主義が崩壊して階級対立が激化し、また、労働者の運動を抑圧して資本主義を維持する方向がとられ混乱を引き起こしていた。コントは、このような混乱の中で『社会再組織に必要な科学的作業のプラン』に取り組んだ。「精神的・世俗的無秩序状態」（Comte 1822＝1970：72）をもたらす功利主義的秩序問題に対して、「あるべき」社会秩序を構想すべく要請されるのが「社会学」であった。このとき、コントは再組織化の「いかにして」のために、モデルとなる中世の社会（宗教的・道徳的秩序）を探究したのである。すなわち、「功利主義的でない社会秩序はいかにして可能か」という課題への解答は、過去に存在していた「あるべき」社会秩序であった。

エミール・デュルケームやマックス・ウェーバーも功利主義的伝統には批判的で、倫理的価値を重視していた¹⁾、また、パーソンズも1930年代の大恐慌という政治的・経済的危機から、現実的に秩序問題に投げ込まれていたといえる（Gouldner 1970＝1978：186－196）。資本主義的経済や個人主義の発展に寄与した功利主義は、歴史現実的には「秩序問題」（秩序に対する懸案としての）をもたらした。したがって、功利主義（文化）批判をともなって成立する秩序問題は、それぞれ歴史時代的要請を受けたものとなる。

しかし、他方で、社会学がホブズを秩序問題の始まりとし、そして、功利

主義（文化）批判を背景として論じられてきた社会理論の歴史を振り返るとき、功利主義思想は、秩序問題の「別解」として理解されることが多い。ホッブズ以降のイギリス（スコットランド啓蒙）では、アダム・スミスがホッブズの秩序問題に対する「非ホッブズの解答」を展開したと見なされることになる（盛山 1991：5）。この「非ホッブズの解答」とは、社会契約説を批判して、諸個人の合理的選択から自生的な社会秩序の形成を説明したところにある。そして、「別解」を生み出した思考として、いわゆる古典経済学とスコットランド啓蒙思想への批判が、社会学理論の発展過程を貫く一つの基調として認識されている。つまり、「秩序問題」を課題とし、解答を与えるといった同じ流れの中に、ホッブズ、スミス、デュルケーム、パーソンズなどが位置づけられることになるのである。だが、「非ホッブズの解答」という認識は、社会学的思考として適切なのだろうか。（ホッブズの）秩序問題－功利主義（スコットランド啓蒙）－批判－社会学を同一線上で論じ、功利主義思想批判から社会あるいは社会学を説明している社会学的思考のあり方に対して、その有効性の範囲に目を向けなければならない。はたして、スコットランド啓蒙思想の功利主義思想は「秩序問題」を問うているのだろうか。

3. スコットランド啓蒙思想は秩序問題の「非ホッブズの解答」か

スコットランド啓蒙思想家たちが、ホッブズの秩序問題に準じるかたちで秩序問題を課題としているかを考察するには、彼らの道德哲学にみられるホッブズ批判に注目するのが妥当だといえる。というのも、スコットランド啓蒙の道德哲学は、ホッブズ批判を通じて社会認識論を展開しているからである²⁾。

そこで注目すべきは、その批判の仕方、すなわち、ホッブズの秩序問題が課題として成立する上でもっとも重要な、懸案であった戦争＝自然状態をどのように取り扱うかである。スコットランド啓蒙の先駆けとなったアンソニー・アシュレイ・クーパー・シャフツベリは、自然状態の社会性を人間本性に備わる群居の欲求に求め、本性の利己性から示されたホッブズの戦争＝自然状態を、想像による「架空の自然状態（pretended state of nature）」として相対化し

た。デヴィッド・ヒュームもまた、人間は必然的に家族社会に生まれることから社会的存在であるとして、戦争＝自然状態を単なる「哲学的虚構 (philosophical fiction)」と認識している。スミスと彼の師であるフランシス・ハチスンも同様に、スコットランド啓蒙思想家たちは、その道德哲学においてホッブズの戦争＝自然状態が経験的に存在することを一貫して否定している。彼らは、秩序問題を課題にするときに必要であった偶有性、すなわち、社会秩序以外のなにものかが実現しうる可能性を、「想像できるといっただけで実際にはありえない」としているのである。

すると、このような社会認識の上に成立するスコットランド啓蒙思想家たちの功利主義をホッブズの秩序問題の別解だとする指摘は、その妥当性が疑わしくなる。なぜなら、彼らは「社会秩序はいかにして可能か」という問いの重要な部分となる、社会秩序が不可能な場合もありうるということを、それこそ経験的に不可能な哲学的「虚構」としており、そうであるならば、ホッブズの秩序問題を問わずして解答を出したことになるからだ。

見落とされやすいことであるが、ホッブズの秩序問題を課題としているパーソンズ自身は、スコットランド啓蒙思想が秩序問題を問うてはいない（課題にしてはいない）ということに気づいている。「……一八、九世紀において功利主義的な社会思想は、ほとんど永遠の真理と見なされ、わが世の春を謳歌していたのである。しかし、このような事態は、ホッブズ問題が満足な形で解決されたから生じたのではない。それどころか……ホッブズ問題は他愛なく無視され、暗黙の仮定によって隠蔽された」(Parsons 1968＝1976：(1) 154－6)。では、スコットランド啓蒙思想家たちを秩序問題の同列にしてしまう「社会学的混乱」は、どのようなところから生じるのであろうか。それはまさに、社会学が、秩序問題に関しては自己反省できるほどに成熟したからこそといえるかもしれない。

デュルケームやパーソンズの功利主義批判的秩序問題は、規範解という点に共通の特徴が見出される。そのため、功利主義思想に対する批判は、価値規範や状況に対する配慮がなく、自由で独立した諸個人の主観的な利害関心だけが行為を選択させているという解釈に現れることになる。この批判から、スミス

の「非ホブズ的解答」とは、諸個人が自己の行為を合理的選択によって相互に適切なものにするだけで、外からの強制力や他人に対する博愛的な感情による制限もなく、社会秩序が自然に実現されるところにある、と推論される。すなわち、「非ホブズ的解答」とは、有名な「見えざる手」にほかならない。

「各個人は、普通、社会公共の利益を増進しようなどと意図しているわけでもないし、また、自分が社会の利益をどれだけ増進しているのかも知っているわけではない。……自分自身の利得のためなのである。だが、こうすることによって……見えざる手に導かれて、自分では意図してもいなかった一目的を促進することになる」(Smith 1993=1997: (II) 119-120)。

「社会秩序はいかにして可能か」という課題の形式に注意を払って問うている者にとって、スミスは秩序問題に答えているように見えてしまう。いまいちど、秩序問題をより一般化したかたちで記せば、社会秩序以外のことを実現できる者が、社会秩序をいかにして実現させているのか、であった。たしかにここには、「秩序以外の自己利益を実現しようとしている者」と「社会(の利益)」という主題が示されている。「いかにして」は「見えざる手によって」、つまりは「何も意図せずに」「社会の利益を意図せずに」ということもできる。一般的な秩序問題を逆輸入して当てはめると、そう見える。また、功利主義的な個人主義が社会解体を招くという認識をもっていれば、自己利益の追求は「秩序以外」となりうる。さらに、功利主義(的個人主義)の立場からでは、社会秩序がいかにして可能であるかは説明しえないと批判することによって、協定・法規範・モラル・宗教戒律などの価値規範の存在が説明可能であるところ、そして、デュルケームやパーソンズがそのようなかたちで秩序問題の解答を与えようとしているところも、社会学として了解できる。

ただし、それでもなお、スミスが「別解」を示しているということにはならないだろう。まず、スミスでは、自己利益の追求は社会秩序をもたらす行為そのものである。他人の博愛的な行為については、それが社会秩序(経済的な秩序)を成立させているわけではないとしているだけであって、それでは、共感的な道徳的行為が「秩序以外」のなにものかを実現する行為になるかといえ、そのようには述べていないはずである。そうであるならば、このとき、秩序問

題を課題にする理由はもちあわせていない。

かりに、この「いかにして」を「自然にして」という「解答」であるというふうに解釈した場合でも、問題点は残る。社会秩序以外の事実を見いだせないものにとって、これが唯一自然であるといえるのは、ホップズのように社会秩序が人為的なかたちで構想されることに対して、「それは偽りだ」というところにしか、「自然にして」というような「解答」はないのである。それはありていに言えば、問題の存在それ自体の否定という、極端な解決法である。ただし、ここでは正確を期して次のようにいいたい。ホップズの秩序問題の存在それ自体の否認という「解答」を与えたのではない。パーソンズが認めたように、「目的と合理性という功利主義体系の規範的側面が消失するに伴って……秩序の問題が消散してなくなってしまうのである。……人間行為について科学する者が関心を寄せる唯一の秩序、それは……事實的秩序である」（Parsons 1968=1976：（1）184）。

スミスを社会学以前とみなせば、秩序問題に答えていなくても社会学的には何の不都合もないといえてしまうのだろう。別解とされていた「見えざる手」の自生的秩序は、スミス自身が示しているように一国の富を増大させるための政治経済（学）を論じたものであるのだから。しかしながら、そうであるならなおさらのこと、錯覚していることに対しては、社会学として看過できない。社会学が秩序問題に、功利主義を「別解答」として同列に加えてしまうこと、ここにひとつの社会学的思考上の混乱が生じる。問い（秩序問題という課題）の形式が、本来社会学に固有であるはずの「社会」という主題を、他の近隣諸科学もまた同様に扱っているような解釈を許してしまっているのである。「社会秩序はいかにして可能か」という（ホップズの）秩序問題は、いまなお社会学（学）の根本問題として重要な課題となりうるし、関心事である。けれども、それは社会に対して必ず問われる——そのため理論は社会秩序の「いかにして」の説明である——とするならば、逆に、課題に対する偏狭な思考を生じさせてしまうことになる。そこで、偏狭さを解消するためにも、再検討の次なる論点としては、社会学的思考において問われるべき課題は秩序問題だけなのか、ということになる。

4. 社会学に特殊な別の課題

秩序問題が不問にされるという事態を根拠とするだけでは、社会学的思考において別の課題が存在することを説明できない。しかし、功利主義思想批判が、秩序問題の解答の誤りに対してではなく、政治経済学など近隣諸科学との相違を明確にするための、個別社会学的な批判である可能性は検討する余地がある。いまいちど、社会学が成立するためには研究対象（主題）が「社会」であり、それが発見されなければならないということを思い返せば、別の課題に向かうための条件として、「社会はいかにして捉えられるか」が問われうる。社会的に、ひとことで簡潔に述べれば「事実の観察」であるということには異論がなかろう。ならば、ではそれが、一、社会学的思考において特徴的となる（社会学の存在証明になる）のはいかにしてか、そして、二、そこで発見される新たな課題とは何か。このような点から、社会学的思考において重要な、次なる別の課題が説明される。

課題にいたらしめるような、特殊社会学的な思考を駆動させる第一の論点は、秩序問題ではなく社会学について論じているデュルケームに求めることができる。デュルケームは、『社会科学と行動』において、プラトン、アリストテレス、ホッブズ、ジャン・ジャック・ルソーなど、「社会学以前」の政治的・社会的諸事象についての思索を概観し、そこでの支配的な思考を考察している。このとき社会（秩序）は、例えばホッブズのリヴァイアサンであれ、ルソーのいう一般意志から成立するものであれ、人間が「発明し、つくりあげたもの」＝「政治的技術」（Durkheim 1987＝1988：64）によるものになる。

すでに見てきたように、技術論は、いまだ成立していない秩序の「構想」である限りで、「べき」を含意している。また、デュルケームは、産業・商業活動におけるあるべき姿を再構築するのに専心しているのが経済学であるとみている。そのため、政治経済学的技術論は、「諸社会を今あるがままに、あるいは過去において存在してきたままに論述し、説明することを目的としていたのではなく、社会とはいかにあるべきか、社会ができる限り完全であるためには、どのように組織されなければならないのかを探究することを目的としていた」

(Durkheim 1987=1988:110) として批判されることになる。このような批判の中で差異化されるかたちで、社会学的思考は、「社会」を観察する方向へと駆動し始める。政治経済などの政策的な未来に対しては関与しないことによって、社会学の「社会」研究とは、社会が現在あるいは過去においてどうであり、また、どのような諸欲求に対応し、どのような諸条件に適合しているのかを「見ていくこと」といえるようになる。

このことから第二の論点に向かう道筋として、社会を論じる際に構想や技術的な「べき」論にならないために、そして日常生活での偏見的な観念に囚われずに観察が可能になるためには、どのようにすればよいか。それは、「Xがわからない」ということを課題とすることにある。「社会的諸現象の確定的範疇の研究に着手する前に、社会学者は自己の生活の過程において……形成し得た諸観念を一掃することから始めなければならない。……社会現象については、それらが依存する諸原因と同じくそれらの特性についても何も知らないということを原則としなければならない」(Durkheim 1987=1988:124)。

秩序問題で「Xはいかにして可能か」を問う場合、あらかじめX(=社会秩序)について一定の概念規定を与えておかなければ、「他でもありうること」が想定できないのだから、有効に問うことができなかった(盛山1991:21)。まさにいま、正反対の思考が社会学において働くことになる。秩序問題という課題を問わないところに、「Xがわからない」という別の課題が浮上し、探究されることになる。ここで、デュルケームは、現実を与えられているままの社会の状態と、社会が社会自体を認識するその仕方=社会の自己理解(世論状態)を区別し、後者を錯誤的な(部分的かつ不正確な)自己理解として批判している。すなわち、社会(世論)が問う課題と、社会学者が問う課題とを区別しているのである(Durkheim 1924=1985:90-91)。この差異化は、社会学の存在証明として「科学」性=自然科学のようなscienceを表現していることにもなる。「科学とは現に存在するものを研究するものであり、技術とは存在すべきものをめざす諸手段と結びついている。したがって、もし諸社会が、我々がそれをつくったものであるとするならば、我々はそれらが何であるかを問う必要はなく、それらをどのようにつくるかを問わねばならない」(Durkheim

1987=1988：64)。現に存在するものであるならば、それらが何であるかを問う必要性が生じてくる。

いまや、二つの方向性からの差異化（技術論でもなく、偏見からくる誤解・誤認でもなく）によって、社会学者が問う科学的な課題として、「社会とは何か」という特殊近代的な課題が出現する。この「社会とは何か」という課題には、社会学が「社会を認識し理解するために」（Durkheim 1987=1988：110）観察によっておこなわれるということ、そしてこのとき、諸社会の主要な諸機能や諸法則がどのようなものであるかが、社会の自己理解＝個々人には、いまだ知られずにいるということが含意されている。そのため、科学的に措定される特殊で独自の社会学的思考は、諸社会における社会的な諸事実を観察し、それらの事実が生じるときの「一般的諸関係や検証可能な諸法則を発見すること」（Durkheim 1987=1988：122）になるのである。

そして、この「社会とは何か」という課題が社会学にしか求め得ない限定的な課題であることが、いまひとつの差異化＝功利主義（経済学）批判によって主張されることになる。経済学に従えば、社会のうちには個人しか現実的なものは存在しないことになる。しかしながら、人間一般という抽象的な型を想定して個人を非人格化したために、経済学は、個人の独自性よりも非人格的な経済活動に関するものだけを単純化できることになる。このとき、経済学の提示する課題とは、人間一般としての個人が、経済生活という環境の中でいかに行動しなければならないかを問い、技術的「べき」論を導くことになる。一見すると、この経済学の課題は、経済活動の「いかにして」を課題とする経済的秩序問題のかたちをとっている。ここで、社会学からは、現実に対する観察の欠如、現実の人間社会の複雑さ、個人しか見ていない狭隘さなどの批判が成立することになる。言い換えれば、この差異化は、「社会とは何か」を課題とする者からの「秩序問題」批判とみることができる。

まさに、これまでいくつか注目してきたことがより明確になる。社会学的思考における適切な功利主義（経済学）批判とは、さきに「非ホップズの解答」としてみたような秩序問題内部での批判ではないということ。そして新たに、秩序問題を課題にしているから差異化されうるという状況が出現している。し

かしながら、注意を喚起すべく繰り返せば、経済学は秩序問題の課題形式をとっているから批判されるが、スコットランド啓蒙の自生的秩序は秩序問題ではない³⁾。

このことは、デュルケームが「社会とは何か」という課題と関連して、経済学の社会学的思考に対する貢献としているところから説明することができる。デュルケームが認めたのは、社会が法則に基づくという公理を科学の土台とした点、そして、事物の自然性を社会的事象にまで拡大した点にある (Durkheim 1987=1988: 65)。すなわち、「社会」も自然的諸現象と同様に規則性をもつがゆえに、科学の対象たりうるという社会学の基礎を築いた点にある。「彼らは、諸社会のうちに存在する生きた、自然発生的なもののすべてを感じとった最初の人々である。彼らは集合生活が巧妙な方法によって突然つくられ得るものでないこと、またそれは外的、機械的な衝動から結果するものではなく、社会自体の内部でゆっくりと彫琢されるものであることを理解した」 (Durkheim 1987=1988: 67)。

この「最初の人々」の中に、スコットランド啓蒙思想家たちが含まれることは、これまでの考察から容易に類推できる。秩序問題のみを唯一の課題としてしまうときに、自生的秩序という「別解」として批判されていたはずのスコットランド啓蒙は、いまや、その繯れた糸を完全に解きほぐすことができるころまできた。社会学の目的が「社会」を認識し理解することにあるならば、そこに立ち現れる「社会とは何か」という課題から、スコットランド啓蒙は社会学の「導きの糸」として肯定的に検討されるべき思考となる。デュルケームは社会の自然発生性（法則性）の発見において「最初の人々」を認めているにもかかわらず、スコットランド啓蒙の社会学に貢献している最も重要な部分を指摘せずに見逃してしまっている。「社会とは何か」という課題をさらに理解していく上でも、私たちはスコットランド啓蒙の「社会学的思考」から、課題に対する補足説明となる部分を補ってやらなければならない。

スコットランド啓蒙思想家たちの道徳哲学は、「べし（当為）」を論ずる倫理学ではなく、すでに見てきたような秩序問題の否定と社会認識のあり方、そしてどのようなかたちで社会が見えるのかを示したものである。先んじて述べれ

ば、スコットランド啓蒙の新しさは、「社会学的思考」に通ずる「他人」を見出したところにあった。

「社会とは何か」の課題が成立するには、研究対象としての「社会」が観察可能な経験的事実として発見されなければならないが、そのためには、偏向的な視点を相対化して全体の連関を見ることができる視点を獲得しなければならない。スコットランド啓蒙によれば、ホブズ的秩序問題を課題としてしまう認識論的誤謬とは、自分が拠って立つ位置でしか事物を見ない＜視点の不足＞にある。この相対化は、「(関係のない) 他人」を要請することによって認識の妥当性を確保する＜注視者の視点＞を生起させる。このような視点の距離化によって、「社会」が対象としての資格を獲得することになる。

そして、この観察可能な「社会」は＜他人の様相＞を帯びる。しかも、ここで秩序問題が目下の課題となっていないとするならば、そこには他者肯定的な現実——他人は技術を適用「すべき」相手ではなく、適切な行為をする「はず」の相手——として＜リアリティの様相＞を帯びた「社会」が実在することになる。すなわち、「社会とは何か」を課題とする対象としての「社会」は、「他人のかたちで現実にある」⁴⁾。

ふりかえれば、秩序問題からの功利主義（文化）批判は、端的に言えば功利主義的説明にみられる社会認識と現状との不一致であり、基本的に経験的な批判であった。しかしながら、スコットランド啓蒙思想家たちと多くの社会学者の間には、「社会とは何か」という課題を軸にみれば、社会学的思考の根幹となる「社会」に対して経験的な事実の観察をおこなう視点を共有しているのである。

最後に、「社会とは何か」という問いの「新しさ」について若干の考察を加えておこう。新しさのひとつは、三溝が指摘したように、外在的な法から内在的な法則への転換によって説明できる。近代までの法による支配という思考は、すべてが意志によって制御可能であるという発想に基づいている。このような思考では、「社会的諸事実を観察する理由がなかったのである。なぜなら、社会的諸事実とは、それら自体では何ものでもなく、それらが有する現実性はすべて我々の意志だけによって獲得されてきたからである。この見地から提出され

る唯一の問題は……我々は社会的諸事実がどのようにあれかしと望むことができ、また望まねばならないかを知ることであった」(Durkheim 1987=1988: 111)。「社会とは何か」という課題は、秩序が対象に内在するという見方を可能にする。ここで、「社会」は人間の意志のままに形成しうる一種の「素材」ではなく、法則に従う「実在」として思考されることになる。言い換えれば、近代において、社会学的思考から新しく「社会とは何か」という課題が生じたことによって、「社会」それ自体で「何ものか」でありうる、そして「何ものか」として発見されうる世界が開けたのである。

いまひとつは、「Xとは何か」という形式の中で「社会とは何か」の独自性が存在する。「社会とは何か」の独自性は、他の社会科学には見られない「何か」という課題としての問いにある⁵⁾。通常、「何か」という問いは解答「〇〇である」を要請している。むしろ「社会」もまた同様の説明がなされるが、それは決してひとつではなく、ましてや正解などないというのが、社会学的思考においては常識となっている。本稿の考察からすれば、それは、「社会とは何か」が、いまもって課題であり続けていられるような性格をもっているからだといえる。では、逆に、この社会学に独自の課題が、主題や方法に対して要請しているのはどのようなことであるのか。

「社会とは何か」は、社会を社会自体において観察し、記述・説明することを課題とする。この課題を逸脱して、例えば、現象の観察がある目的（人類の哲学的仮説を証明するなど）に到達するための単なる手段にされているとき、社会は「同一色調の中に全く混合されてしまって」(Durkheim 1987=1988: 75-6) いることになる。この否定的表現からわかるように、社会は現実の中で輪郭や色調・階調などをもつ。しかしながら、対象としてはにはわかには知り得ない。人は、ある時代に一定の国家・都市・家族などに属する限定的な存在でありながらも、社会的な現象は人々の関係が複雑に絡み合うことによって生起する。そのため「あるものがどこで始まり、あるものがどこで終わるのかを一見しただけで言うことは不可能である。そのそれぞれを概略的に考慮に入れることがいつの日か可能となるのは、今日辛うじて着手されたばかりの長い、骨の折れる分析のあとでしかない」(Durkheim 1988: 68)。

先の考察では、「何も知らない」という思考に課題の成立を見たが、「社会とは何か」の課題が要請する「社会」という主題は、圧倒的な存在感を漂わせながらも捉えきれず、ときに見えないものでもある。そうであるからこそ、「何か」と問うことによって「社会」の手がかりを見つけようとするのである。それは、分析という方法に現れている。分析は、秩序問題で見たような構築とは正反対の社会学的思考の方向性をもつ。「社会とは何か」という課題が「社会」の分析を要請し、現象が分解されることによって、「我々を相互に結びつける眼に見えないあらゆる種類の無数の関係が識別され、分類される」（Durkheim 1987=1988：78）ことになる。そして、課題は「社会」の抽象化（対象化）も要請する。抽象化は「現実の中から一部分を遊離させ、切り取ること」であるが、「それは架空的存在をあらゆる諸部分から創り出すことではない」（Durkheim 1987=1988：163）のであるから、現象のどの部分、どの側面に「社会」を見出すかということが、いまや探究目的となり、しかも関心や視点、注目点、題材、時代などによって無数に近い可能性が存在することになるのである。

5. 結語

思考は、問いかけによって始まる。社会学的思考においては、「課題」の性質が個別専門領域としての自己呈示の役割を果たしている。ここで、私たちが改めて認識しなければならないことは、社会学には、問いが出現する状況に応じるかたちで、少なくとも二つの、複数の課題が存在しているということである。

その一つ、秩序問題は懸案を解消することを目的とされるが、他の可能性もありうる社会秩序の「いかにして」は「問いの空隙を残しておく能力、つまり当たり前のことをなかなか理解しない能力」（大澤1996：174）として社会学的思考を働かせる。一方で、「社会とは何か」もまた、社会学における課題であると認識されるならば、問いというものが消滅させたくても空隙が残ってしまい、課題としての「社会」の理解が容易ならざるものであるということを知

る。私たちの住む三次元的空間に似て、あるいは「他人の他人さ加減」に似て、隙間なく埋め尽くすこと、抽象し尽くすこと、あるいは隅々まで一度に把握することなど、到底できないのが「社会とは何か」の「社会」である。

このように、社会学は研究対象（主題）を「社会」あるいは「社会的」なるものに定めているが、研究において当の「社会」を承認させるのは難しい。それは、いくつも“諸社会”（国や地域や共同体や組織など）が存在するとか、パースペクティブの違いという表現で済ませられることではない。「社会」という同じ対象でも、秩序問題が課題になるときは、そのときどきの懸案から構築されるべきそれぞれの社会が理論化される。「何か」という課題では、他人が説明した「社会」以外に「社会とは何か」と問え、「社会」を発見し分析して説明することができる。私たちが社会学的思考をしている以上もちうる課題が複数であることから、そして、構築と分解という相反する両義的な課題を持ち合わせているところから、認識対象の発見と学問の一体性とは密接に結びつかないという事態が不可避な現実として立ち現れるのである。

このような、「社会」の捉え難さに真摯に向き合おうとすると、「社会学は何のために研究しているのか」＝「社会学とはどのような学問か」には非常に答えづらくなる。だが、批判されるべきは、「社会」に対して無自覚であったり、相対性を論じて困難を済ましてしまうことのほうである。なぜなら、そのような「思考なき」社会学は、課題における主題の意味を吟味することも、課題自体につきあうことも回避して、不安も関心もなく、ただ他者の理論を承認あるいは否認するだけなのであるから⁶⁾。

[註]

- 1) デュルケームとウェーバーの理論展開を功利主義（文化）批判から分析した先行研究として、宮島（1985）がある。
- 2) この点について、詳しくは有泉（2002：166－169）を参照されたい。
- 3) この議論では、経済学と社会的な一般的秩序問題との関連性は未検討のまま残される。これについては稿を改めて論じることにした。
- 4) スコットランド啓蒙の「社会学的思考」が、近代における社会認識の構成および経験的な社会観を提示した点で社会学的転換の重要な契機であったことについては、

有泉（2002：169－174）で論じている。

- 5) 政治経済あるいは政治哲学的な「Xとは何か」という問いかけとの相違は、例えば、ジョン・ロールズの正義論から示すことができる。1960年代にアメリカ社会で起こってきた「正義とは何か」という問いに対して、ロールズは、新たな共生ルールの定式化を目指し、その主義主張にいたるまでのプロセスが「何か」であった。言い換えれば、ここで「何か」は問われていても決して課題ではない。ロールズの平等で自由な第一原理、機会の公正な均等と格差原理をもつ第二原理などから理解できるように、むしろ、「しなければならない」という解答から課題が生起する。ひとつは「公正としての正義はいかにして可能か」という実践すべき課題として。いまひとつは、「なぜ公正でなければならないのか」という問いかけ（リバタリアンからの再批判）としてである。See Rawls, John, 1971, *A Theory of Justice*. Nozick, Robert, 1974, *Anarchy, State, and Utopia*.
- 6) 逆に、本稿の立場は、社会学において頻繁に問題視される社会学者の「自分棚上げ問題」として批判されるかもしれない。この問題に対して、グールドナーは「自己反省の社会学」として、社会において「他の人々を見る時と同じようにおのれ自身を見つめる」（Gouldner 1970＝1978：31）という課題を提出している。しかし、そうするのであれば、社会学的思考においてこの問題が課題となりうるのか、あるいは、この課題における社会学的思考の何たるかを知るところから始めるべきであろう。そもそも、他の人々を認識し理解し尽くすことができていないのに、先んじて自分自身がその「社会」だとして観察するのはいかにして可能か。あるいは、(哲学的な)「私とは何か」ではない＜私自身＞とは何か。これらが、他人から「私というもの」について考察する従来の社会学的なアイデンティティ論などではないかたちで、はたして社会学の課題となっていくのだろうか。

[参考文献]

- 有泉正二，2002，「スコットランド啓蒙における社会学的思考——利己主義批判の構成から——」『年報社会学論集』15：165－176。
- Berger, Peter L, & Kellner, Hansfried, 1981, *Sociology Reinterpreted: An Essay on Method and Vocation*, New York: Doubleday, Anchor Press. (=1987, 森下伸也訳『社会学再考』新曜社.)
- Comte, Auguste, 1822, *Plan des travaux scientifiques nécessaire pour réorganiser la société*. (=1970, 霧生和夫訳「社会再組織に必要な科学的作業のプラン」『世界の名著36』中央公論社, 51－139.)
- Durkheim, Émile, 1924, *Sociologie et Philosophie*, Paris: F. Alcan. (=1985, 佐々木文賢訳『社会学と哲学』恒星社厚生閣.)

- , 1987, *La science sociale et l'action*, Paris: Presses Universitaires de France. (=1988, 佐々木交賢・中嶋明勲訳『社会科学と行動』恒星社厚生閣.)
- Gouldner, Alvin W, 1970, *The Coming Crisis of Western Sociology*, New York: Basic Books. (=1978, 岡田直之ほか訳『社会学の再生を求めて』新曜社.)
- Hobbes, Thomas, [1651] 1985, *Leviathan*, New York: Penguin. (=1992, 水田洋訳『リヴァイアサン』4分冊, 岩波文庫.)
- Luhmann, Niklas, 1981, „Wie ist soziale Ordnung möglich?“, *Gesellschaftsstruktur und Semantik*, Bd. 2, Frankfurt am Main, Suhrkamp, S.195-285. (=1985, 佐藤勉訳『社会システム理論の視座』木鐸社.)
- 宮島喬, 1985, 「功利主義批判と社会学的思考の展開——デュルケームとウェーバーを通して」『思想』727: 58—81.
- 大澤真幸, 1996, 「社会学を駆動する問い」大澤真幸編『社会学のすすめ』筑摩書房, 172—188.
- , 1997, 「社会秩序はいかにして可能か——社会学を社会学する——」井上俊ほか編『現代社会学の理論と方法』岩波書店, 257—305.
- Parsons, Talcott, [1937] 1968, *The Structure of Social Action*, 2 vols, New York: The Free Press. (=1976—1989, 稲上毅・厚東洋輔・溝部明男訳『社会的行為の構造』5分冊, 木鐸社.)
- 左古輝人, 1998, 『秩序問題の解明 恐慌における人間の立場』法政大学出版局.
- Salomon, Albert, 1945, “Adam Smith as a Sociologist,” *Social Research*, 12-1: 22—42.
- 三溝信, 1982, 「社会学成立の再検討」『社会労働研究』28 (1-2) : 131—151.
- 盛山和夫, 1991, 「秩序問題の問いの構造」盛山和夫・海野道郎編『秩序問題と社会的ジレンマ』ハーベスト社, 3—33.
- Smith, Adam, [1776] 1993, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, Oxford: Oxford University Press. (=1997, 大河内一男監訳『国富論』3分冊, 中公文庫.)
- 厚東洋輔, 2000, 「小特集／ディシプリンとしての社会学 コメント I 「社会」概念のアイデンティティとキャパシティ」『ソシオロジ』45-1: 46-49.
- 堤史朗, 1995, 「社会学的思考への批判」『明星大学社会学研究紀要』15: 1-15.

電子メールを利用した短期カウンセリングの特徴について

幸 田 達 郎

榆 木 満 生

【問題と目的】

1. 現状と問題点

日本において本格的にカウンセリングという分野が関心を集めたのはつい最近のことであり、日常生活のなかで定期的にカウンセリングに通うという習慣が確立しているとはいいがたい。

一方で、現代社会のコミュニケーション手段の進歩・発展は著しい。近年の電子メールの普及は大きく、特に若年層では携帯電話を用いて電子メールのやりとりを頻繁に行なうなど、電子メールの利用に関する抵抗感は少ないと考えられる。

電子メールを利用するにあたっては、顔が見えないことと、実際に対面せずに対話を行なうことができるという特徴がある。実際に相手に対面するわずらわしさが無いということを利点と考える人もいであろう。

こうしたことから、実際に対面して行うカウンセリングを避けたいと考えるクライアントにとって電子メールという手段を用いてカウンセリングを受けることは、心理的な抵抗感が少ないと考えられる。

このような背景のなかで電子メールを利用したカウンセリングが行われるようになってきている。

しかし、カウンセリングは、たとえば國分（1979）によれば「言語的および非言語的コミュニケーションを通して行動の変容を試みる人間関係である」と定義されているように、“非言語的コミュニケーション”はカウンセリングを行ううえで大切な要素として考えられている。上述の定義に従えば、言語のみ

によって行なう電子メールでのカウンセリングはカウンセリングとしての条件が欠けている。また、平木・袈岩（2001）によるカウンセリング技法の入門テキストでも、対面による面談をカウンセリングの技法の前提にしており、電子メールによるカウンセリングに関する記述は全くない。

しかし、電子メールによるカウンセリングにも非言語的コミュニケーションが含まれると考える立場もある。武藤（2002）はメールの分量や冗長性、句読点、間や沈黙などを非言語的要素としてとらえ、これらの非言語の読み取りが電子メールを用いたカウンセリングを行ううえで重要であることを指摘している。

2. 本論分の目的

実際にカウンセラーとして対処した電子メールによるカウンセリングのなかから典型的な実例を紹介することによって、電子メールを用いたカウンセリングの可能性と限界について考察したい。

【方法】

1. 対象

ホームページで公開している電子メール相談窓口に応募したクライアント。このうち、典型的な3例を本論文でとりあげた。

2. 手続き

クライアントは開設されているインターネットの窓口案内されている電話番号に電話をかけ、インテークを行なう窓口担当者に対して電話で主訴や病気の有無、他の相談機関に対する既往歴を述べる。クライアントはその内容によって各カウンセラーに振り分けられる。カウンセラーは、窓口担当者からクライアントの情報を聞き、自身がそのクライアントを引き受けるかどうか決定する。

そのクライアントを引き受けることが決定し、クライアントが料金を振り込めば、原則として相談回数3回の往復を基本とするカウンセリングが開始され

る。クライアントは、相談のやりとりが3回に満たないまま相談をやめることもできるし、逆に延長することもできる。3回の相談は、そのクライアントを引き受けた1名のカウンセラーが継続して担当するが、クライアントが相談回数の延長を希望した場合、クライアントは自分を担当するカウンセラーを替えることができる。

カウンセラーはクライアントから電子メールで相談を受けた場合、電子メールが発送された後、原則として72時間以内に返答の電子メールを発送しなければならない。

なお、メールがいったん事務局のウェブを経由するため、カウンセラーとクライアントの本当のメール・アドレスは表示されないために、互いの匿名性、安全性が確保されている。

ただし、カウンセラーの経歴や得意分野などの情報と顔写真は、クライアントが相談を申し込む際の画面から見ることができる。最初の3回の相談については、クライアントがカウンセラーを選ぶことができないので申し込み時点では、どんなカウンセラーがいるのかということを最初に知ることができるだけであるが、実際に自分を担当するカウンセラーが決まった後は、自分を担当するカウンセラーの特徴を略歴や顔写真などから確認することができる。

3. 期間

200X年7月～12月までの6ヶ月間に相談のあった内容を対象とする。

以下に、差し支えない範囲で本人が特定できないようクライアントの属性や相談内容を変えて、典型的な3例の相談概要を呈示する。

【事例呈示】

第1例

クライアント：40代女性。

主訴：職場での周囲への対応とキャリアの悩み。

第1回相談（a月b日）

企業に対して専門アドバイスをする事務所に入った。本人は国家資格を所有しているが、資格を持っていない上司の下で手伝いをする立場のアルバイトとして入社した。自分の所有する国家資格が活きていないと感じている。特に最近では上司が自分に仕事をあまりくれなくなってきたうえ、上司の手伝いから外された。新しく入社した無資格の若いアルバイトの人が自分の代わりに上司の下につくようになった。その上司は新たに雇ったアルバイトに対しては手のひらを返したように仕事を与えている。進退を考えたが、事業主からは国家資格を活かせるような立場に昇進させてもよいと3ヶ月前に声をかけられたが、入社後3年も経っており、いまさらのように異動の話をもちかけられることに対して不信と動揺を感じており、返事ができずにいる。どうしたらよいか教えて欲しい、というものである。

上述の内容であったが、クライアントは深夜、日付が変わってから電子メールを発信しており、カウンセラーは朝、電子メールを確認し、同日の夜間に返答することができた。

クライアントからの実際の相談メールには、上述の内容に加えて、会社の業務内容や上司との関係、自分自身がその会社に採用された経緯などが詳しく記述されていた。ただし、電子メールでのやりとりなので、クライアントが語った内容のうち、カウンセラーがもっと掘り下げて知りたい事実があってもその場で聞き出すことができなかった。クライアントにとって当然のことであってもカウンセラーにはわからないことがある。たとえば上司の性別や年齢、クライアントの代りに来たアルバイトの性別などである。これらの事実関係が確認できないまま、返答の電子メールを出さなければならなかった。カウンセラーが状況を具体的に理解し、感じるためには、より多くの情報が必要であった。

第1回返答（第1回相談当日）

クライアントからの第1回目相談に対するカウンセラーからの第1返答の内容は、①これまでクライアントがついていた上司の役職などの立場や年齢など上司についての情報、②職場の人数や年齢、性別、国家資格所有者と非所有者

のおおまかな割合、正社員とアルバイトなどの人員構成など、職場の雰囲気を構成する要素について、③クライアントが気にしている新入アルバイトの入社時期や仕事振り、性別などの印象、④入社の経緯のより詳しい内容、なぜアルバイトとして入社したのかという詳細とその時の気持、入社後の気持の推移、⑤今後のキャリアについての考えかた、たとえば、自分にとって国家資格がどのくらい活かしたい資格なのか、資格を活かすためには違う事務所に移っても構わないとどのぐらい考えているのか、どの程度、仕事を自由にできるようになりたいと考えているのかなど。

これらをカウンセラーの側から質問するとともに、事業主から昇進をもちかけられたまま3ヶ月間も返答を留保していることから、職場で鬱々と過ごしている状況が想像されたので、できるだけ周囲から好印象を持たれるよう、朝の挨拶など具体的に職場のなかで暗い印象を持たれずに、好印象を持たれるような簡単な行動を勧めた。

第2回相談（第1回返答の4日後）

やはり、クライアントの電子メール発信は深夜遅く日付が変わってからであった。

カウンセラーからの質問に対する回答が中心であった。それとともに、新しく上司の下についたアルバイトと比較してや、自分の将来の希望に比べて、自分自身の能力が劣っているのではないかという不安が述べられていた。

第2回返答（第2回相談当日）

前回までのやりとりは、事実確認という色彩が強いものであった。クライアントの心情や感情の動きよりもクライアントの置かれている客観的な状況に焦点が当てられたものであった。今回の返答では、クライアントが提供した事実に対して、ひとつひとつ共感していく姿勢を示すことに重点を置いた。クライアントが回答してきた内容をカウンセラーがきちんと受け止めたという姿勢を示し、信頼関係を強めるとともに、クライアントが報告してきたそれぞれの場面での感情について、カウンセラーが深く共感したという姿勢を示すことを心

がけた。そうすることによって、今後（第3回以降）に行うであろうカウンセラーからの具体的な提言をクライアントが受け入れられる状態をつくっておくようにした。

具体的には、①クライアントの入社時の具体的状況とクライアントの心情の振り返りと共感、②クライアントの入社時の具体的状況のなかで、ゲシュタルトでいうところの「図」の部分と「地」の部分を入れ替えたかたちでのクライアントの周囲にいる職場の人々の心情の推測（本人からの視点ではなく周りから本人を見るとこう見えるのではないかという推測）、③現在のアルバイトという立場についての振り返りとクライアントの心情への共感、④専門職としてのキャリアの発展とその途上での現在の立場、今後の意思についての確認など、クライアントにとっての事実と心情を踏まえてのカウンセラーからの解釈とはげましを行なった。

今回の返答の全体の流れとしては、まず、クライアントが答えてくれた詳細な事実をきちんとカウンセラーが受け止めているということを理解してもらうための事実関係の繰り返しと、それぞれの事実に対して共感をひとつひとつ示すことによる信頼関係の構築、さらに、その後で、クライアントの自信の無さを変えるための、認知の組み替えを行なうための下地づくり。そのためのクライアントの認知に対する他の解釈の可能性の提示という構成であった。

特に、カウンセラーの視点から見てこれまでの事実関係を詳細に分析することによって、新しく上司の下についたアルバイトと比較してクライアントが感じている自分の能力についての解釈や、自分の将来の希望に比べて、自分自身の能力が劣っているのではないかという不安が根拠の薄いものであり、かつ歪んだものであったように見えたため、その部分の認知に関して、カウンセラーの側からの再度の事実確認と他の認知のしかたの可能性を提示した。

第3回相談（第2回返答当日）

現在の会社入社時点からの深い振り返りと、その背景について、また、当時の不信感のようなものまで深く思い起こして記述してきた。

また、当時は、仕事さえあればそれだけで助かると思いアルバイトで応募し

たが、仕事を進めていくうちにプロとして責任を持って仕事をしたいという希望が大きくなるとともに責任の大きさを考えるとためらいも感じるという心情の揺れが詳細に語られた。また、元上司との関係についても、これまであたりまえのように持っていた依存心と敬意、現実の状況について冷静な分析ができるようになってきた。また、新しく入ったアルバイトに対しても、その仕事を詳細に観察し特徴を具体的な場面とともに評価するようになってきた。この第3回の相談で、クライアントには自分自身の状況と事実を客観的にみつめる眼が芽生えてきた。自分自身の今後のキャリアに対する姿勢を睡眠中に見た夢とともに自覚しつつある状態に至った。

第3回返答（第3回相談当日）

これまでクライアントから報告のあった状況をもう一度整理し直し、それぞれの場面でクライアントが抱いていた不適切と思われる想像上の危惧（この場面では、私は周囲からこう思われていたに違いない、など）に対して、周囲はその場面ではそんなことを考えていなかったのではないかと、または、こう考えていたのではないかと、より現実性の高い可能性を根拠と共に提示した。

これまでの相談と応答のやりとりのなかで、カウンセラーが理解した周囲の人々の特徴とその人たちがクライアントをどう見ているのかについての可能性を呈示した。本人が自信を失っている仕事ぶりについても、これまでのやりとりから理解できた現実の可能性を呈示した。これまでのやりとりだけでは分らない上司との関係等については、これまでのやりとりだけではまだ何も言えないことを伝えた。

カウンセラーから見た感想をフィードバックするとともに、自分自身について自分で客観的に考えることを続けるように支援した。クライアントが感じている自身の能力不足についても、“能力”を考える際の視点をカウンセラーから呈示し、能力を構成するどの要素が自分にとって高いか低いか、具体的な場面での根拠を元に、発揮できたあるいは発揮されなかった能力を考えて整理し直してみるように指示した。

また、今後の可能性として、①専門が活かせる立場への昇進がある場合、②

昇進が無くこのまま今の職場で働き続ける場合、③昇進が無く今の職場を辞めて転職する場合、④何らかの理由をつけられて会社の側から不本意な異動をさせられるかまたは最悪の場合として今の職場を解雇されてしまう場合、の4つの場合について、それぞれの場合の短期的な影響と長期的な影響、それぞれの場合に採り得る選択肢とその評価について考えられるように場合分けを行なった。

さらに、自立やキャリアについて、自分自身が何を大切だと思うかSchein (1978) のキャリア・アンカーの考えかたを紹介し、5つのキャリア・アンカーのなかで自分は何を一番大切と考えるかを自分自身で考えるよう指示した。

最後に、まだまだ何かのきっかけで心の揺れは起こるだろうことを指摘するとともに、今回の電子メールでの相談のやりとりを参考に自分自身のその場での感情をいったん離れて、客観的に問題を整理してみることに、自分自身にとって何が根本的に大切なのかという原点を確認して考えること、将来についての選択肢を検討してみることによって考えを整理すると、今、自分がやるべきことが分かりやすくなるという指摘を行なった。

また、クライアントが伝えてきた夢の解釈として、会社との距離感や疎外感、元上司からの巣立ち、新しいチャレンジに対する恐れや抵抗感と同時に、自分自身がすでに鍵を手にしていてと考えているのではないかとの指摘を行なった。また、その夢の解釈として、初めは困難な道であっても、障害を超えて快適に進んでいくという希望を持ちはじめているのではないかとの指摘も行なった。

現在の状況のなかで、自分が何をを選び取るかが大切である、ということを確認して、より良い方向に進むようカウンセラーとしての願いを伝えて3回のセッションを終えた。

第1例の考察

このケースの場合、クライアントは自分自身の頭の中で「周囲からこう思われている」「自分自身はこうしたいのだけれども周囲から否定されそうなので言い出せない」という悩みが大きく、そのために、自分の意思を周囲に向けて伝えられないという状態であった。それぞれの立場の人から押し付けられた自

分の状況を不本意ながらも受け入れ、相手の意図や自分の能力に対して疑心暗鬼になっている状態であった。

そのために、カウンセリングの内容としては、①まず第1に思い込みではなくできるだけ客観的に自分の置かれている状況を分析することと、②自分自身が本当にやりたいことは何であるのか自分にとっての座標軸をきちんと意識すること、③与えられた環境のなかで自分の進みたい方向を意識したら、それに向けて「自分はこうしたい」「こうなりたい」という意思を積極的に発信して周囲に自分の考えや気持ちを理解してもらうこと、の3点が必要であると考えられた。しかしながら、3回のやりとりだけではそこまで至ることはまず不可能であると考えられたため、上の①～③までのうち、どこまで進めるかというのが課題であった。

幸い、クライアントは相談の継続を希望し、相談回数の延長を続けて、その結果、元上司への感情の整理ができ、自分の意思を事業主に伝え、事業主からフィードバックを受け、時に涙を流すことがありながらも、事業主との話し合いから自分の希望と会社での処遇との調整を進めつつある。また、事業主を自分のメンターとして活用するための働きかけを少しずつ行っている。事業主から自分への支持を得られる状態をつくるために、積極的に事業主に働きかけをしつつある状態である。

今回のケースは、電子メールという文字を中心とする相談手段を用いることにより、事実の記述と周囲が自分をこう見ているという記述との間の矛盾点をカウンセラーが詳細に分析することができた。また、入社時点では、会社の側が考えるのと同じキャリアの希望を本人が持っており、変わってきたのが自分のほうであったということを、これまでの経緯を具体的に文章にすることで気づくことができた。そのことにより、現在の自分の希望を理解してもらえないという事業主に対する不信感から脱却でき、新しく芽生えた自分の希望をきちんと会社に伝えるための働きかけが必要であるという認識を得ることができた。

漠然と感じている自分自身の能力不足についても、電子メールでは、具体的に文字にして説明しなくてはカウンセラーに対して説明することができない。しかし、具体的な説明をしていくと、自分自身の能力が不足しているという証

拠はあまりなく、他の人のほうが優れているという証拠も具体的な文章にしてみるとあまり信憑性のないものになってしまい、そうしたことから、漠然と感じている自分自身の能力不足という問題も、別の理由（元上司との関係など）から由来しているのではないかというヒントをカウンセラーとクライアントが得ることができた。そういう意味で、文字のやりとりを主とする電子メールによるカウンセリングの特徴がうまく活きたカウンセリングになったものと考えられる。

第2例

クライアント：20代男性。

主訴：転職を決めたが、新しい会社でうまくやっていけるかどうかについての悩み。

第1回相談（c月d日）

現在勤務している会社で大きな仕事を任されたが精神的にも肉体的にも追い詰められたような状態になってしまい、肝心な場面で気を失ってしまい、プロジェクトも失敗してしまった。上司からもプロジェクトの失敗を自分のせいにされ、転職を決意した。転職先も決まり、あと1ヶ月で転職するが、転職先の選定を甘い気持ちで行なったとの悔いもあるし、また失敗して新しい会社で周囲に迷惑をかけてしまいすぐに再度の転職をしなければならなくなるのではないかという不安もある。このような気持ちを解決してから転職したい。

第1回返答（第1回相談翌日）

クライアントが大きな挫折感を味わっており、失意のなかでの相談であるので、クライアントへの全面的な共感から始めた。

クライアントは自信を失っているが、それが必ずしもクライアントひとりの責任ではなく、プロジェクト管理者の不手際と、責任回避からプロジェクト全体の責任を押し付けられているという構図がクライアントからの第1回相談の状況説明のなかから感じられた。これは、クライアントがそう説明していると

いうのではなく、クライアント自身は説明しておらず、諦めに近いかたちで表現している事柄全体から浮かび上がってきた内容であった。第1回相談は、客観的な状況からそのような構図が背景にある可能性が感じられる内容であった。そういった状況をカウンセラーが理解しているということを示すために、クライアントが説明した現状をカウンセラーなりにまとめ直して返答した。そのなかで、カウンセラーは自身の若い頃の体験を述べ、仕事のうえで、時々、常識では考えられないような理不尽なことが起こり得ることと、寄せ集めのプロジェクトでいざ重大な失敗が発生すると責任の擦り合いに発展し、逃げ足の遅い若い社員が生け贄のようなかたちで責任を押し付けられることがあるということに理解を示す記述を行った。クライアントが置かれた理不尽な立場が決して信じられないものではなく、現実に関わり得ることであるとして受容する記述を行ない、カウンセラーが同様な体験をした当時、カウンセラーが感じた感情や、その後の展開を開示し、クライアントのキャリア再生のストーリーの伏線になるようにした。

このようにクライアントの立場や感情をできるだけ受容し深く共感していることをまず示したうえで、次回、クライアントの側から具体的な事実を返信するよう依頼した。

また、転職にあたって、自身の能力の足りなさを気にしていたが、実際には、これまでの職務経験や抜擢の経緯を見ても、クライアントの能力はそれまで社内で高く評価されていたことが窺えた。順調に推移していたところを大きなプロジェクトでの失敗とその責任の押し付けに合いの後に自信を失ったものと考えられたので、クライアントが自分自身の失敗の原因帰属を自分自身の能力にもってくることは適切ではないと考えられた。そこで、次回の返信では周囲の役割と責任を分析するように依頼するとともに、そのプロジェクト以前の社内での評価と、以前持っていた自分の能力への自信を記述してくれるよう求めた。また、すでに月末に控えた転職についても、失敗の可能性だけではなく、プロジェクト以前の能力と自信への再生のチャンスであるとして、視点をプラスの方向に変えることを提案した。

こうしたうえで、具体的な事実や感情、経済的な事情や転職先についての質

問を行なった。クライアントの精神的な落ち込みが激しいことを想定して、答えなくない質問には答える必要が無い旨を確認するとともに、他に自分が書きたいと思った内容があればそれを自由に書くように指示した。

第2回相談（第1回返答の3日後）

カウンセラーからの質問への回答として、具体的な事実や感情を記述してきた。転職先の利点として通勤時間が短くなることを答えたが、すぐに「改めて考えてみると次の会社に対しても無関心かも知れません」と関心の無さを強調していた。

また、今いる会社で新しく導入される人事制度に対する不安から今のタイミングの転職が良かったと思う反面、本当に今転職することがいいことなのかどうかという不安も持っていることを伝えてきた。

かつては自信を持って仕事をしてきたが、失速したプロジェクト以降、自信を失ってから1年経ち、少しずつ気持ちが落ち着いてきている。今では自信や気力は他人に出してもらうものではなく、自分の中から出すものであることを理解しており、そのきっかけが欲しい状況であるとのことであった。

第2回返答（第2回相談の翌日）

前回のクライアントからの回答に基づき、カウンセラーから第2回の返信を行う前に、インターネットからクライアントの現在および転職先企業のデータを検索し、業種や資本関係、具体的な仕事の内容などを確認し、今回クライアントが行なう転職の何がクライアントにとってプラス要因として考えられ、どんなことがマイナス要因として考えられるのかを、事前に頭のなかで整理した。

そうしたうえで、実際の返答メールを作成した。

返答の具体的内容は、クライアントのこれまでの強みとなってきた能力や、現在の会社での先輩や上司との関係、これまでのクライアントの実務手腕の特徴、クライアントがつまずききっかけになったプロジェクトで起こったこと、クライアントが意識を失った場面での同僚の方々の行動についての確認と解釈、インターネットのホームページから知り得た現在の会社の特徴や風土と転職先

の特徴や風土の違い、その違いから考えられるクライアントにとってのプラス要因、などであった。

第3回相談（第2回回答の7日後）

カウンセラーがクライアントからの情報を元に漫画的に描写した一般論として会社で起こり得る不合理なことに対して、「少し笑ってしまいました」という明るさが見られた。それとともに、まさに、自分の状況もその描写のとおりであったと、自分の体験を笑いとともに客観的に見つめるという側面が見られた。また、以前のようにふさぎ込むことが無くなり、まだ気分の浮き沈みはあるにしても、以前の人間関係を客観的に見られるゆとりが出てきたことを表明してきた。

また、転職先企業に対しても、カウンセラーが返答メールで描写したような雰囲気のある会社であることを願う気持ちを表明してきた。

一方で、転職までの期日が差し迫っており、まだ自分のやる気が十分沸いてこないことに対する焦りと、もう一度自分の自信を取り戻すために沢山勉強をし直したいという希望が述べられるとともに、転職までの時間の過ごし方について質問があった。

第3回回答（第3回相談当日）

時間的に差し迫った転職について、プラスの側面に焦点を当てることと、あせらずに気持の変化を待つことが大切だということを指摘した。

また、転職までの短い期間にできることとして、これまで自分の強みであった技術を復習するための勉強に充てることもできるが、どこか温泉などに旅行してゆっくりとした時間を過ごすという選択肢もあることを伝えた。これまであまりゆっくりと休みを取っていないことや、プロジェクトなどでほとんど家族とともに時間を過ごしていないことや、その後、会社で倒れたり転職をしたりということで配偶者に対して心配や負担をかけている可能性があったので、家族の信頼と結束を確認するためにもゆっくりと旅行に出るという選択肢もあることを伝えた。

また、人生で回り道に思えたことでも、長い時間が経ってみると、その回り道の経験が意外なところで役立っているということや、いつ再生しても遅くないということを指摘し、休むときには休みを取って、家族の支えがあれば焦らず着実に進んでいくことも可能であると指摘してセッションを終えた。

第2例の考察

すでにクライアントのなかで考えもある程度まとまっており、行動についても転職というかたちで具体的に決まっていた。あとは、自分の行動に対する自分自身の納得とそのための考えの整理を行なうことがクライアントの課題であった。

電子メールによるカウンセリングの特徴についてであるが、一般的には、電子メールによるカウンセリングでは、クライアントから聞きたいことを質問しても、次の電子メールで回答してもらうまで待たなければならない。このように、カウンセラーが知りたい情報がすぐには手に入らないことが多い。しかし、1回相談を受けたら、必ずクライアントへの返信をすぐに行なわなければならないので、不完全な情報を元に返答を出さざるを得ないという足枷がある。

しかし、今回の場合には、クライアントから聞いた内容をインターネットで検索し、情報を整理し、カウンセラーの経験と照らし合わせてフィードバックをすることができた。そういった意味で電子メールによるカウンセリングの特徴が役立った。会社の特徴などはインターネットで調べてからクライアントに対して回答することができる。

電子メールによるカウンセリングの時間差が長所として生きる場合もある。

第3例

クライアント：20代女性。

主訴：新しい職場で周囲の眼が気になって電話対応がうまくできないという不安。

第1回相談（e月f日）

派遣社員として現在の職場に入って2週間経つが、職場のなかで派遣社員＝即戦力というイメージがありそうでプレッシャーを感じる。また、周りが静かなので自分の電話対応に周囲が聞き耳を立てているのではないかと気になる。そんななか、会社全体の取り組みとして電話対応のマナーについて注意喚起するポスターが貼り出され、余計、プレッシャーを感じてしまう。落ち着いて電話に出るためにはどうしたらいいのか教えて欲しい。

第1回返答（第1回相談翌日）

クライアントの主訴と、それに関連することの確認を行なった。さらに、クライアントにとって他にも気になることがあれば、次の電子メールで返信してくれるように依頼した。

クライアントが徒に不安にならないように工夫しながら提言を行った。

特に、今後、親しく話しかけることのできそうな人を探すために、こちらが逆に周囲を観察する気持を持つということを提案した。また、お昼ご飯とか、会社の帰りに、職場のひとつと時間を過ごしてみること、周囲の眼は新しい人に対して確かに興味津々ではあるが、じきに飽きてしまうこと、緊張や違和感も時間が経つと消えていくことが多いこと、朝礼や飲み会の席で、自分から「私は電話の対応がうまくできなくて、それが今いちばんの悩みです」と言ってしまうと、周囲はそういうものとしてクライアントを認識してくれるので気楽になること、などを指摘した。

クライアントからの第1回相談の内容は全体として健康感が感じられるものであったため、試しに行動してみることが可能な具体的提言を多少行ってみたが、単に、転職にともなう一過性のものなのか、元々、対人恐怖症のようなものを持っていてそれが、電話対応について先鋭的に出ているのか、最初の相談からは判断ができなかったため、これまでの過去の情報や対人接触の傾向などを返答してもらえよう依頼した。

第2回相談（第1回返答の3日後）

カウンセラーからの返答が早かったことに対する喜びとともに、返答を読んですごく気が楽になったとの感謝が冒頭で述べられていた。全体の内容も、ウキウキした楽しそうな文面であった。新しい職場になじんできているようであり、職場の人間関係の印象も好意的であると捉えている内容であった。週末に自分のために歓迎会を開いてもらえることになったことを楽しみにしているとのことであった。その歓迎会で友人や話しかけることのできる人が沢山できることを期待していた。また、過去は営業職についており、人付き合いは好きであるが、電話だけは顔が見えないので多少苦手意識はあったかも知れないとのことであった。

第2回返答（第2回相談翌日）

クライアントの明るい様子からカウンセラーが安心したという気持ちを伝えた。昼食を共にする人たちから女性同士の人脈が広がっていくことで職場の情報が色々入るだろうことと、週末の歓迎会で「電話で話をするのが苦手なので、何か気づいたことがあれば指摘してください」とこちらから言うてしまうということを提案した。それとともに、まだ新しい会社名がスラスラ出てこないことは当然なことだから、家で電話に出たときに言わなければならないセリフをこっそり練習してはどうかという提案を行なった。

第3例の考察

電子メールでは、相手の表情や様子を見ることができないので、相談内容の記述が少ない場合には、実際の状況を推測することが難しい。そのために、クライアントの抱える問題がどのくらい深刻な背景を持っているのかは、1回目のやりとりだけでは判断できない場合が多い。

今回のケースでは、わざわざ対面カウンセリングに通い、高い金額を支払ってまで相談するほどでもない、ちょっと気になる悩み程度の相談であり、2回目のやりとり以降は特に相談が無く、2回で相談を終了した。

【考察】

1. きわめて言語的な関係であること

電子メールだけでやり取りをするカウンセリングというものは、文字だけによるきわめて言語的なやり取りである。事実関係を説明する際に文章で伝えるために口頭で伝えるよりも論理的になる。そのために、クライアントが事実だとして語った内容であっても認知に歪みがあれば説明に矛盾が出やすい。クライアントの発言を何度も読み込むとそのような矛盾点が浮かび上がることがある。クライアントの説明の矛盾点をカウンセラーが指摘し、それをクライアントに伝えることが対面で会話するよりも容易である。対面で伝えるよりも理性的なかたちで相手に伝わるので、それを受け取るクライアントの側も理性的な次元で認知の歪みを自覚しやすいのだと思われる。ただし、感情を伝える際には、文章という手段は説明的になりやすいし、感情を伝えるのに必要な表情や声色や発言の抑揚、間などを使用できない。そのために、感情にともなう状況の説明や思いを具体的に表現する必要がある。カウンセラーのみならずクライアントにも文章による言語表現力の高さが求められる。また、カウンセラーはクライアントの感情への共感を示す際に、意識的に状況や体験を描写し直して自分の“言葉”にして伝え返さないと共感は伝わらない。たとえばIvey and Gluckstern (1974) にみられる“かかわり行動”や「はげまし」のような通常のカウンセリングで基本として求められる受容の手法は文字では通用しない。しかし、逆に文字を使い詳細な説明を積み重ねることによって、共感は深まり、本論文の第1例のように3回という短期間のセッションのなかで象徴的な夢の話を引き出すことができる。しかもそれはクライアントの側から自発的に行われている。

2. 相手の非言語的反応が見えないこと

文字だけを手段とすることのもうひとつの側面として、相手の反応が見えないということがある。相手の表情が見えないために、本論文の第3例の最初のやり取りの段階では相手の問題が深刻な対人不安なのか一時的な不安なのか

完全には読み切れなかった。電子メールによるカウンセリングでは、特に、クライアントの相談メールが短く情報量が少ない場合にはこのようなことが多くなる。ひきこもりやうつ状態にあるクライアントなどは文章が短くなることもあり、そうしたなかから相手の状態を読み取ることが困難な場合がある。

3. 匿名性

電子メールによるカウンセリングは、匿名性が確保され、顔を合わせることがないという性質から2つのタイプのクライアントにとって負担が少ないと考えられる。第1のタイプは自身が抱える問題に対して、わざわざ対面カウンセリングに及ぶ必要は無いと考えるようなタイプであり、第2のタイプは自己イメージが低かったり対人恐怖を持っている場合やうつ傾向が高くわざわざ定期的な面接に出て行くことを避けたいタイプである。

4. 相談と返答の時間差があること

やり取りの時間差がカウンセリングを進める上で最も大きな困難であると感じられた。クライアントの発言のなかで確認したいこと、また、基本的事実としてカウンセラーが知っていなければクライアントに返答を返しにくいことをその場で確認できないままクライアントに返答しなければならない。1回相談があれば、必ずそれに対して1回返答を返さなければならないからである。

5. 今後の課題

電子メールを利用したカウンセリングの普及はまだ発展途上である。今後の課題として長所を活かし、短所をカバーするような理想的な対面カウンセリングとの組合せや使い分けのパターンを探ることと、電子メールを利用したカウンセリングに関するデータを蓄積し、その特徴を統計的な根拠を背景として客観的に記述することがあげられる。

【引用文献】

- 平木典子・巖岩秀章 編著 2001 カウンセリングの技法―臨床の知を身につける― 北樹出版
- Ivey, Allen. E. and Norma B. Gluckstern, Norma. B. 1974 *Basic Attending Skills*. Massachusetts: Microtraining Association. (福原真知子・梶山喜代子・國分久子・楡木満生 訳編 1985 マイクロカウンセリナー “学ぶ―使う―教える” 技法の統合：その理論と実際― 川島書店)
- 國分康孝 1979 カウンセリングの技法 誠心書房
- 武藤清栄 2002 電子メールの表現とコミュニケーション―非言語と病理の読み取りを中心に― 現代のエスプリ, 418, 46―57.
- Shein, E. H. 1978 *Career Dynamics*, Addison-Wesley. (キャリアダイナミックス 二村敏子 他 訳 1991白桃書房)
- 杉溪一言・中澤次郎・松原達哉・楡木満生 1995 産業カウンセリング入門 日本文化科学社

質問紙研究のための実験デザイン

土 田 昌 司

1. はじめに

心理学における研究手法として実験は、さまざまな点において厳密で信頼性の高い方法であると考えられている。一般に研究者は、研究仮説が実験により検証可能であるのならば、実験的検証を試みるのが適切であると考えている。しかし、実験による研究がいつでも行えるわけではない。実験を行うことが難しい対象や研究環境も存在している。例えば、教育現場においてデータを収集する場合や治療場面において効果を与える変数を検証する場合などが該当する。測定環境への影響や倫理的問題は、研究にとって大きな制約となることがある。これらのように、研究や測定そのものが制約された環境である場合には、通常の実験室における統制実験は不可能である。このような制約された研究環境においても研究の信頼性をなるべく高く扱うために、これまで、さまざまな方法が開発されてきた。例えば、主に行動療法における1被験者の治療場면을想定して発展させてきた一事例研究デザイン（Barlow & Hersen, 1984 高木・佐久間（監訳）、1988）や幼児や学校におけるフィールド研究で用いられてきた準実験デザイン（南風原, 2001）などがこれに該当する。これらの方法は、実験室実験が行えないために実施される妥協的方法という以上に多くの利点を持ち合わせている。

これらのように実験室研究が不可能なために開発された方法に対して、実験室研究では得られない利点を重視する実験的方法もある。その1つに実験的操作を伴った質問紙法による研究があげられる。このような研究では、実験室研究のように厳密な統制がなされないことや被験者の運動反応が測定できないので、研究者の測定したいことが本当に測定できているのかどうか問題となる。

しかし、質問紙を用いた研究では、1度に多数の被験者からデータを得られることやさまざまな視点から多面的に反応を測定することができるなどの利点がある。

一般に、研究環境にはさまざまな制約がある。また、実験や調査などの研究法は、それぞれ利点と欠点を持ち合わせている。これらの研究状況の中で、最も適切で信頼性や妥当性の高い方法を選択すること、そして、その研究法の信頼性や妥当性を明確に記述することは、とても重要な問題となる。これらにより、研究上の問題点を補うことやこれまでの方法では得られない信頼性の高いデータを得ることができる。しかし、実験室研究以外の研究法では、研究方法そのものが体系的にまとめられていなかったり、研究の信頼性や妥当性を表す基準が明確にされていなかったりすることもある。

2. 質問紙を用いた実験研究の利点と欠点

実験室研究では、実験環境や条件を統制し研究者の扱いたい変数のみを操作することにより、厳密に研究対象に影響を与える変数を検証できる。しかし、一般に、実験室研究では、場所や日時の拘束があり少人数で行われる。これらのことから、他の研究方法に比べ参加への敷居は高い。さらに、実験参加は承諾を得られた者のみであり、研究者にとって“よい被験者”のみのデータ収集が行われてしまうこともある。これらの意味で、実験室研究は、日常と切り離された特殊な環境における研究法ともいえる。しかし、このため、拘束時間が比較的長くできることや被験者への負担が多少大きくとも参加してもらうことができる。また、少人数の実験では、ボタン押しなどの運動反応や生理反応などの被験者の直接的な行動を測定できること、実験条件のランダム化やカウンターバランスを厳密にできること、などの利点もある。

しかし、これらの利点は、逆にいえば、時間拘束が短い実験や運動反応を測定しない実験、厳密な実験環境の統制が必要ない実験では、適切なデータ収集方法とはいえない。さらに、このような状況において、分析方法上たくさんの被験者のデータ収集を行う必要がある場合には、効率的なデータ収集方法では

ない。また、研究上の制約として、実施場所や実施時間が長く確保できない場合、個別のデータ収集ができない場合には、実験室研究は適用すらできない。これらの場合には、多人数に対する質問紙による実験を行う方が、実験環境の統制は弱くなるが、緊張しない参加しやすい雰囲気の中で、一度に多くのデータを収集できるという利点がある。このような実験は、スプリット調査やパネル調査と呼ばれ、操作を伴う刺激についての印象評定や自由記述課題などで行われている。

しかし、このような研究方法には、問題点もある。多人数場面の実験では、実験環境の統一や刺激呈示のランダム化をすることが難しい。さらに、被験者が多数存在するために生じる集団の効果が存在する可能性もある。これは、社会心理学の実験のように集団状況であることが測定の目的とされる場合においては、それが重要な変数であるが、集団であることを研究対象としない研究では、統制しなければならない変数となる可能性がある。質問紙を用いた実験研究では、従来の実験や調査研究では考えてこなかった問題を考慮する必要が生じる。

本研究では、多人数の被験者が存在する場面において、研究者が操作を加えた対象に対して、質問紙法により被験者から反応の収集を行う研究方法についての、さまざまな方法やその問題点、信頼性や妥当性の基準について考察する。

3. 実験デザイン

実験的操作を伴った多人数に対する質問紙法による研究では、実験室研究とは異なる研究上の制約が生じる。ここでは、さまざまな実験状況の制約を想定して、多人数に対する質問紙による実験計画を取り上げ、その特徴や問題、信頼性や妥当性の基準について考察する。

ここで想定される実験は、何らかの刺激が呈示されて、それについての評価を事前に配られた記入用紙（質問紙）に記入するという事態である。刺激は同時に多数の被験者に呈示され、集団場面において評定が要求される場面である。

3.1 少数の条件

ここでは、比較的条件数の少ない場合を想定した実験について考察する。条件が少ない場合には、通常の実験に近い実験計画を構成することができる。

3.1.1 同一条件の反復が可能な計画

1人の被験者に何度か同じ条件を経験させることが可能な場合には、実験条件や試行の順序効果を相殺する被験者内計画を考えることができる。この場合、試行の順序関係（例1）や条件の前後関係（例2）のすべての組み合わせから試行系列を構成できるので順序効果のある程度相殺できる。例1では、2種類の条件の順序組み合わせを2つの組み合わせ（12と21）の視点と4つの組み合わせ（例えば、1221や1212）の視点において順序相殺できる系列を構成している。例2では、条件の前後関係の組み合わせが同じ数になるように構成している。例1では、試行数が条件間で同じであるが前後関係の組み合わせ数は同じにならず、例2では、条件間の試行数は同じにならないが前後関係の組み合わせ数が同じになる。また、条件をランダムに組み合わせることで試行系列を構成可能である（例3）。しかし、これらの方法が通常の実験と異なるのは、集団呈示では、被験者毎に異なる試行系列の構成ができないので、順序相殺されたとしても全員が同じ順序で試行を経験しているという点である。このため、相殺を考慮して構成された実験計画においても試行の順序効果は完全に排除できない可能性がある。特に、ランダムな系列構成においては、順序の影響が残る可能性もある。この対処方法として、パターンの異なるいくつかの試行系列を異なる被験者群あるいは同一被験者にある程度の時間経過後、呈示する方法を考えることができる。この方法により、ある程度順序効果をなくすることができるかもしれない。しかし、可能であれば、考えられ得るすべての条件の組み合わせによる試行系列を利用して実験を実施することが望まれる。

例1 系列の順序による相殺

1 2 2 1 2 1 1 2 1 2 1 2 2 1 2 1

※数字は条件，系列は試行順序を表している。

例2 系列の前後関係による相殺

1 2 2 1 1 1 1 2 2 1 2 1 1 2 2 2 2 1 1 2

例3 同条件を2回実施する場合のランダム系列

1 1 2 2 1 2 1 2 1 2 2 1
2 2 1 1 2 1 2 1 2 1 1 2

同じ被験者に同一の条件を複数回呈示するこれらの方法の利点は、同じ条件が多数回測定されることにより、偶然の影響を低められ安定した測定データを得られるという点である。しかし、同じ刺激を呈示することができない場合やそれが適切でない場合には用いることはできない。また、このような実験が可能なのは、1つの試行への反応が短時間で測定できる場合や実施時間を長く用意できる場合である。例えば、印象測定のように1つの刺激に対して多数の項目への反応が要求される課題の場合には、実施時間や試行順序、測定ストレスなどの影響の点から適切とは考え難い。

同じ被験者に同一の条件を複数回呈示するのは適切でないが、相関関係を分析したい場合や時系列的な被験者群の変化を追跡したい場合、多数の被験者群が用意できない場合には、試行間の時間を十分に空け同一被験者への刺激呈示と測定が行われる。どれくらいの時間を空けるのが適切であるのかの基準は明確にされていないが、一般に、以前に同様の実験を受けたかを聞いたり、以前の回答の記憶を聞いたり、することにより、以前の実験についての意識性が影響の基準にされている。しかし、このような質問そのものが実験への関連を意識させたり、意識にのぼらない影響や好ましくない偶発的な要因が測定に影響をおよぼしたりする可能性もある。この可能性も考慮に入れ測定の細かな状況を記述する必要があるだろう。

3.1.2 同一条件の反復が不可能な計画

同じ被験者に同一の条件を複数回呈示できない場合には、被験者に同じ刺激を1度のみ呈示して順序効果は被験者間で相殺する方法を考えることができる。

例えば、A群には条件1条件2の順で刺激呈示を行い、B群には条件2条件1の順に刺激呈示を行いデータの集計をする（例4）。このときには、2群の等質性が問題になるので被験者の割り当てについて十分配慮する必要がある。この方法では、A群とB群において条件が入れ替えられるので順序効果を相殺できると共にデータを条件間で比較することにより順序効果や群間差の存否を検討できる。このときに、順序効果の問題が生じたり、相殺効果を混入させたりしたくない場合には、被験者群の等質性が補償されていれば、それぞれの群の後半のデータを分析から除外すればその影響は実験後に排除できる。

例4 系列効果の被験者間相殺

A群：1 2

B群：2 1

※A群B群は、異なる被験者群を表している。

同一の被験者に1刺激しか呈示できない実験も想定できる（例5）。これは、測定を繰り返すことや順序効果を生じることが適切でない場合、実験に多くの時間が必要な場合に用いられる方法である。実験条件間の刺激の差異がわずかなものであったり、連続して呈示すると実験の意図が読みとられてしまったりする可能性がある実験などに適用できる。これらの場合には、1刺激を1群に呈示する手続きを条件数分異なる群に繰り返す方法を用いる。この場合、等質な条件数分の被験者群を用意しなければならないという問題が生じる。さらに、この方法では、群の等質性のみでなく、測定の時間的なずれや偶然生じる要因の影響を考慮する必要もある。

例5 同一被験者に1刺激の呈示

A群：1

B群：2

3.2 多数の条件

条件が多数ある場合の実験では、完全なランダム化やカウンターバランスをとることが難しくなる。そこで、この方法では、条件提示の順序効果の極端な影響が生じないようにしたり、順序効果の影響についての基準を明確に記述したりする必要がある。

3.2.1 ランダム系列

多数の条件がある場合の最も単純な実験計画は、多数の条件をランダム順序で同一被験者群に提示する計画である（例6）。しかし、この場合、提示順序や系列位置の影響を受ける可能性がある。被験者群を複数用意できるのであれば、異なるランダム試行系列をそれぞれの被験者群に実施して集計すれば順序効果をある程度相殺できることになる（例7）。しかし、実際には、被験者群を多数用意し実験を行うことは難しい。ランダム系列を用いた実験では、信頼性を高めるとともに信頼性の評価が重要となる。

被験者内計画で提示順序効果の影響を取り除く方法として、評価に慣れていないために生じる変動の混入を排除するために試行系列の始め数試行のデータを採用しないという方法を用いることができる。この採用しない試行には、本試行とは異なる条件を用いたり（例8）、本試行と同じ条件の試行を用いたり（例9）することができる。例9のように、本試行と同じ条件の試行を始めに実施する場合には、本試行の試行系列の後半に同じ条件の試行を用意する方が順序の影響が小さくなると思われる。また、この始めに行った条件と後半に行った同じ条件間で一致性を算出し比較すれば、順序効果の影響を評価できる。この一致性の基準は、固定的な基準値により決めたり、他の条件との相対的な大小関係から決めたりすることが可能である。さらに、この一致性は、同じ条件を2度提示することが適切であるかについての評価にも用いることができる。もし、2度提示が適切でなかった場合には、後半の同じ条件試行を分析から除外することができる。

また、例7のように、いくつかのランダム試行系列を異なる被験者群に提示する場合には、同じ条件を群間で比較し評価することができる。この比較は、

平均値の差やその系列パターンにより行うことができる。同じ条件間の平均値が異なる場合、実験環境が同一であったのであれば群間差や呈示順序の違いによる差である可能性が高い。逆に、被験者群がほぼ同一であることが補償されている場合には、実験の環境差や呈示の順序効果である可能性がある。特に、多数の被験者を用いて実験をする場合には、実験環境に制約があることが多いと思われる。例えば、実験日時や実験室、呈示装置などの違いが、予測外の影響を与える可能性もある。この方法は、順序効果の要因を排除できれば、実験の環境差の検討にも用いることができる。また、評定値の大小関係のパターンを群間で比較することもできる。この比較は、平均値の大小関係の順序系列を群毎あるいは被験者毎に作成し、順序相関などにより行うことができる。この方法では、平均値の群間差は評価されないが、順序効果についてのみを評価できる。

例6 ランダム順序系列

6 1 3 2 5 4

例7 ランダム系列による被験者間相殺

A群：6 1 3 5 2 4

B群：2 4 5 1 6 3

C群：1 5 3 6 4 2

：

例8 捨てる試行を含む計画

A B 3 5 2 6 4 1

※A Bは、本試行と性質の異なる試行であることを表している。

例9 順序効果を評価できる計画

5 2 6 1 4 3 2 5

3.2.2 系統的な系列構成

実験では、呈示順序の完全相殺を行ったり、条件数や試行系列数分の被験者

群を用いた実験計画が望ましい。しかし、このような方法は現実的には難しい。そこで、構成される試行系列を意図的に構成して、測定データの安定性を高めたり、信頼性の評価をしたり、する方法を考える必要がある。

1 被験者に多数の条件を呈示する場合には、1 被験者群が同じ試行系列を経験することになる。このことは、例えば、類似した条件が連続したり、刺激強度が偏ったり、することによりデータが歪んでしまう危険性が一般の実験計画以上にあることを意味している。これらのことから、単にランダムな系列を呈示することにより生じる偶然の危険性を避ける必要がある。このため、1 被験者群に1 試行系列の条件呈示を行う被験者内計画では、呈示する試行系列を注意して構成する必要がある。一般に、類似した条件が系列上近くにあったり、規則的に配置されたりすることは問題があると思われる。この類似や規則は、研究者の意図しないところで被験者が意味づけてしまうこともあるので、研究者はあらゆる視点でこの可能性を考慮しておく必要がある。

また、完全相殺はできないがいくつかの被験者群が用意できる場合にも同様の統制をする必要がある。例えば、2つの被験者群であれば、完全に試行系列を逆転させたり（例10）、前半と後半に系列を分割して順序を変えたり（例11）するなどの方法が考えられる。これらの方法においても順序効果の評価がある程度可能である。順序効果の評価は、それぞれの条件毎に被験者群間の平均値を比較することにより可能である。系列が完全なランダムの際には、系列差が均等に異なるのであれば被験者群差のみであったと考えられるが、不均衡に異なる場合には順序効果が存在した可能性がある。また、系列順序を逆にした場合には、系列距離に応じた群間差が認められたときに順序効果があった可能性が高いと考えられる。

例10 試行系列の逆転

A群：5 6 2 3 1 4
B群：4 1 3 2 6 5

例11 系列の前半・後半の入れ替え

A群：5 6 2 3 1 4
B群：1 4 3 6 2 5

3.3 特殊な条件構成

これまでの実験計画では、比較する条件は対等の重みを持った等質な条件間の比較であった。しかし、実際の条件比較においては、このような場合ばかりではない。例えば、刺激強度が操作される場合や基準刺激との比較で評価がなされるような場合がこれに該当する。

3.3.1 刺激強度

刺激の物理的強度や意味性などが操作された場合、刺激への反応基準が変化する可能性がある。このことから、例えば、刺激強度の弱いものあるいは強いものから呈示を始めた（例12）、事前に強度の最大のものと最小のものを呈示した後、本実験の測定を行ったり（例13）するなどの方法が必要になる。物理的な刺激強度の場合には、精神物理学的測定法を用いることも可能であると考えられる。有意味刺激の場合には、刺激強度の低いものから始めていかなと刺激強度の低いものへの影響が大きくなる可能性があると考えられる。ただし、このような場合の測定データの解釈には、順序効果があることを考慮に入れる必要がある。また、反復呈示が可能であれば、事前にすべての刺激を呈示した後に本実験を行うという方法も適用できる。

例12 刺激強度順の呈示

1 2 3 4 …

※数字は、刺激強度の大きさを表している。

例13 刺激強度の事前呈示

1 5 1 2 3 4 5

3.3.2 基準刺激と比較刺激

次に、基準刺激との比較で評価がなされる場合を考えてみる。この場合、基準刺激は基本的には、比較刺激に先行して呈示されなければならない。この計画の最も単純なパターンは、基準刺激の次に比較刺激の呈示を行う組み合わせ

(条件)を複数回同一の被験者に繰り返す方法である(例14)。また、被験者内計画に問題がある場合には、条件数分の被験者群を用意し、1条件を1被験者群に実施する方法を用いることができる(例15)。しかし、この方法では、被験者群の等質性や順序効果の問題が生じる可能性がある。これらを考慮する方法として、A群には、異なる条件の刺激呈示を行い。A群と同時にB群には、同じ条件を繰り返して呈示し比較する方法を考えることができる(例16)。この方法では、まず、初回の条件を群間比較して等質性を検討できる。ここで、もし、等質性が認められなかったとしても、群間の差異を差し引いて分析することができる。また、順序や偶然の要因が働いたとしてもB群は同じ条件を繰り返しているので、現れた差異をA群から差し引いて分析することができる。

例14 基準刺激との比較をする被験者内計画

基準—比較1 基準—比較3 基準—比較2

例15 基準刺激との比較をする被験者間計画

A群：基準—比較1
B群：基準—比較2

例16 基準刺激の繰り返し測定

A群：基準—比較1 比較—比較2
B群：基準—比較1 基準—比較1

3.3.3 2要因計画

ここまで述べられてきた実験計画は、基本的に1つの変数を扱う計画であった。ここでは、応用例として、2つの変数を扱う計画を考える。1つの実験で2つ以上の変数を扱うことができれば、交互作用を検討することができる。2要因の計画では、すべての要因が被験者内あるいは被験者間計画であれば、これまでの方法を適用可能である。しかし、これらの方法では、多くの試行数あるいは被験者群が必要になる。そこで、これらの中間的な計画となる2要因の

混合計画を考えてみる。この場合、被験者内要因は順序相殺の問題、被験者間要因は等質性が問題となる。これらの対処には、これまでの方法を用いることができる。これまでと異なるのは、1刺激が2つの属性を持っている点である。このため、被験者間要因の要因Aはこれまでと同様の問題を持ち合わせているが、要因Bはそれぞれの被験者群に異なる順序で呈示することにより順序相殺ができる（例17）。このような方法を用いることにより、より効率的な検証が可能になると思われる。

例17 2要因の混合計画

1群：

A	1	B	1
---	---	---	---

A	1	B	2
---	---	---	---

2群：

A	2	B	2
---	---	---	---

A	2	B	1
---	---	---	---

※A Bは要因、数字は水準を表している。

4. おわりに

本研究では、質問紙を用いた実験の実験デザインとその問題点、信頼性や妥当性の基準について考察した。このような方法を用いた研究は、認知研究や感性研究などの印象測定や感性評価においてよく用いられている。しかし、これらの研究では、実験研究で確立されている方法論はあまり応用されていない。質問紙を用いた実験では、一般に実験室研究より信頼性や妥当性が低くなりがちである。この意味においても、信頼性や妥当性を記述すること、そして、これらを高くする方法の開発と適用が必要である。

一般に、研究方法には利点と欠点があり、研究環境には制約がある。この上で、最も正確にデータが収集できる方法を選択しなければならない。しかし、実際の研究方法の選択過程においては、利点と欠点は一長一短の関係にあるので、データ収集の方法をその状況における総合的な判断で、最も欠点が小さく利点が大きくなるように妥協を強いられることになる。このときには、さまざまな方法の選択肢から利点と欠点を秤にかけなければならない。

本研究で取り上げられた方法の選択を検討する上で、最も重要で基本的なこ

とは、実験的方法による検証が可能であるにもかかわらず、単に実施の容易さから選択される方法であってはならないということである。また、データ収集の制約が実験手続きにより解決可能であるにもかかわらず、不適切なデータ収集を行いデータ収集後に統計的な手法により、分析上解決するという方法も用いられるべきではない。研究方法の選択は、あくまで信頼性や適切性を規準になされるべきである。

本研究では、質問紙による実験法のすべてを取り上げられたわけではない。本研究で触れられなかった方法が他にもある可能性がある。また、本研究で取り上げられた方法は、いくつかを組み合わせることにより、より複雑な実験計画が可能になる。さらに、質問紙を用いた実験のみではなく、さまざまな研究への応用の可能性もある。本研究は、完成されたものではない。しかし、多くの発展の可能性を秘めている。今後、さらに、詳細に質問紙を用いた実験研究方法について検討して行く必要がある。

引用文献

- バーローD.H.・ハーセンM. 高木俊一郎・佐久間徹（監訳） 1988 一事例の実験デザイン—ケーススタディの基本と応用 二瓶社 (Barlow, D.H., & Hersen, M. 1984 *Single case experimental designs: Strategies for studying behavior change* 2nd ed. Pergamon books.)
- 南風原朝和 2001 準実験と単一事例実験 心理学研究法入門—調査・実験から実践まで 南風原朝和・市川伸一・下山晴彦（編） 東京大学出版会

外国人観光客の誘致への提言

下 田 將 文

はじめに

訪日する外国人の観光目的、日本の観光に対する視点などが見直されつつある。時あたかも2004年は明治の始めに女性としては始めて東北・北海道を旅し、その著書にて日本のローカルの原風景を紹介したイザベル・バード（Bird Isabel 1831－1904）の没後100年にあたり、Inbound Tourismへの取り組みへの問題点の摘出と的確な観光プログラム策定が急がれている。

幕末より1970年代前半に至る欧米客を主体とするの外国人観光客の流れが、1970年代後半より、観光出国が自由化された、台湾、韓国、中国などアジアからの観光客の増加に伴い、それまでの日光、鎌倉、箱根、京都、奈良などの寺社を中心とした欧米観光客の観光のパターンが様変わりしている。しかし、日本人の出国が1600万名を超えていることに対して、入国する外国人は500万名以下である。

現状は、非常にアンバランスな状態である、円高は永久に続くわけではなく、今後の為替の動向によってはInboundとOutboundのバランスが好転することもあるかも知れないが、現時点では可能な限りの企画力及び行動力によって現状をなんとか打破すべきである。そのためには、現在の訪日外国人観光客の現状を正確に把握して、その誘致策を真剣に考えるべきである。これらの問題に関しては、政府でも「Welcome Plan 21」にて各種の施策を打ち出しているが、どちらかといえば総論及び守りとも言えるささやかFundamentalsの充実であり、攻めの部分の施策にあまり触れていない。

このような現状を踏まえて、以下に、特にグループで動くツアー客を主体に、長年にわたり訪日観光客に接してきた体験より、その流れ、問題点の指摘をし、

何よりもミスマッチングを防ぐことを考慮して、その誘致対策について、ささやかな提言を致したい。

1. 訪日外国人観光客ツアーの主な潮流

第二次世界大戦の以前及び大戦終了後に来日した、訪日外国人観光客はどちらかというと欧米客が多く、日本側のLand Arrangementを行なうTour Operatorのお仕着せな観光地、観光スポットを巡っていたが、現在はアジアからの観光客が主力となっておりInboundの潮流は大きく変化している。

1) 主力は、アジアからの観光ツアー

現在のInbound Touristの主力であるアジアからの訪日観光客、特に台湾、香港などからのツアー客は、主に在日のアジア系住民のLand Operatorによる、コースの選定と、ツアーの運行が行なわれ、福岡・博多、大阪、名古屋、東京などの大都市に宿泊をして、ショッピング、ナイトツアー及びディズニーランド、USJ観覧などをメインターゲットとして、行程の途中で京都などは通過しながらの観光となっている。つまり従来型のお仕着せのツアープログラムが大きく変化しつつある。これらのアジアからのツアーが、現在の国内の訪日観光客の主力となっており、欧米よりの観光ツアー客は目立たなくなっている。

最近では、特に中国本土よりの訪日観光客が増えており、現在の年間約9万名が2010年には10倍以上になるであろうといわれている。つまり従来型の観光スタイルが大きく様変わりしている。アジアからの観光客が増えることは、アジアからのツアーに焦点を絞ってLand ArrangementをしているTour Operator及び交通機関、宿泊施設、物販業などにとっては、非常に喜ばしいことでもある。

2) 欧米からのツアーの現状は

アジアからのツアーが増加する反面、従来型の欧米客に焦点を合わせていたInbound業界（運輸業、宿泊業、レストラン業、土産物業、他）としては、そ

の縮小傾向に危機感を持っている。このままではInbound業界の全体のバランスを欠くことになる。従って数が期待できるアジアからの観光客を大切にすると共に、欧米観光客の誘致にも力点をおく必要がある。

日本は、幕末の安政の開国以来、近代国家の形を作り、革新し、成長させるために財政的、知的、技術的に欧米からの多大な助けを得て来た、そのことにより日本人の欧米志向はいまだに否定できないのが現実である。事実、外国からの観光客の誘致のための第一線にあるJNTO（国際観光振興会）の在外事務所は、ニューヨーク、ロスアンジェルス、サンフランシスコ、ロンドン、パリ、トロント、フランクフルト、シドニー、ソウル、北京、上海、香港に設置しており、欧米シフトであることは歴然としている。

従ってInbound Tourismに関連する人々にとって欧米からの観光客・観光ツアーの誘致は大きな関心事である。

2. 欧米人観光ツアーの衰退とその原因は

欧米からの観光客の誘致のためには、先ずツアー客が減りつつ要因を突きとめる必要がある。色々な要因があるが、その内の大きなもののみに就いて考えてみる。

1) 円高及び為替の交換レート

最初に、円高の問題を確認しておく必要がある、1ドルが360円の固定相場時代は、ドルは日本国内においては、現在の3倍以上に使うことができた。しかし、1971年スミソニアン合意により為替は固定レートよりフローティングレートとなり、円は一挙に16.88%の切り上げを求められ、その後1985年のプラザ合意を経て、円は急速に高くなっていき、特に1985年のプラザ合意後の翌年はInbound Tourismは壊滅的な被害を蒙った。

現在では1ドルは110円程度にまで、高くなっている。従って、欧米からの訪日観光客は減少したままである。反面、欧米からのビジネスマンは増加しており、観光客とビジネスマンが混在しており、訪日観光客を対象とする

Segmentが正確にできていない、それ故に欧米からの訪日観光客の減少の実態は隠れてしまっている。

但し逆に日本国内からのOutboundは、かつての1ドル360円時代の三分の一程度の費用であり、Inbound Touristの3倍以上の旅行者が出国しており、一面では円高の利益を輸入品と共に享受しているわけであり、円高を一概には否定できないが、訪日を望む外国人観光旅行者を誘致する為には大きなマイナス要因となっていることも事実である。

2) 旅客船から大型航空機の就航に

第二次世界大戦前の太平洋航路には、太平洋の女王といわれた日本郵船の秩父丸、鎌倉丸、浅間丸などが日米間を結び、大戦の終了後は、American Presedent LineのCleaveland号、Roosebelt号などが訪日観光客を運んで来たが、その後、航空機が取って代わり、DC4、DC6B、DC7Cなどのプロペラ機の時代を経て、ジェット機時代に突入しB707、DC8などが太平洋でその覇を競ったが、次いでWide Bodyのジャンボと呼ばれるB747、DC10、AirBus300-330などが就航し、一挙に300－500名の旅客を運ぶようになり、大量輸送時代が到来した。船舶及びプロペラ機の時代の米国からのツアーのDestinationは、横浜、神戸、東京であったが、現在は日本を飛び越えて直接中国以遠に到達が可能となり、その結果、日本着のツアーの割合が減少している。

3) アジア諸国特に中国との観光資源の競合

次のマイナス要因は、かつては旧ソ連の鉄のカーテンに対して竹のカーテンといわれた中国への観光入国が開放されたことにある。このことにより、かつては「オリエンタル情緒」を希求する欧米人は、その思いを日本において満たそうしていたが、大型ジェット航空機の就航もあり、日本を飛び越えてオリエントそのものの中国各地に直接向かうツアーが増えていった。

中国は、敦煌、秦の始皇帝陵、兵馬俑、万里の長城、雲崗石窟、紫禁城などの文物、4千年の歴史を偲ばせる街や村落のたたずまい、雄大な長江沿岸の風景、桂林の水墨画的な景観などの全てが、スケールが大である、また、タイ、

ミャンマー、カンボジア、チベットなどには仏教遺跡が多く、その全てがAtractiveである。

それに対して、に日本の景色・文物、文化遺産などは、すべからく箱庭的であり、元来がアメリカ、ヨーロッパなどの大陸で育ち、雄大なものを好み、大雑把に自由な行動を好む面が多い欧米人は、日本における文物に関して、細かい説明を聞くことを苦手とする観光客も多く、特に「わび・さび」、「禅」などの説明に辟易する人も多く、自由に歩き回りたい欧米よりの観光客の多くのツアーは、日本に目を向けなかったといえるケースもある。

4) 日本各地の都市化の問題

また、日本全土ともいえる、急激な都市化により、何処までも続く赤や青の屋根のマイホーム、高速道路、海にかかる大きな橋などで、田園的、牧歌的な日本の原風景が失われていき、加えて交通渋滞・事故の多発などで、「癒しの心」を求めて来日するリタイアした高齢層は、日本滞在中に絶えず緊張感を強いられるような現実もある。

交通網の充実・開発により、都市圏と地方の生活文化が平準化されることは歓迎されることであるが、日本の原風景が少なくなり、欧米人観光客が日本に持つイメージ変化しつつあることを、現実として認識する。

5) 日本側の思い込みによるLand Arrangement (地上手配) のミスマッチング

ツアーの流れの項で述べたように、アジアからのツアーに関しては、日本在住の同じ民族のツアーオペレーターがLand Arrangementをするために、訪日ツアーとのミスマッチングは比較的少ないが、欧米からのツアーに対しては、日本側のツアーオペレーターの従来型のツアーへの思い入れが大きく、そのために訪日客側とミスマッチを引き起こしている現実もある。

3. 訪日外国人を誘致するための円高対策などは

円高の問題、海外各地からの観光客特に欧米人に対するミスマッチングの間

題、失われる原風景など日本離れの原因を考えてきたが、それらに対する対応策はあるのであろうか、それらのマイナス要因を踏まえつつ、欧米よりの観光客、併せてアジアからの観光客の誘致のためのTour Programを策定する前の段階に解決すべき諸問題を真剣に考えてみる。

1) 為替と物価の問題

一般的に、日本の物価は米国の1.5－2倍といわれている。この原因は為替レートが適正ではないといえなくもない。このような事情はあるが、日本は物価が高いとの印象を払拭しなければ、外国人観光客の誘致にはマイナスになる。

今更、為替レートが余りにも円高にぶれていると、嘆いても仕方がないことである。円高問題に対して、ほんの僅かな対応策でも考えて実行する。そのためには、一つの例であるが、ホテル特に国際レベルの中・高級ホテルの食事の料金の見直しと再構築が必要である。かつて東京ディズニーランドに位置する千葉・舞浜の某ホテルでは、開業当時に、ファミリー客の夕食の消費金額を調査して、その単価の平均が@3900円以下であることを知り、英断をもって全レストランの定食料金を@3900円以下に抑えて、成功した例があり、ヒントとなるはずである。

2) ホテル料金、交通料金などへの対応

国内の中・高級ホテルのレストランの夕食時は、席の多くが空いている状態である。外国人観光客を受け入れるホテルは、観光客の殆どはいわゆる中流の人々であり、日常決して高級レストランなどは利用しないことを認識して、ホテル内のレストランを利用し易い料金体系を構築すべきであろう。

客室利用金を例にとると、公表しているTariff Rateに対して実際の販売料金は20－50%もかけ離れている現実より、海外に対する料金の打ち出しは国内向けとは別であって不都合はないはずである。

また、アジアからの訪日観光ツアーの大部分は、新関西空港に到着し、その後ち大阪、名古屋、熱海、東京、成田と平均一週間のツアーの全行程を会員組

織などのバス利用しており、その他の交通機関を利用することは稀である。利便性の為であろうが、経済性の問題も多分にあるはずである。

日本国内の公共交通機関の現状は、国内線航空会社は、同業他社との競争のため、早期予約の場合は大幅の割引をしており、実勢価格は非常に安くなっている。新幹線にもアイドルタイムがあり、格安の料金を打ち出せる環境にあると推測する。全ての交通機関は、協調しての外国人ツアーを取り込むシステム作りが期待される。

4. 観光スポットとツアープログラムの開発

誘致の問題で、最も大切なことは、訪日観光客の期待感や要望にマッチングさせる魅力ある観光スポットとツアープログラムの開発である。現在は訪日観光客の大半を占めるアジアからのツアーは、ディズニーランド、秋葉原、新宿であり、欧米人ツアーは、日本の風景、文化遺産であるとの先入観が、もしあるならば捨て去るべきである。

遠い極東の島国である日本に欧米よりの観光客を誘致するためには、お隣の中国に対抗できる、またはそれ以上の魅力作りが必要である。といっても、国、地域、人種、生い立ちなどで人の好みは千差万別である。従って、プログラムもバラエティ富んだものにするべきである。そのためには、観光客の好みを分類して、それぞれに対応するプログラムが必要である。

次の項に紹介するSegmentの例は、外国人観光客の好む観光スポット、コースなどである、筆者が観光の現場にて訪日観光客の動静を見聞きし、また実際に接してみても体験的な分類である、ただし、数値的な裏づけに乏しく、やや感覚的といえるが、主観をまじえることは避けているつもりである。

1) 現代の日本を知る観光

- ①テーマパークが最大の目当て（アジア客の最大多数）
- ②ショッピングやナイトライフをエンジョイすることを望む（アジア客の最大多数、欧米客も小数）

- ③日本の大都市の建物・生活を見て回りたい（アジア及び欧米客の多数）
- ⑤工場などの産業観光を求める（アジア客、欧米客の少数）

2) 風景を楽しむ観光

- ①日本の田園、山、川などを見てまわりたい（欧米客の少数）
- ②富士山に登りたい、途中まででもよい（欧米客の多数）
- ③雪とスキーに多大な興味をもつ（雪のないアジア客の多数）

3) 従来型の観光

- ①皇居の拝観を望む（欧米客、アジア客の多数）
- ②京都御所の拝観を望む（欧米客の多数）
- ③離宮の拝観を望む（欧米客の少数）
- ③仏像を中心とする仏教美術の拝観（欧米客のごく少数）
- ④寺社、茶室などの古い建造物に惹かれる（欧米客の少数）
- ④枯れ山水、池回遊式などの庭を愛する（欧米客のごく少数）
- ⑤古城に興味を持つ（欧米客の少数）
- ⑥神社・仏閣などの見学の際、年代には関係なく、巨大なもの、豪華絢爛なものに興味を示す
（欧米客の多数、アジア客の少数）

4) 伝統文化主体の観光

- ①茶道、華道などに興味を示す（欧米客のごく少数）
- ②能、歌舞伎などに興味を持つ（欧米客のごく少数）
- ③陶器、磁器などの焼き物、漆器などに興味を持つ（欧米客のごく少数）

4. 観光プログラムの開発

前項にて体験的に、外国人観光客が過去に経験し及び今後発生するであろう日本国内の観光資源を列挙・分類してみた。日本の観光資源、観光ルートは無

数にあり、特に気がつくことは、欧米観光客、アジアからの観光客共に、観光目的及び興味を示す観光スポットの大半は、現在の日本人の多種類の多階層の観光の指向性のどれかに当てはまり、日本人と本質はあまり変わらないことである。

日本の修学旅行は、京都、奈良などの歴史的文化遺産の見学から、ディズニーランド、USJ、秋葉原、などの見物に視点を移しているが、アジアからの多くの観光客のツアーは、これらにやや似通った面がある。

また、数は多くはないが、寺社などの日本の文化遺産を積極的に拝観しようとする一部の欧米客中心の訪日観光客は、日本の婦人観光客に似通っている面がある。

観光プログラムを考えるにあたって、既述した中国の観光資源、または他のアジア諸国の観光資源に対抗できうるプログラムが必要である。しかし、欧米人から、かって、日本の建築の大部分は「木と紙で作られた家」である、と皮肉られたように、燃え易い建造物が多かった故に、石造りの建造物の多い国に比較すると、建造物の歴史的遺産が少ないハンデがあることも認めざるをえない。

しかし、ハードのマイナス面をなんとかソフト面でプラスにもつていくことが必要である。上述の分類をベースにして各カテゴリー毎に試案を述べ、観光プログラムを組み立てる際の一助としたい。

1) 現代の日本、特に都市部を中心にしたプログラム

かって、多くの日本人が、東洋の真珠とうたわれた、香港に憧憬の念を抱いたように、アジアからの訪日観光客の中には、それと同じような期待を持って、日本の大都市における観光を目的に多くの人々がツアーに参加をしているケースが多くある、このCategoryは、テーマパーク観光と共に最多のマーケットであり、絶えず新しいメニューを入れて継続的に改善をながらプログラムを再構築をすることは非常に大切である。下記に、Inbound Tourismに関係する人々であれば、誰でも知っているであろう具体例を列挙して、それらを再確認をして、改善及び新しい開発を考えてみたい。

a. 大都市をエンジョイする

アジアからの観光客は、旅行者数が最多であり、当然のことながらInbound Tourismにとっては最大の数であり、最大の力点をおく。但し、大都市での観光、具体的には、大阪・日本橋、東京・秋葉原の電気街、大阪のミナミの歓楽街、東京の新宿の歓楽街、日本を代表するショッピングストリートの銀座、外人が日本の原風景を見出すといわれる浅草などは、アジア、欧米を問わず海外からの観光客が一様に興味を示す観光スポットであり、これらに、バイエリア、恵比寿ガーデンプレイス、汐サイト、六本木ヒルズなどの新しいスポットを絶えず加えて、また、良否の論議ははともかくとして、幕末より不変の「フジヤマ・ゲイシャガール」のイメージを良質な日本舞踊ショーなどにて再現することなども考慮する必要があるだろう。

b. テーマパークの観光とショッピング

アジアからの観光客にとって欠かすことができないのが、ユニバーサルスタジオ、ディズニーランドなどのテーマパーク観光である、これらに東京秋葉原、大阪日本橋などの電気街でのショッピングを組み合わせたコース、つまり、現在の最大のInbound Tour Courseであり、今後も継続するものと推測するが、観光客の好みは移り易いので、必ず新しいスポットを入れていく必要がある、誰でも知っていることだが、例えば大型のスーパーをキーテナントとしたショッピングモール、100円ストアなども喜ばれる。

ひところ、韓国からのツアーが隣接する九州の長崎ハウステンボス、博多キャナルシティ（人工の運河をとりまくショッピングエリア）、宮崎シーガイア、別府の巨大温泉ホテルなどを組み合わせて、多数の集客訪日した例がある。近隣のアジアからのツアーの場合は、このように日本の新しい観光的スポットの情報の入手に敏感である。

c. 雪への憧れに対応

東南アジアからの観光客の中には、雪に触れてみたい、ソリ遊びをしてみたい、できればスキーをしてみたいとの希望が多くなりつつある。防寒衣料、防

寒靴の準備，スキー場の確保，レンタルスキーの用意など問題が多いが今後は伸びていくものと考えられる。

現在でも「札幌雪祭り」などがツアーのコースに組み込まれているが，年に数日間のイベントでは，恒常的なツアーコースにはならず，少なくとも数ヶ月間にわたるコース設定が必要であろう。早期のツアー化には困難さがあるが，冬場がオフシーズンになる訪日観光の振興策としても，これらのツアーのプログラム化は，是非実現したいカテゴリーである。

d. 産業観光もメインコースになるか

このカテゴリーは，日本の高度成長期に各種のメーカーが，自社系列の海外の Dealer, Sole Agent に対する Incentive として実施されてきたが，広く他の分野の方々に開放されたことは稀である。大型工場の東南アジア各地への移転が増えているが，日本製の自動車，家電，パソコン，音響機器，OA 機器，映像機器など外国人観光客が非常に興味を持っていることに違いない。輸出の振興にもつながること故え，大手企業の協力が必要である。幸い，バスツアーのコースに近い守口，吹田，草津，豊田，浜松などの東海道ベルトラインに大型工場が位置しており，見学のためのコースを組み易い。場合によっては，訪日観光のメインコースになる可能性もあるであろう。

e. 教育，医療，福祉などの現場の見学

世界的に教育及び医療，福祉は，大きな関心事である。これらのプログラムを構築して発表すれば，海外に反響を呼ぶものと思う。但し，これらはけっして観光資源と考えるべきではなく，各機関の多大な協力がなければ，実現は困難であるが，国際貢献にもなり，日本を理解してもらうためにも是非とも完成したいカテゴリーである。特に米国の中高年の婦人は子離れが早い故か，訪日中も日本の幼児に対する関心が高く，ホテルのロビーや街を歩いていて出会う乳児，幼児に対しての暖かい視線を投げかけており，ツアー・プログラムの構築上にヒントとなるであろう。

f. 生活に密着したスポットの見学

訪日観光客の多くが普遍的に、興味を持つのが、現在の日本人の日常生活である。アフリカ大陸のある国ではいまだに、日本人は、「ちょんまげ」、「まるまげ」などで、着物と下駄の生活をしている風景の入っている教科書を使用しているとのことである。現在の日本を広く知ってもらうためにも、半日か、一日のHome Visit Tourは、歓迎される分野である。

築地の鮮魚市場の見学が、外国人観光客にとっても人気がある現状より、同様に、著名な大阪黒門、京都錦、金沢近江町、札幌二条などの市民の台所の見学をコースに入れることなども喜ばれるCategoryになるであろう。知恵を絞れば身近に平凡ながら外国人観光客が興味を持つ、生活に密着したスポットがあるはずである。

g. 巨大、原色、豪華絢爛な神社・仏閣・仏像などに興味を持つ層

歴史的文化遺産に対する興味をもたなくても赤、緑などで彩色された平安神宮などの神社、金ピカな金閣寺などの仏閣など、奈良、鎌倉の大仏など、豪華絢爛の日光陽明門、懸崖造りの清水の舞台などを見学すると感激をする外国人観光客も多い。欧米からの観光客であっても、その大半はこれらカテゴリーであると推定してよいといえる。識者から見れば一見チグハグのように考えられるかも知れないが、先入観を抱くことなく今後も引き続き大切にしていけるべきである。

しかし、かつての日本の大宮びとも「青丹よし……」と詠ったように、奈良時代の有識者も青と赤に鮮やかに彩色された、建物を歓迎していたわけであり、寺社観光のプログラムを構築する場合は必ず配慮しなければならない。訪日外国人観光客に対して、日本側の思い込みによるツアープログラムの構築は避けるべきである。批判があることは重々認識しながら敢えてコメントするが、日本のInbound Tourismが得意とする寺社主体の観光にもビギナー・コースがあってもよいはずである。

2) 日本の自然、田園、山野などの魅力

箱庭的といわれる日本の風景を楽しみたい、自然環境の中に身を置いてみた

いとの間も結構多いと思われる。

a. 欧米人の好む風景、自然環境など

東京のホテルで、ハイキング的な軽装で出かけていく中高年の欧米系人のツアーの行き先を聞くと、Country District（田舎を指す様子）に出かけるとのことであり、詳しく説明を求めると、目的地は箱根とのことであったが、嬉々とした姿には、日本の田舎を見ることに大きな期待感を抱いていることが、強く感じられる。野外のフィールドワーク的ツアーに、出て行くことを好む観光客も多いことが理解できる、それに対応するプログラムの開発も重要である。先述のIsabel BirdがアジアのArcadia（桃源郷）として欧米に山形の置賜盆地を紹介しているが、田園風景に対する欧米人のもつ視点の理解も重要である。

また、明治の始めに来日し、東京、横浜、大阪、神戸などにビジネスと生活の場を持った外国人が都会での酷暑を避けて、軽井沢、日光・中善寺湖畔、箱根、六甲などに避暑地としての適性を発見し、別荘を作り、それらが引いては、万平、金谷、富士屋、六甲オリエンタルなどの現存するクラシックホテルに発展しており、また、幕末期より、上海在住の欧米人が、避暑に雲仙に多数訪れていた事実もある。欧米人の自然環境に対する憧憬と希求の念が伝わってくる。つまり、火山列島に位置する日本には欧米人が好む自然が多くある。

b. 多島海の瀬戸内海などの魅力

かつては、日本観光の目玉であった、瀬戸内海航路も先細りの一途を辿っていき。ジェット機の就航、山陽新幹線の運行と、カーフェリーの就航に伴い、輸送手段としての役割を終えている。

しかし、世界にも稀な風光明媚な多島海は、外国人観光客にとっては非常に魅力があるはずである。かつての瀬戸内海航路の主流は、夜に大阪港を出発して、翌朝別府に到着するものであり、折角の風景を楽しむ時間は殆どなかったといえる。逆転の発想で昼間運航すれば、国内でも有数の観光資源の再開発となるはずだが、気短な日本人観光客の利用は期待できず、満船状態でなければペイラインに乗らないこともあり、一考を要する。尚、スケールは小さいが、

佐世保・九十九島、松島、志摩・英虞湾などもクルーズには大きな魅力があるはずである。

c. 登山、トレッキングの

ウエストン（Walter Weston 1861－1940）が、日本アルプスは、3000メートル級にもかかわらず、4－5,000メートル級のヨーロッパアルプスに匹敵する魅力があることを世界に情報発信して以来、欧米にも知られるようになったが、訪日観光客のコースとして組み込まれてはおらず、現在、ツアー化しても微々たる数にしかならないであろうが、訪日観光客に対しては殆ど手付かずの観光資源であり、今後、北アルプス山麓のトレッキングもしくは、バスツアーなどを成長させるべく、プログラムの企画、構築、PRそして実行が待たれる。

d. 日本の湖沼に興味は

日本人観光客が英国のネス湖の怪獣探しに出かける現在、訪日する外人観光客に琵琶湖、浜名湖、霞ヶ浦など半日～1日行程のクルージングを組んでのプログラムを提供できるであろうが、日本人を対象にしていた琵琶湖汽船のクルージングも先細りをしており、気短な日本人対象ではクルージングは成り立たないのかもしれないが、外国人観光客が対象であれば、多大な企画力が要求されるであろうが、異なった切り口が見出せる可能性があるものと考えられる。

その場合、クルージング先進国の模倣であれば、けっして成功はしない、例えば霞ヶ浦に「帆引き舟」を浮かべての模擬漁業などの演出が必要であり、費用対効果の問題が前に立ちはかかるであろうことが想定されるが、観光立国を目指すなら大切にしたい資源である。

3) 日本の原風景を求めて

現代の日本人の生活を見たいとの要望と同じように、江戸時代の面影や日本の原風景を求める外国人観光客も多いはずである。これらの希求は日本人観光客と全く同じである。

a. 日本の古い宿場の町並古い村落など

現在、日本国内では古い宿場の保存、復元が盛んである。旧中仙道の奈良井、馬籠、妻籠などは既に完成された町並みの趣がある。また、メンソレータムの開発で知られる、ウィリアム・ヴォーリス（Voreis Wiliam 1880－1964）が愛した近江八幡、飛騨古川、世界的な文化遺産白川郷を含めて数多くの古い街、集落が残されているが。懐古趣味のある欧米人観光客にアピールするはずである。

b. 旧城下町に興味を示す人

旧幕藩体制における面影を残す、大藩の旧城下町、小藩や幕府直轄の天領の陣屋のおかれた旧陣屋町が多くある。弘前、米沢、喜多方、川越、金沢、高山、竜野、松江、竜野、萩、津和野、飩肥、杵築、竹田など枚挙にいとまがないであろう。

ラフカディオ・ハーン（Lafdadio Hearn 1850－1904）の例でも解かるように、欧米人に愛されるはずの旧城下町を、観光資源として売り出すべきである、特に訪日外国人の集まる首都圏、京阪神に隣接するエリアに位置する旧城下町、旧陣屋町は訪日観光ツアーの誘致に取り組むべきである。

4) 従来型の観光

幕末から、外国人観光客に対して提供してきた、従来型の観光プログラムを改めて確認し、今後の方向性を考える。

a. 皇居、御所、離宮などの拝観

世界で最長の歴史を持つ、日本の皇室は国の垣根を越えて敬愛されている、従って、欧米の識者に知られている皇居（Imperial Palace）、京都御所（Kyoto Detached Palace）、桂離宮（Katsura Imperisl Villa）、修学院離宮（Syugakuin Imperial Villa）などが常時拝観可能となれば、外国人観光客に大歓迎されることは確実である。

例えば桂離宮は、ブルウノ・タウト（Bruno Taut 1880－1938）が、その美しさを海外に向けて情報発信をして以来、日本を知る外国人が等しく憧れると

ころである。これらの拝観問題の実現には、その箇所ごとに事情が異なり一様にはプログラム化は困難であることは理解できるが、英国のバッキンガム宮殿、エジンバラ宮殿の例の如く、訪日観光客が拝観を希望する最高のものであることは間違いない。

b. 仏像を中心とする仏教美術

仏教美術は、日本の誇る世界的な文化遺産であり、奈良、次いで京都は仏教美術の宝庫である。明治の半ばにはアーネスト・フェノロッサ（Fenollosa Ernest 1853－1908）と岡倉天心が法隆寺の救世観音などの美しさを世界に向けて情報発信をし、同様に薬師寺の東塔の水煙はフェノロッサにより「凍れる音楽」と表現され、世界の識者の知るところとなった。

しかし、現代ではそのことを知る海外の識者の数は少なくなっていることと推測する。従ってこのカテゴリーは、日本人が仏像を中心とする仏教美術の尊さ美しさを評価する程には訪日観光客は理解していないのではないだろうか、残念ながら外国人観光ツアーの主流にはなりえない。これもまたミスマッチングの元となっている。しかし絶対に放置してはいけないカテゴリーである。

c. 寺社などの古い建造物及び庭園、障壁画

アジア各地の石造りの建造物ほどの歴史と古さはないが、木造建築としては世界最古の天平、平安などの古寺が残されており、これもまた、海外の識者が知るところである。

寺社に付随して発達した庭園は、中国の蓬莱思想に基づく庭、モネが憧れた、池泉回遊式庭園など文字通り箱庭的であり、この分野も一般的とはいえないが、寺の名前は知られていなくても回遊式の庭の一つは「Moss Garden」、枯れ山水の庭園の一つは「Stone Garden」などとして、欧米の有識者間では、比較的よく知られている。しかし、これも知る人ぞ知るであり、あまり数は見込めない。

また、寺院に残されている狩野派などの豪華絢爛たる障壁画は、いわゆる「外国人好み」といえる、例えば智積院の長谷川等伯の桃山時代風の彩色豊か

な障壁画などを拝観すれば、誰もが感服するはずである。だが、足を運ぶ外国人観光客は少数であろう。しかし、古社寺同様に簡単に見過ごせないカテゴリーである。

d. 日本の名城、古城址

創建当時の天守閣の現存する、姫路、彦根、松本、犬山など観光資源としてのスター級の城も多い、また、天守閣はなくても二条城の如く、桃山時代風の唐門及び江戸初期の二の丸御殿を、そのまま残している貴重な文化遺産もある、しかし、これらの名城は他の観光スポットとのルートに組み込むことが難しいロケーションに位置している場合が多い。特にビッグスターともいえる姫路城は近畿圏の観光地と離れており、ツアーに組み込むのが難点である。従って訪日観光客の中で、姫路城の存在はあまり知られていない。

5) 伝統文化主体の観光

次に見過ごせない観光資源は、日本の伝統文化である。日本ほど伝統文化の種類が多い国はないはずである、しかし、外国人観光客の鑑賞に提供できるものは少ないが、数が多いため厳選しても多数残ることになるだろう。

a. 茶道、華道、など

お点前、活け花などを体験したいとの外国の女性層は結構多いものと思われる、実際、国内のホテルのフロントには、宿泊外国人観光客よりフリータイムにお点前などを体験したいとの要望の問い合わせがある。しかし、茶室、生花、講師などを常時準備、待機させておく必要があり、ツアーに対応することに困難さがある。

b. 歌舞伎、能、狂言、舞踊など

歌舞伎に就いては、年間に数ヶ月間、毎回25日興行を行っており、ツアーに組入れることは、料金さえ合えば容易であろうが、能、狂言は演能日が少なく、ツアーに入れることには、慎重を要する。

c. 陶器、磁器などの焼き物、漆器に興味

前駐日米国大使のモンデール氏がまだ、米本国で上院議員であった頃、その夫人は、毎年のように来日して九谷焼の窯元に数週間ずつ住み込んで研修をしたことは、よく知られている。

日本に関する知識がある欧米人には、焼き物のファンが多くいるとのことだが、その工程に日数が必要であり、どうしても見学程度で終わってしまうが、楽焼程度なら対応が可能である。

5. エンターティメントは

これまで、程度の差はあるが、観光プログラムに取り入れるべき資源などを、取り上げきたが、エンターティメント的な要素が欠けていることは否めない。かつては、シアターレストランなどでマジックショウなどを開いていたが、すべからく欧米の模倣に感じられた故か長続きしなかった。矢張り日本的なものが求められていると理解すべきであろう。

かつて、20世紀初頭にアメリカの西部の開拓の時代が終了した際に、映画にもなった「西部の王者」ことBuffalo Bill (William Cody) が、Western Showを組織してね欧米各地を興行して大成功をおさめた時代があった。

最近、封切られた映画「Last Samurai」の例でも解かるように、武士、戦国時代、江戸時代などに興味を持っている訪日観光客は非常に多いと推定される。従って、現在も日本独特のテーマパークである、東映映画村、日光江戸村、伊勢戦国村などがあるが、それらの延長線上で、更に拡大し、出し物を考えて、出来ればインドアにて、何時でもその時代にタイムスリップでき、生活の一端が解かり、かつ、戦闘シーンなどがIT技術を加味したヘパージェント的なショウを鑑賞できるようなものを造れば訪日観光客を誘致するための強力なツールになること間違いないといえる。ただし、その際はあくまでも「本物志向」でなければ永続性はないもの考えるべきである。

6. まとめ

前項において、日本で提供できる可能性のあるプログラム・メニューに就いて述べたが、成功させるためには、政府・行政が近い将来の為替の見直し又は変化を見越して、外貨余り現象に惑わされることなく、小手先の施策だけではなく、先行投資をするつもりで訪日観光客が僅かな人数でも参加の見込めるプログラムは残らず実行すべきである。

残念ながら、日本は海外において訪日観光客を誘致するための、これといった有効な手段を持っていない、JNTOが担当エリアで開催される各国のTrade Fairにて日本観光キャンペーンをしているが、効果は少ない。従って先ず、日本の美しさ、文化遺産などを国内次いで海外のメディアに載せる工夫をし実行することが先決であるが、最も大切なこと「口コミ」「ホームページ」などでの日常的に、海外に「日本の観光」を発信続けることが肝要である。1867年のパリ万国博にて当時の江戸幕府及び薩摩藩が出展をし、欧米人の注目を引き、その後20世紀初めに欧米を席卷した「ジャポニズム」などにより、日本に憧れた欧米人が多数存在した時期もあったことを再認識して、再度のチャレンジが必要である。

繰り返すが、日本には、どこの国の人も惹きつける大きなモニュメント的な観光資源が少ないのが現実である。ここで、再度確認をするが、訪日を考えている外国人観光客は、一部を除いて、その大半は、テーマパーク及びナイトツアーは別にして、景観であれば富士山、仏像であれば奈良、鎌倉の大仏、神社では日光の東照宮、平安神宮、寺院であれば金閣寺、清水寺である、即ち、大きいか、極彩色に彩られているか、高い崖に作られているか、などがポイントであろう。つまり、平均的な日本人観光客と殆ど変わっていない。従って、観光プログラムの見直しをし、現時点でのミスマッチングを防ぐことが急務である。最初は訪日観光客の現在の好みに迎合せざるをえないであろう。

ミスマッチングを防ぐために、現時点では参加者の少ない、いわば一般受け

のしないプログラムを改変することは必要であろうが、しかし、これをもって日本が誇れる文化遺産、特に仏教美術をないがしろにしてはInbound Tourismの将来はない、時間をかけて、牛の歩みであっても先人が度重なる災害の中を、寺院などが焼けても、僧職などが身を挺して守って来た貴重な文化遺産を、訪日観光客に評価してもらえるまで、一旦決めたポリシーを遵守していくべきである。

さいごに

訪日観光客に日本の美しい風景、歴史的文化遺産などを見てもらいたいと考えるならば、先ず日本人自身がそれらを好きになることが大切である。日本人が見向きもしない自然、文化遺産などを訪日観光客に契めて誘致しようとしても好結果は産まないはずである。現在のテーマパーク見物の物見遊山的な修学旅行を続けているようでは、Inbound Tourismの発展はないといえる。修学旅行は貴重な文化遺産を見学するための、平均的な日本人としては、生涯でただ一度のチャンスかも知れないことを、関係者は真剣に考えるべきである。同様に、日本を代表する観光地である京都を例に取るが、京都の人々は観光寺社などを殆ど訪れないなどの説もあるが、修学旅行問題同様に、観光地の住民は先ず地元の観光資源を熟知し、愛することも訪日観光客を増やすための原点の一つ考えるべきである。

参考文献

- 「ニッポン」ブルノー・タウト著（森としお訳）、1991年、講談社
- 「日本美術史」岡倉天心著、2001年再版、平凡社
- 「日本奥地紀行」イザベラ・バード著（高橋健吉訳）、2000年、平凡社
- 「日本の古寺名刹」、「日本の仏像」宮田保編1983年、講談社
- 「ウエルカムプラン21」首相施政方針演説、2003年1月

利潤率の傾向的低落法則と置塩理論

東 浩 一 郎

はじめに

利潤率の傾向的低落法則に関する考察の一つとして、置塩信雄のいわゆる「置塩定理」が知られている。置塩定理においては、新技術が導入されると利潤率が上昇すると結論されており、利潤率の傾向的低落法則に対する有力な反論となっている。ただし本稿ではこの置塩定理を対象に議論を行なうわけではない。置塩定理をめぐるはすでにさまざまな議論が行なわれているし、拙稿(2003)において私見を提示しているからである。

本稿では、置塩が晩年の論文において置塩定理の前提自体を批判し、利潤率の傾向的低落法則を承認している点に注目し、これについて検討したい。以下が当該部分である。

「利潤率の傾向的低下に関するマルクスの法則に対する私の批判（『置塩の定理』）は、（１）実質賃金率一定、（２）正の利潤を生む新しい生産価格の成立、という問題を含む仮定に基づいていた。本節では、これらの仮定を検討することによって、『定理』に対して否定的な結果を得た」¹⁾。

ここにおいて置塩自身は、必ずしもマルクスの想定をそのまま承認したわけではないが、利潤率の傾向的低落法則自体は承認している。

まず本論に入る前に、簡単に置塩の従来主張とマルクスの利潤率低落法則の関係を確認しておこう。

置塩自身、過去においてもマルクスの利潤率の傾向的低落法則自体をはじめから否定したわけではない。むしろ従来から利潤率の傾向的低落法則を以下の式によって承認している²⁾。

$$r = \frac{M}{C+V} = \frac{M/V}{(C/V)+1} < \frac{M+V}{C} = \frac{N}{C}$$

ただし、 r は利潤率、 M は剰余価値、 C は不変資本、 V は可変資本、 N は雇用量（生きた労働）である。

つまり、マルクスの利潤率の傾向的低落法則は、 C/V であらわされる資本の有機的構成の高度化を根拠とするが、利潤率は C/V だけではなく、剰余価値率 M/V にも依存する。式を見れば分かるように、 C/V が高度化（値が大きくなる）すれば、分母が大きくなるので利潤率は低下する要因となる。しかしそのファクター以上に M/V の値が大きくなれば利潤率は上昇するであろう。しかも両者は密接不可分な関係にある。新技術の導入＝資本の有機的構成の高度化は、商品価値の低下を通じて剰余価値率の上昇をもたらすからである。もちろんこの点にはマルクス自身も気づいている³⁾。しかし、式の右辺から明らかのように、いかに M/V が上昇しても利潤率の上限は N によって規定されるため、 C/V が高度化すれば利潤率の上限がおのずから低くなることが分かる。置塩においてもこの点が強調され、資本の有機的構成が十分に高度化すれば利潤率が必然的に低落することが承認される⁴⁾。

しかしこの結論が承認されるのはあくまで利潤率を価値によって計算しているからである。置塩によれば利潤率は価値ではなく価格で計算せねばならず、その場合マルクスの結論とは逆に、新技術の導入は利潤率の上昇を招くと考えられる。これは以下の式によって与えられる。

$$q_i = (1+r)(\sum a_{ij}q_j + \tau_i)$$

ただし、 q は価格を貨幣賃金率で除したもの（ p/w ）であり、サブスクリプトは部門をさす。 a は当該部門の商品1単位を生産するために必要な生産手段量、 τ は生きた労働量である。

一見して明らかのように、この式では非基礎財が均衡利潤率の計算に入り込まない。 a_{ij} は i 財1単位の生産に必要な j という生産手段の量を示しているので、 j 財が非基礎財であれば a_{ij} は0となるからである。この点から置塩はマルクスの利潤率の計算方法は間違っていると結論し、基礎財部門における新技術

の導入が均衡利潤率水準を高めるという「置塩定理」を導出する。

本稿では置塩定理の考察が目的ではないので、これ自体の検証は行なわないが、置塩においてはこの2つの式によってマルクスの利潤率の傾向的低落法則と置塩定理の整合性を見出していることだけは確認しておきたい。

ではこのように繰り返されてきた主張に対して、置塩はどのような修正を行なったのであろうか。最初に引用したように、置塩は置塩定理そのものを否定したのではなく、置塩定理の前提を否定している。

これらの一連の論文における置塩の主張は以下のように整理しうる。

(1) 技術変化がない状態において資本主義的な競争過程を検討すると、利潤が消滅する。

(2) したがって資本家は不断の新技術導入を行なう。

(3) しかし、不断の技術変化を想定しても、最終的に利潤は消滅する⁵⁾。

あらかじめ注意すべきことは、この結論は、一見するとマルクスの利潤率の傾向的低落法則を承認したように見えるが、実はこれとは異なるものだ、ということである。

マルクスにおいては技術変化がなければ、一定の生産価格に収束しそれが持続すると想定される⁶⁾。そこにおいては一定の正の剰余価値率あるいは利潤率が想定されており、その過程自体が利潤の消滅（利潤率の傾向的低落）をもたらすわけではない。一方置塩においては、技術一定における競争過程自身が利潤率を低落させると考えているのである。いわゆる「全ての利潤が消滅するシユムペーターの結論が得られる」⁷⁾のである。

これが(2)の想定へとつながる。つまり資本家は利潤を得るためには不断の新技術導入を行なわなければならないのである。ここにおいては新技術の導入が利潤率を上昇させるという置塩定理と同じ想定がそのまま持ち込まれている。この部分もマルクスの想定とは異なる。マルクスは新技術の導入過程において個別資本が超過利潤を得ることは認めているものの、新技術が部門内に一律に行き渡った時点において利潤率が旧技術の時よりも高くなるとは考えていない。むしろ新技術が資本の有機的構成を高めるようなものであれば利潤率はこの時点において低落していると考ええる。これに対して置塩はとりあえず新技

術が部門内に行き渡った時点でも利潤率は旧技術の時よりも上昇しており、そこから徐々に低落していくと想定しているのである。

最後に置塩は新技術の導入は、技術一定の想定に比べれば利潤率が低落するスピードは遅くなるものの、結局のところ利潤が消滅するという結論には変わりがないとするのである。もちろん、置塩自身もマルクスの想定と自分の想定が同じであると主張しているわけではなく、むしろ自らの主張はシュムペーターのものと同一であるとしている。

本稿では、こうした置塩の一連の想定を検証することを通じて、利潤率の傾向的低落法則が意味することについて考察していきたい。以下、第1章で置塩理論の構造について検証し、第2章でその問題点を明らかにし、第3章においては問題点を踏まえて定式の変更を試みる。

第1章 置塩理論の構造（剰余価値および利潤の消滅）

技術変化を想定しない場合、資本主義的競争は剰余価値および利潤を消滅させるというのが置塩の結論である。もう少し詳しく引用しよう。

「有機的構成が変化しないとすれば、剰余価値はやがて資本蓄積過程で消滅することになる。

（中略）以上の結論は、ワルラスが述べた自由競争の行き着くところでは利潤は消滅すると結論したのと同じである。また、シュムペーターがそれを受けて「静態に剰余価値なし」と主張した命題である。また、スミス、リカード、マルサス、ミルなど古典派の多くの経済学者が資本蓄積による労働供給量に比しての資本の増大は利潤率を低下させるとした命題である」⁸⁾。

すなわち、資本主義的競争過程では労働供給量の増大と同じ率で資本が増大するわけではなくこれを越えた点まで延長される。したがって得られる剰余価値あるいは利潤は必然的に減少せざるをえないということである。では置塩はどのような手法によって、技術一定の下における競争過程が剰余価値あるいは利潤を消滅させるという結論を導いているのであろうか。置塩は価値タームと価格タームにおいてまったく別の式を使ってこれを証明しようとしているので

順に見ていこう。

1-1 剰余価値の消滅（価値ターム・技術一定）

剰余価値の消滅は以下の2つの式に集約される。

$$N^t[\mu + W^t + s(1 - W^t)] = N^{t+1}(\mu + W^{t+1}) \quad \text{式 1}^{9)}$$

ただし、 N は雇用量、 μ は生産の有機的構成¹⁰⁾、 W は価値で測った実質賃金率、 s は蓄積率であり、 t は期をあらわしている。

$$W^{t+1} = W^t[1 + H(\frac{N^t}{Ns} - z)] \quad \text{式 2}^{11)}$$

ただし、 Ns は労働供給量、 z は臨界雇用率（雇用率 N^t/Ns が z を上回れば賃金率が上昇し、下回れば下落する境界点）、 H は反応係数である。

式1の意味は、次期の雇用量が今期の雇用量と賃金率からどのように決定されるのかを示す、ということである。そして式2は雇用量の変化が賃金率にどのような変化をおよぼすのかをあらわしている。したがって両式を総合すると、賃金率の変化が雇用量を変化させ、雇用量の変化が賃金率を変化させるということを示している。

置塩はここにおいて、 s 、 μ 、 H 、 Ns 、 z は一定であると想定し、それぞれの値を、 $s=0.5$ 、 $\mu=1$ 、 $H=1$ 、 $Ns=100$ 、 $z=0.8$ と仮定して考察を進めている。そして N は80に、 W は1に収束するという結論を得る。 W は賃金率であるから、 $W=1$ ということは剰余価値が存在しないということ、したがって資本家は利潤を得られないということを意味する。つまり、技術一定で期が進行すると、最終的には剰余価値あるいは利潤が消滅することになるのである。

この置塩の結論はどのように評価すべきなのであろうか。まずは式の持つ意味から検討したい。

まず式1の中の以下の部分に注目しよう。

$$s(1 - W^t) \quad \text{式 3}$$

ここから即座にわかるように、 $W=1$ であれば式3は0である。したがって式1においては、 $W=1$ において

$$N^t(\mu + W^t) = N^{t+1}(\mu + W^{t+1})$$

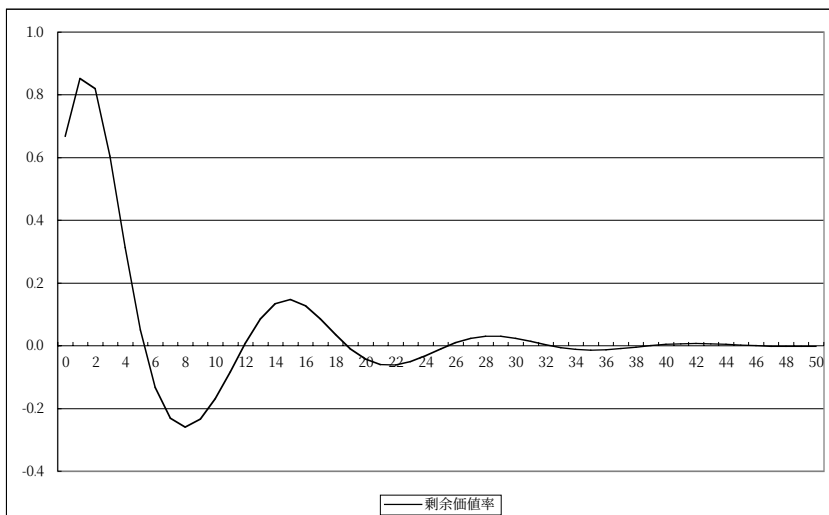
となることがわかる。次に、式2の

$$H\left(\frac{N^t}{N_S} - z\right)$$

に注目しよう。 $z=0.8$ および $N_S=100$ の仮定を承認すれば、 $N^t=80$ において

$$W^{t+1} = W^t$$

となることがわかる。ここから、期を経るにしたがって N および W の値が収束するのであれば、それは $N=80$ 、 $W=1$ であることは明白である。なお収束するか否かは反応係数 H の値のとり方しだいなので、式自体の持つ意味は単純である。これを50期までグラフ化すると以下ようになる¹²⁾。



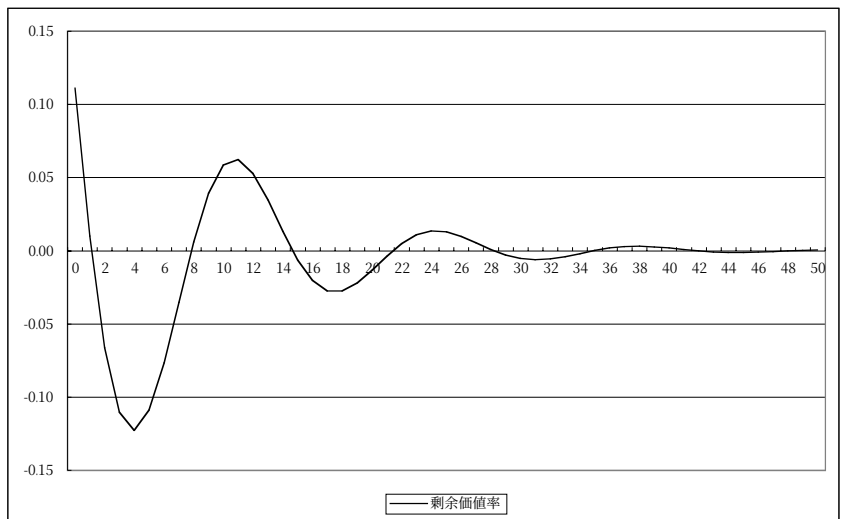
図表1：置塩モデル（剰余価値率の変化）

ではここから剰余価値が消滅するという置塩の主張を認めることができるのであろうか。結論からいえば否である。それは第1に式的前提となる想定に無理があるからであり、そして第2に仮に置塩の式を承認したとしてもそれは剰

余価値の消滅をあらわしたものとはなっていないからである。第1の点に関してとりわけ重要なことは、置塩モデルにおいては資本家の追加的投資がどの期においても利潤率に対する固定的割合で行なわれているうえ、賃金率が1になるまで追加的投資を続けている点である。この点については後の価格タームにおける計算においても問題となるので、あわせて第2章で論じ、第3章でモデルを変更して再計算してみたい。

本章においては、この式自体は、最初には存在した剰余価値が期を経るごとに変動を繰り返し消滅していく、ということを立証しているのではないということを示しておく。実は、この式を採用すると、剰余価値など最初から存在しないということになるのである。単純に剰余価値率0の周囲を振幅を狭めながら変動しているに過ぎない。たしかに、第0期（初期値）において剰余価値率は0.8を超えている。これが第50期にはほぼ0（正確には-0.00263。ただし小数点第6位を四捨五入）となっている。したがって一見最初には存在した剰余価値が期を経るごとになくなっているように思える。しかし初期値を変えると、パラメーターと式は置塩の想定をそのまま利用したとしても全く違った様相となる。

次のグラフは初期値を $N^0=90$ 、 $W^0=0.9$ に変更したものである。



図表 2：初期値を変更した場合

このグラフは正の剰余価値率から始まっているものの、すぐに大きく落ち込んでおり、これがまた回復するという形になっているため、剰余価値が消滅していくようには見えない。もちろん、 $W^0 > 1$ であれば、負の剰余価値率からスタートさせることもできる。つまり、剰余価値が低落しているように見えたのは単純に初期値を $N^0 = 70$ 、 $W^0 = 0.6$ ととったからにすぎない。図表1も図表2も初期値以外は全く同一である。つまり、どこからスタートするかによって、一見剰余価値が減っているようにも、増えているようにも見えるが、結局最初から剰余価値などなかったのだということがわかるだけである。事実、置塩の初期値を採用したとしても、第50期までのうち26の期は剰余価値率が負となっている。初期値をどのようにとっても、総期間の約半分の期間は剰余価値が負になるのである。つまり、剰余価値率は傾向的に低落しているのではなく、最初から0の周囲を変動しているだけである。

このように、置塩の式を承認したとしても、剰余価値が消滅することを立証することはできず、むしろ剰余価値は最初から存在しなかったということを示してしまっているだけである。しかし、ここから置塩モデルには意味がないと判断するのは早計であろう。置塩は価値タームの計算の後、価格タームで計算しているが、そこにおいては利潤率が徐々に低落するモデルが示されているからである。価格タームのモデルは次々節で検証することとし、次節では価値タームにおける計算を続行し、技術体系が変化する場合を検証したい。

1-2 剰余価値の消滅（価値ターム・技術変化）

技術変化がないと剰余価値が消滅すると主張する置塩は、この回復のために資本家は不断に新技術を導入すると考える。

「資本制の再生産にとって許容できる範囲に剰余価値率を保ちうるためには、生産の有機的構成の高度化が不可欠である。マルクスは新生産技術が導入されると、労働生産性が高まり（商品の単位価値が低下し）、生産の有機的構成が高度化する（生きた労働に対する死んだ労働の比重が大となる）と考えた」¹³⁾。

技術一定で剰余価値が消滅すると考える置塩と、正の利潤をもたらす生産価

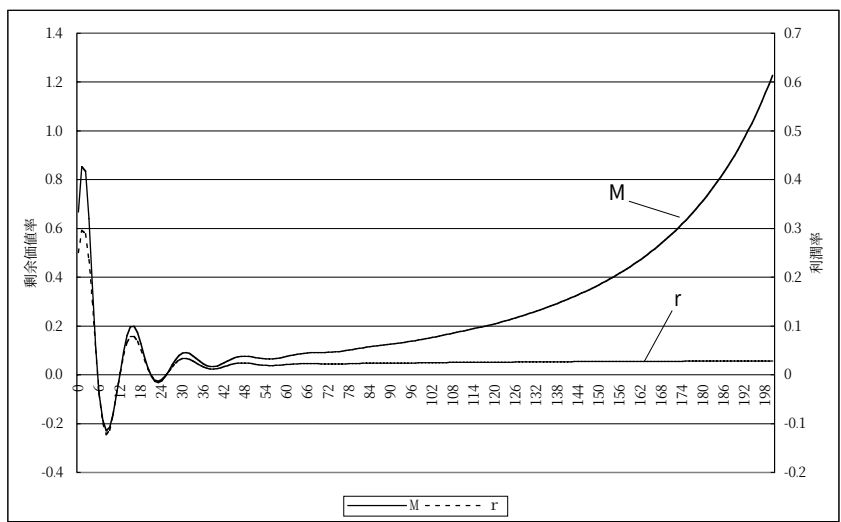
格に収束すると考えるマルクスでは、新技術導入の契機は異なるものの、資本主義的競争が資本家に特別剰余価値の取得を必然的に求め、いったん個別資本に新技術が導入されると他の資本もこれに追随せざるを得ない、ということに關しては異論がないところである。この前提を置塩は次のように持ち込む。

$$\mu^{t+1}=(1+m)\mu^t \tag{式 4}$$

μ は生産の有機的構成 (C/N) であるから、式 4 は每期 m の割合だけ生産の有機的構成が高度化するということを意味している。このように每期技術が一定割合で変化するという想定は現実的におかしなものであり、本来であれば景気変動にともなう利潤率の変化の中で論じなければならないものであるが、その点については後に取り上げることとし、ここではこの前提を承認して考察を進めよう。式 4 を式 1 に組み込むと式 1 は以下のように変化する。

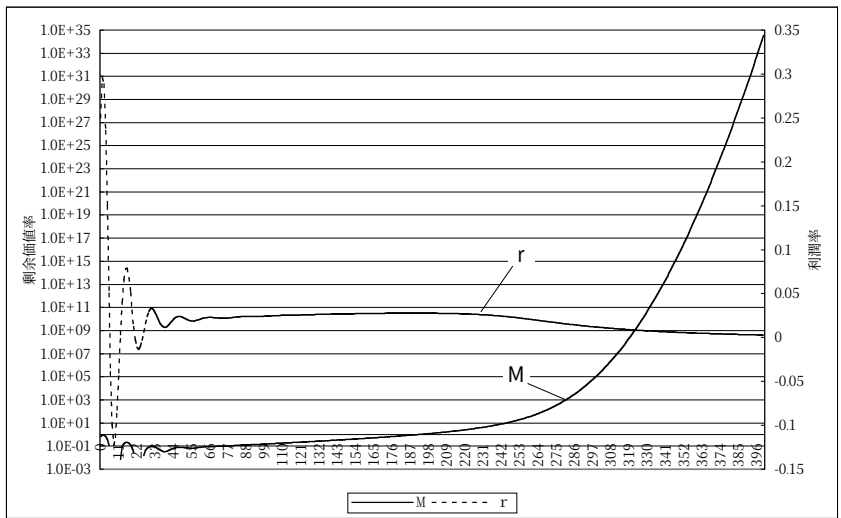
$$N'[\mu^t+W^t+s(1-W^t)]=N^{t+1}(\mu^{t+1}+W^{t+1}) \tag{式 5}$$

このように式を変化させると剰余価値率と利潤率は次のような軌跡をたどる ($m=0.015$ という置塩の想定をそのまま採用)。



図表 3：技術変化を考慮した剰余価値率と利潤率の変化（200期まで表示）

技術不変の場合は利潤率と剰余価値率は平行に動くが、技術変化を想定すると上記のように、50期ほどまでは両者の動きは技術不変の場合同様ほぼ平行であるが、その後徐々に剰余価値率が上昇していくのに対し、利潤率はほぼ変化しなくなる。つまり、剰余価値率の変化が利潤率に影響を与えなくなるということである。もっとも200期までのグラフでは利潤率が低落しているとは言えない。ちょっと見にくいグラフであるがこれを400期まで延長したものを示そう（剰余価値率の目盛りは対数で表示）。



図表4：技術変化を考慮した剰余価値率と利潤率の変化（400期まで表示）

第400期まで延長すると何とか利潤率が低落しているように見えるグラフとなる。正確に言うと、第92期～189期までの100期近くにわたって利潤率が上昇し、その後徐々に下落している。このような軌跡を描く理由は利潤率を以下のように考えるからである。

$$r = \frac{1 - W}{\mu + W}$$

ここでは生産の有機的構成（ μ ）が每期0.015%ずつ上昇すると考えられているので、これ自体が利潤率の低落要因である。しかも μ の初期値は1と考え

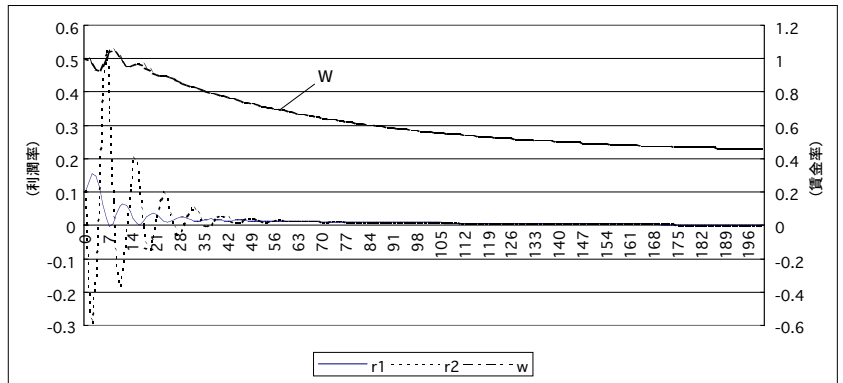
[illegible]

1-3 利潤率の低落（価格ターム・技術不変）

ここからは価格タームにおける計算である。しかし置塩は単純に単位を貨幣
量にしたわけではない。置塩の問題意識を一言で言うのであれば、ケインズが
『一般理論』の冒頭で労働者が意識するのは実質賃金ではなく貨幣賃金である
とした部分と共通のものである。したがって式も価値タームのときとは大きく
変化している。そして、そこにおいては正の利潤率の変動しながらも、おおむ

ね正の領域において低落し0に近づいていくという図式を提示している。そこで今度は価格タームにおける計算を分析してみよう。

まずは置塩の主張をそのまま取り入れたとき、利潤率がどのような軌跡を描くのかを図示する。



図表5：置塩モデル（価格ターム）における利潤率および賃金率の変化

これもExcelにおいて計算しグラフ化したものだが、同様のものが置塩の論文においても図示されている¹⁵⁾。

結論から言えばここにおける問題点も利潤率に対する資本家の反応係数（次期の投資額を決める際、利潤率に対してどのような比率で投資を行なうのかを決定する係数） β が一定と仮定されていることと、上のグラフからも明らかのように、生産財部門と消費財部門で利潤率が対称的な動きをすること（生産財部門において利潤率が高いときに消費財部門では低くなる（逆も同様））の2点である。とはいえまずはこの問題点を検討する前に、置塩がどのような手順で利潤率低落を立証しようとしたのか、とりわけなぜ価値計算においては剰余価値率は0の周囲を変動していただけなのに、価格計算における利潤率ではおおむね正の値（とりわけ生産財部門においては）をとりながら0へと収束しているのかを見ていきたい。

置塩の計算においては以下のように未知数が11個で、式も11本となっている¹⁶⁾。

$$z_1^t = (1 + \beta r_1^{t-1}) p_1^{t-1} a_1 x_1^t \quad \text{式 4}$$

$$z_2^t = (1 + \beta r_2^{t-1}) p_1^{t-1} a_2 x_2^t \quad \text{式 5}$$

ただし、 z は t 期の生産のために購入する生産手段の調達資金をあらわす。 β は利潤率に対する反応係数、 p は価格、 a は財1単位を生産するのに必要な生産手段の量、 x は産出量である。また t は期をあらわし、サブスクリプトは部門をあらわす。

$$P_1^t = \frac{z_1^t + z_2^t}{x_1^t} \quad \text{式 6}$$

$$P_2^t = \frac{w^t N^t}{x_2^t} \quad \text{式 7}$$

ただし、 w は貨幣賃金率、 N は雇用量である。

$$x_1^{t+1} = \frac{z_1^t}{a_1 p_1^t} \quad \text{式 8}$$

$$x_2^{t+1} = \frac{z_2^t}{a_2 p_1^t} \quad \text{式 9}$$

$$N^t = n_1 x_1^{t+1} + n_2 x_2^{t+1} \quad \text{式 10}$$

ただし、 n は財1単位を生産するために必要な雇用量である。

$$w^t = p_e^t L(N^t)^H \quad \text{式 11}$$

ただし、 L および H は労働供給を決定する際の係数である。

$$p_e^{t+1} = p_e^t + E(p_2^t - p_e^t) \quad \text{式 12}$$

ただし、 p_e は消費財の予想価格である。 E は価格予想の際の係数である。

$$r_1^t = \frac{p_1^t}{(a_1 p_1^t + n_1 w^t)} - 1 \quad \text{式 13}$$

$$r_2^t = \frac{p_2^t}{(a_2 p_1^t + n_2 w^t)} - 1 \quad \text{式 14}$$

ただし、 r は利潤率である。

これらの一連の式から導かれたものが図表5である。前節における価値計算時には賃金率が1の周囲を変動しており、これに対応して剰余価値率も0の周囲を変動していた。ところが今回は、(貨幣)賃金率が徐々に低下しているため、その分利潤率がプラス領域にシフトしているのである。価値計算においては雇用率が臨界点以上であれば賃金率が上昇するという図式であったが、式11からわかるように価格計算においては雇用量だけではなく、消費財の予想価格が賃金率に影響を与えている。ここにおいて L および H は変動しないので、雇用量あるいは消費財に対する予想価格が低くなれば賃金率も下がることとなる。上の計算では、利潤率が正であるかぎり次期の生産を増やそうとするため産出量の増大とともに雇用量は徐々に上昇していく。しかし置塩の想定では $H=0.1$ という小さな値になっているため、相対的に賃金率に与える影響が小さい。逆に p_2 が徐々に低下するため、式12より予想価格も下落する。このように雇用量の増大による賃金率上昇圧力よりも予想価格下落による賃金率下落圧力の方が強いため総体として賃金率が低落していくのである。

ではなぜ賃金率が下落しておりなおかつ技術変化がなにもかわらず利潤率が低落するのであろうか。これは利潤率の決定方程式(式13および14)に秘密がある。とはいえ式13および14自体は以下のような見慣れた価格方程式に直すことができるため、一見まったく疑問の余地がないように思われる(ただし価格方程式においては普通 r は両部門で等しいと考える)。

$$p_1' = (1+r')(a_1p_1' + n_1w')$$

$$p_2' = (1+r')(a_2p_1' + n_2w')$$

この式に関しては左辺と右辺の期に対する疑問はあるかもしれないが本稿では問題視しないこととする¹⁷⁾。一般的に価格方程式においては右辺が決定されることによって左辺の価格が決定される。その際 a , n , w は所与とされる。次に利潤率 r が剰余価値の分配という形で決定されれば p が求められる。あるいはどちらかの財をニューメレールとして固定すれば、相対価格と利潤率が決定される。しかし、この価格方程式と式13, 14は意味が全く違うのである。価

格 p は式6および7によって先決されているからである。しかも生産財の価格は、これを必要とする資本家が調達した資金総額を産出量で除いたものによって単純に決定される。他方消費財は雇用量と賃金率から決定される。ここでは売れ残りは存在せず、需給は常に均衡し価格のみ変化する形で調整される。このように価格がその財に投下される貨幣量によって決まった後、式13、14によって利潤率が決定されるのである。技術不変の時、賃金率 w が利潤率 r を決定するのであれば w と r は常に対称的な動きをとる。換言すれば、 w が1を大きく下回っているのに利潤率が0に近づくということはいえぬ。しかし置塩の方法においては価格が先に決まっているので、 w が1未満であっても r が0になりうるのである。

第2章 置塩理論の問題点

つづいて問題点について検証しよう。

まず価値タームにおける考察に関して見ていこう。剰余価値の消滅という置塩の命題においては、式2の立て方にも問題があるが本稿ではこれについては承認し、式1の問題にしぼって議論したい¹⁸⁾。式1においては資本家の個人消費が考慮されていないが、その点は別のところで議論されているので問題ではない。しかし、もっとも問題であると思われるのは s を一定と考えていることである。換言すれば資本家は得られた利潤がどのような水準であろうと固定的な割合で次期の蓄積を行なうということである。ここから式1は、賃金率が1未満であるかぎり、得られた利潤がいかに小さくても、追加的な投資を行なうということとなる。ところが同時に、労働供給は一定であるから、追加的投資が行なわれると相対的に労働需要が高まるから賃金率は上昇することとなる。つまり、賃金率が1になるまで追加的投資→賃金率上昇→追加的投資→賃金率上昇……という過程が繰り返されるのである。これは資本家の個人消費を考慮しなかったとしても承認しがたいことである。たしかに好況期の一局面において、賃金率が上昇し利潤率が低下しているにもかかわらず追加的投資を行なうということはいえぬ。しかしこの場合、資本家は利潤率が低下したがゆえに、

生産量を増やすことによって得られる総利潤量を減らさないよう行動するのであって、単に利潤の一部を一定割合で投資しているわけではない。好況末期においては利潤率が低下しているにもかかわらず商品は売れているという状態であるから、資本家は信用によって資金を調達し追加的な投資を行なうのである。一方、式1は景気循環を想定したものではなく、信用も導入されていない。こうした単純化された想定においては、むしろ利潤率が下がれば（すなわち賃金率が上昇すれば）、追加的投資もその割合を減らすと考えるのが自然である。明らかに賃金率が平均よりも高い中でも（賃金率が1になるまで）追加的投資を続けるという想定自体に無理があろう。以上をまとめると次のようになる。

問題点（1） W が1になるまで固定的割合で追加的投資が行なわれる。

次に、技術変化を導入した場合の問題である。

ここでは每期一定の割合で生産の有機的構成が高度化しているが、この想定には無理がある。確かにマルクスにおいては不断の有機的構成の高度化が想定されている部分が存在する。しかしこれは長期的に見た場合であって単純に每期資本の有機的構成が高度化するわけではない。シュムペーターの想定を承認するならばなおさらである。資本家は十分な利潤を得られているのであればあえてリスクを犯してまで新技術を導入しようとはしないであろう。逆に十分な利潤が得られなくなると競争に勝ち抜くために新技術の導入が強制される。したがって技術革新は断続的に行なわれるのである。

問題点（2）技術変化の割合が每期一定。

最後に生産財部門と消費財部門における利潤率の軌跡について検討しよう。

なぜ生産財部門と消費財部門の利潤率が対称的な動きをしているのであろうか。これは第1に利潤率が部門間で異なっていたとしても資本の部門間移動が起きないと想定されているからである。本来であれば他部門の利潤率が高ければ資本移動が起き、資本が流入した部門では需要に対して供給が増大するため

利潤率を下落させるはずである。しかしこの式ではそのようにはならない。仮に何らかの理由によって生産財部門の利潤率が上昇したとしよう（消費財部門は不変）。その場合、式4および5より、次期の生産に際して生産手段を購入するために利潤率が高い生産財部門において相対的に多くの資金が調達される。式6より、調達資金の総量によって生産財価格が決まり、調達資金の部門間比率に応じて生産財が配分される。したがって利潤率の高い生産財部門では次期に相対的に多くの生産財が配分されることになる。しかしこれは資本移動とは違い、利潤率を下落させる力は持たない。なぜなら生産財の利潤率は式13によって決定されるからである。すでに生産財部門では前期よりも多くの資金が調達された結果、産出量の変化を無視すると今期の生産財価格は式6より上昇しているはずである。式13においては価格が上昇すると利潤率も上昇するようになっているからである。

第2に、生産財価格の上昇はすでに見たように生産財部門における利潤率を引き上げるが、同時に式14より明らかなように消費財部門における利潤率を引き下げるからである。生産財価格の上昇は費用価格の上昇であるから利潤率を押し下げること自体はありえることである。やはり問題は資本移動が想定されていないために、いったん利潤率が下がり始めるとさらに下がってしまうのである。消費財価格が下落すると、式12より予想価格が下落し、これにより式11の賃金率を引き下げる。これが式7より消費財価格を引き下げ、式14において利潤率をさらに引き下げてしまうのである。ただし利潤率の下落は、式4および5より調達資金の相対的下落であり、結果として配分される生産手段量の下落、消費財の産出量 x_2 の下落となる。するとこれは式7より消費財価格の上昇圧力となるので、利潤率は下落しすぎると反転する。これらをまとめると以下ようになる。

問題点（3）資本移動が考慮されていないので、利潤率が両部門で対称的な動きをする。

第3章 置塩の定式の変更

3-1 資本家の投資行動の変更

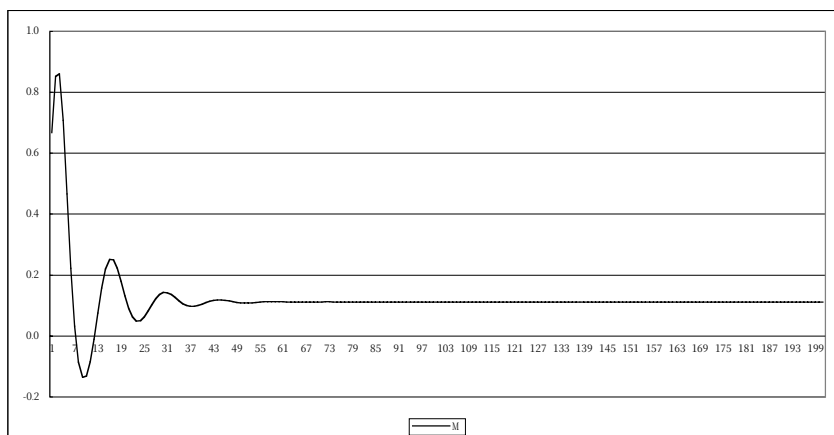
すでに見てきたように、賃金率が1になるまで資本家が追加的投資をつづけるという想定には無理があるので、ここでは賃金率 W が0.9になった時点で資本家は追加的投資をやめるというように想定を変更してみよう。すると式3は

$$s(0.9 - W')$$

と変更される。もっともこの式も $W=0.9$ まで固定的割合で追加的投資が行なわれ、0.9を超えると固定的割合で投資を減らす、ということになりあまり現実的ではない。しかし、ここでは技術不変を想定しているので、信用を導入せずにこれ以上現実的な投資関数を持ち込むことは不可能である。むしろこの固定的追加投資という点は技術変化を想定した場面において再度検討したい。

すると、他の部分是不変なので、 $W=0.9$ に収束することになる。置塩の式においては財市場の需給不均衡によって生産物価格が変化しているわけではないので、各期において生産価格が成立していると考えられるが、最終的には、剰余価値率が0.1という水準において均衡利潤率と生産価格が与えられることになる。この結論は、技術一定で生産が続くと、剰余価値が消滅するのではなく、正の均衡利潤率と生産価格に収束するというマルクスの想定 of 正しさを立証している。

図表6における軌跡が賃金率0.9以上になると資本家は追加的投資を中止すると想定したときの剰余価値率の変化である。しかしこれはあくまで技術一定を前提としたときのモデルであって、実際の資本主義的競争においては、期待した利潤が得られなくなったら単に新規投資を中止するのではなく、特別剰余価値ないしは超過利潤の取得を目指して新たな技術を導入するであろう。しかも一般的に新技術を導入する場合は投資額は技術一定のときよりも大きくなる。そうであるならば賃金率0.9を超えたら新規投資を中止するという想定ではやはり不十分である。



図表6：置塩の前提を変更した場合の剰余価値率の変化

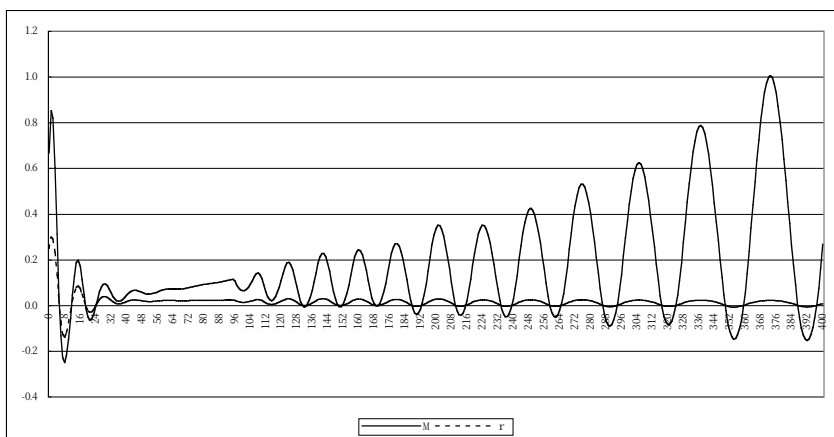
3-2 技術変化を考慮した場合の剰余価値率の変化

そこで今度は技術変化を想定してみよう。とはいえ、先に見てきたように、置塩の新技術導入の想定には問題がある。毎期0.015ずつ生産の有機構成が高度化すると想定されているからである。

そこでここでは置塩の前提を大幅に変更して技術変化を導入してみたい。前期の賃金率が0.9よりも大きい時には生産の有機構成を高度化する形で新技術を導入し、そうでないときには従来技術での投資を行なうと想定する¹⁹⁾。これはリスクを考慮した場合、利潤率が高いときには現行技術のときの方が期待収益は高く、賃金率が0.9を超えるほど大きくなると新技術を導入した場合のほうが期待収益が高くなるという想定にもとづいている。当然先に見た、賃金率が0.9より大きいときには追加的投資を中止するという先ほど導入した新たな想定は再度ははずす。すると剰余価値率と利潤率は図表7のような軌跡を描く。

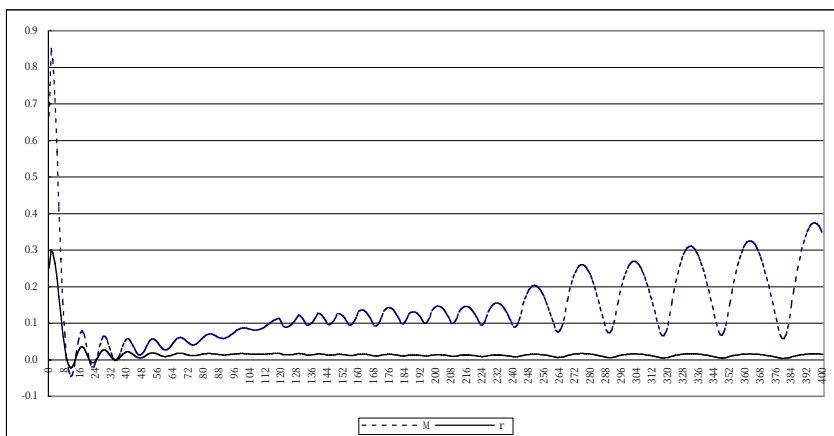
このように剰余価値率と利潤率は周期的な変動を繰り返すようになるのである。

最後に、追加的投資に対する反応係数 s が一定という前提をはずしてみよう。すでに特定の条件においては新技術を導入するという想定を行なっているが、さらに、新技術を導入するときには大きな投資を行ない、従来技術の時には一



図表7：技術変化を考慮した場合の剰余価値率と利潤率の変化

定の割合で追加的投資を行なうと想定する。本来であれば技術更新時に大きな投資が行なわれるという場合、固定資本の存在を念頭においている。今回のように固定資本を捨象しているにもかかわらず技術更新時に大きな投資を想定するということは必ずしも論理整合性があるとは言えないが、この問題は今回は無視することとする。仮に新技術導入の場合には $s=0.8$ ，そうでない時には $s=0.2$ と想定する。すると剰余価値率と利潤率は以下のような軌跡を描く。



図表8：新規投資の割合を変更した場合

このように追加的投資の割合を一定とする場合に比べて若干安定した軌跡であるが、これは s の取り方に依存するのであり、変動を繰り返すことには変わらない。これが置塩の定式を活かした場合の最も現実的な軌跡なのではないだろうか。ここからは、剰余価値率は次第に上昇し、なおかつ振幅が大きくなっているが、一方において利潤率は期を経るにしたがって0およびその少し上を小さく変動するようになる。これはどのような条件を入れたとしても生産の有機的構成が高度化すれば剰余価値が利潤に与える影響が究極的には小さくなるので当然の事でもある。とはいえ400期でもまだ変動しているのは大きな特徴である。また、技術一定の時には0を中心に変動していた剰余価値率が今回はおおむね正の領域にあるのは、先に技術変化の部分で確認したのと同様、生産の有機的構成の高度化自体が剰余価値率（および利潤率）を引き上げるからである。

結語 資本主義経済と利潤率の低落法則

以上、置塩の定式の問題点を検証し、いくつかの想定を変えて再定式化してみた。ここから言える結論は以下のとおりである。

（１）資本主義経済における景気循環の必然性

投資が非連続的かつ段階的に行なわれるとすると、そうでない場合に比してより明確に利潤率の循環が繰り返される。これのみを取り出して景気循環を語るのは早計ではあるが、やはり景気循環と利潤率の変動が大きく関わっていることを考えると、景気循環の根拠のひとつとして、こうした投資行動があると言えよう。

（２）長期的に見た場合の利潤率低落

期を経るにしたがって技術革新が利潤率に与える影響が小さくなるため、利潤率は低落する。ただし、マルクスの想定によれば技術革新そのものが資本の有機的構成を高め利潤率を低落させると考えられているのに対し、ここでは技術革新自体はとりあえず利潤率を高め、その後の競争過程で利潤率が低落するという構造である。また、一方的に低落するのではなく、利潤率は非常に長期

にわたって上下の振動を繰り返しながら傾向的に低落することが確認できる。

また、この利潤率の低落という構造から以下のことが付随して言える。

(1) 製品サイクルの存在

どのような生産物であっても、技術革新が行なわれ続ければ利潤率が低落する。この場合、利潤率が高い他の部門との競争にさらされる資本家にとっては、当該財の生産を止めるという選択がいずれ訪れるということである。より一般的な言葉で言うのであれば、プロセスイノベーションの限界からプロダクトイノベーションの必然性があらわれるということである。

(2) 巨大な固定資本と独占価格

今回は固定資本を捨象したので暫定的な結論であるが、資本の有機的構成の高度化を固定資本の巨大化と読み替えれば、必ずしも全ての生産物に寿命があるとは言えない。固定資本が巨大化すれば資本移動や参入が制限されるからである。この場合、超過利潤の取得が可能である。

最後に残された課題を列挙する。ただし、すでに問題点としてあげていること、およびすでに置塩において意識されていた点はここでは省き、重複せずかつ重要と思われる点のみ記載する。

(1) 信用論の導入

今回は信用の存在は無視した。しかし、利潤率の低落が新技術の導入を強制するのであれば信用の存在を無視することはできない。利潤率が下がり自己の調達資金が不足する中で新規投資を行なわなければならないからである。

(2) 投資行動の決定理論

信用を無視したため、今回は上記のような投資行動を想定したが、信用論を導入すると投資は利子率にも大きく依存することとなる。その際には、最大収益率が利子率に等しくなるところで投資が決定されるというケインズの想定を検証する必要も出てくるであろう。

参考文献

- 東浩一郎 (2000), 「欧米価値論論争の現状」, 『現代資本主義と労働価値論』, 中央大学出版部。
- (2003), 「IT (情報通信技術) による産業構造の変化とマクロ経済への影響 — 置塩定理の意義と限界 —」, 『東京立正女子短期大学紀要』, 東京立正女子短期大学, 第31号。
- 置塩信雄 (1977), 『マルクス経済学 — 価値と価格の理論 —』, 筑摩書房。
- (1987), 『マルクス経済学Ⅱ — 資本蓄積の理論 —』, 筑摩書房。
- (1997a), 「マルクスの利潤率循環」, 『大阪経大論集』, 第5号 (『経済学と現代の諸問題』, 大月書店, pp.165-186, 2004年)。
- (1997b), 「剰余価値と新技術導入」, 『経済』, 1997年10月号 (『経済学と現代の諸問題』, 大月書店, pp.149-164, 2004年)。
- Okishio, N. (2000) "Competition and Production Prices," *Cambridge Journal of Economics*, Vol.25 (『経済学と現代の諸問題』, 大月書店, pp.187-199, 2004年)。
- 置塩信雄 (2004), 『経済学と現代の諸問題』, 大月書店。

注

- 1) 置塩 (2004), p.199。なお本稿における引用は置塩 (1997a), (1997b), および Okishio (2000) において発表されたものであるが, 引用ページはこれらを全て収録した置塩 (2004) をもとにしている。以後これらの一連の論文からの引用に関しても同様である。
- 2) ただしこの式そのものは置塩の独創ではない。
- 3) 「反対に作用する諸原因」(『資本論』第3巻, 第3篇, 第14章) 参照。
- 4) 置塩 (1987), 第3章, 第2節参照。
- 5) ただし, ここに整理した3つの結論は, 資本家の個人消費が存在せず, 労働供給も一定と仮定した場合である。置塩はこれらの想定をはずした考察も行っており, それぞれ若干違った結論を見出している。しかし置塩においては技術一定においては利潤が消滅するというところに力点が置かれているため, 本稿では資本家の個人消費や労働供給が増える場合に対する考察は捨象する。
- 6) もちろん, ここでは景気循環, 恐慌, そして需給不一致における市場価格の存在などをすべて捨象している。本来であればこれらの点を考慮して置塩理論を検証する必要がある。しかし, 置塩自身が一連の論文においてこれらを捨象しているので, とりあえずはこれに沿って考察を進める。
- 7) 置塩 (2004), p.187。
- 8) 同上, pp.155-156。

- 9) 同上, p.152。
- 10) これは置塩の呼び方であり, C/N をあらわす。以下, 生産の有機的構成という言葉はこの意味で使用する。
- 11) 同上, p.153。
- 12) なお, 本稿における計算およびグラフはすべてExcelを使用していることをことわっておく。置塩は時期的なこともありBASICでプログラムを組み計算しているが, 現時点においてはExcelを使う方がより簡単であるし一般的であろう。Excelであれば, 初期値と式を2本(式1および2をそれぞれ $N+1=\dots$, $W+1=\dots$ という形式に変更したもの)記入するだけですみ, あとはオートフィル機能を使えば何期でも計算できるからである。具体的な方法については補注を参照されたい。
- 13) 同上, p.158。
- 14) ただし821期にはExcelで計算できる桁数を超えて賃金率は0になってしまうため若干不正確な数字である。
- 15) 同上, p.175。
- 16) 式はすべて, 同上, pp.171-173。
- 17) 左辺が t 期であれば, 右辺における生産手段価格と賃金率は $t-1$ 期ではないのか, という疑問である。この疑問は, 欧米価値論論争においても度々論じられており極めて重要である。しかし置塩は当該論文を含め随所でこの点に言及しているため, 本稿では紙面の関係上論じきれない。欧米価値論論争における時間概念については拙稿(2000)を参照されたい。
- 18) 式2における問題とは, 言うまでもなく労働市場における需給関係によって賃金率が決定されるという雇用理論にある。置塩はマルクスの雇用理論は古典派の流れを継承していると考えるので, こうした式が承認される。たしかに, 景気循環の一局面において労働需要が労働供給を大きく上回れば賃金率が上昇するということをマルクスも想定している。しかし, 労働力価値は労働力の再生産費として社会的に決まるものであり, 労働市場において一意的に決まるとは考えていないのである。
- また, 実際に変化する賃金率は実質賃金率ではなく貨幣賃金率であるという問題もあるが, これについては別のところで置塩自身が言及しているのでここでは問題にならない。しかし, 非自発的失業を考慮に入れるとやはりこうした式自体が成り立たなくなる。
- 19) Excelにおける作成方法は補注を参照されたい。

補注: Excelによる計算とグラフ化について

脚注でもふれたが、置塩はすべての計算をBASICによるプログラムによって行なっている。しかし、現在においてはExcelを使うことで、より簡単に計算したりグラフ化したりすることができる。日常的にExcelを使用している方にとっては問題ないだろうが、敷居が高いと感じている方もいるのではないだろうか。PCを購入すれば最初からExcelがインストールされていることも多いので参考になれば幸いである。

以下、今回作成した表やグラフについて簡単に記述する。

1. 剰余価値率の消滅(技術一定)

右が、最初に作成する表である。

もちろん作る場所や罫線、列と行

	A	B	C	D	E	F	G	H	I
1	期	N	W	s	μ	H	Ns	z	M
2		0	70	0.6	0.5	1	1	100	0.8

の入れ替えなどは自由でよい。数字はセルB2～H2に関しては置塩の初期値をそのまま記述しただけである。これにI列を加え剰余価値率Mを計算している。なぜか置塩の論文においては「剰余価値と新技術導入」がタイトルになっているにもかかわらず剰余価値率が計算されていない。剰余価値率を計算するためにセルI2に以下の式を入れた。

$$I2 = (1 - C2) / C2$$

次に、セルA2に0と記入し、B3およびC3に雇用量Nと賃金率Wを計算するために式を記入する。これも置塩が採用した式をそのまま記述するだけである。

$$B3 = B2 * (\$E\$2 + C2 + \$D\$2 * (1 - C2)) / (\$E\$2 + C3)$$

$$C3 = C2 * (1 + \$F\$2 * (B2 / \$G\$2 - \$H\$2))$$

この際、D列のsからH列のzまでは期にかかわらず固定的であると想定されているので、絶対参照(絶対セル番地)を使用している。絶対参照とは後に式をコピー(オートフィル)して数百期におよぶ表を完成させるのだが、その際、コピー先の位置にかかわらず式が参照するセルが固定されるということである。作成する際はわざわざ\$を記入しなくても、セルを指定したときにファンクションキーのF4を押せば自動的に絶対参照となる。

ここまで完成したらあとは好き
なところまでコピー（オートフ
ィル）すればよい。セルB3～C3を
選択するとフィルハンドルが表
示されるので、これをマウスでドラ
ッグする（右参照）。もっとも
Excelで取り扱えるのは65,536行
までなので、2行目を0期とする
と65,534期までしか計算できない。
また、小数点として計算できるの
が最大15桁までなので制約があ
る。とりわけ今回のような計算に
おいては、0に近づくときに小数
点以下0が続くようになると計算
できない場合が生じる。計算の分
子部分が計算できずに0になる場合には結果も0と表示されるだけだが、分母
が計算できないとエラー表示されることがある。

	A	B	C	D	E	F	G	H	I
1	期	N	W	B	μ	H	N ₀	z	M
2	0	70	0.6	0.5	1	1	100	0.8	0.66667
3	1	81.81818	0.54						0.85185
4									
5									
6									
7									
8									
9									
10									

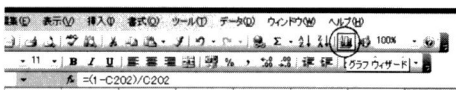
	A	B	C	D	E	F	G	H	I
1	期	N	W	B	μ	H	N ₀	z	M
2	0	70	0.6	0.5	1	1	100	0.8	0.66667
3	1	81.81818	0.54						0.85185
4	2	93.44205	0.548618						0.81818
5	3	102.1424	0.623725						0.60527
6	4	105.0429	0.761835						0.31452
7	5	101.1856	0.852617						0.04874
8	6	92.81971	1.154435						-0.13378
9	7	83.74052	1.302431						-0.23220
10	8	76.61953	1.351148						-0.25988
11	9	72.3025	1.305473						-0.23399
12	10	70.58927	1.204884						-0.17011
13	11	70.95732	1.081587						-0.08390
14	12	72.8414	0.992878						0.00717
15	13	75.67035	0.921802						0.08483
16	14	78.84732	0.881891						0.13393
17	15	81.76324	0.871726						0.14715
18	16	83.87618	0.887086						0.12727
19	17	84.83942	0.921482						0.08521
20	18	84.6092	0.966076						0.03512
21	19	83.44917	1.010604						-0.01048
22	20	81.81077	1.045462						-0.04348
23	21	80.15974	1.064393						-0.06050
24	22	78.84463	1.066093						-0.06200
25	23	78.04884	1.053775						-0.05103
26	24	77.80597	1.033215						-0.03215
27	25	78.04055	1.010546						-0.01044

I2の剰余価値率も同様にコピーすればよい。ただし、A列の期に関してはコ
ピーする際注意が必要である。というのも、セルA3に1と記入し、これだけを
選択してコピーすると全てのセルに1と記入されてしまうからである。これを
回避するためにはマウスの右ボタンを使う方法もあるが、あまり長くコピーす
るときにはやりづらい。そのようなときにはセルA2～A3を選択して、フィル
ハンドルをドラッグすればよい。

こうして完成したもの（の一部）が上の表である（便宜上D～H列の3行目
以降に色をつけているが、これは必要ない）。

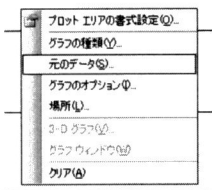
次にこれをグラフ化してみよう。

まずはセルI1～I202を選択し
（選択の際は、セルI1をクリック



し、次にShiftキーを押しながらセルI202をクリックするとやりやすい）、グラフ

フウィザードをクリックする（前ページ参照）。あとは必要なグラフを選択して指示にしたがって作成する。ただこの際、X軸のラベル（期をあらわす）に注意が必要である。本来であれば、ここに期を表示したいのでセルA2～A202も同時に選択してからグラフウィザードを起動するのだが、今回のように期が単なる数字の場合、Excelはこれを数値データと勘違いしグラフ化しようとしてしまうのである。そこで軸に表示すべき部分を選択しなかったのだが、この場合Excelが自動的に1からの連番の数値をふってしまう。ところが置塩においては0期から始まっているためラベルが1ずつずれてしまうのである。この場合は次のように修正する。まずはグラフ内



を右クリックし「元のデータ」をクリックする（右上図参照）。次に、系列タブをクリックし、「項目軸ラベルに使用」の欄をクリックしてから、元の表のセルA2～A202を選択する。そしてOKをクリックすると、正しいラベルが表示される（右図参照。ただし、別のグラフで行なった操作を表示したのでグラフの形状およびシート名「価格計算」が異なっている）。



2. 剰余価値の消滅（技術変化）

置塩においては μ が每期、前期 $\times 1.015$ の割合で上昇するという形で技術変化を処理している。したがって以下を書き換える。

$$E3 = E2 \times 1.015$$

$$B3 = B2 \times (E2 + C2 + \$D\$2 \times (1 - C2)) / (E3 + C3)$$

B3においては、E列の参照を相対参照とするが、その際、分母をE2からE3に書き換える必要がある。こうしてセルの式を書き換えたら、B列およびE列を

好きなところまでコピー（オートフィル）する。

3. 利潤率の低落（技術不変）

作成方法は基本的に価値タームのときと同一である。ただ式については若干複雑となる。

まずセルK2～L2に置

塩が想定した数値をそのまま書き込む。次に価格方程式を書くが、価格に関しては0期のみ式が異なっている。本文中で触れたように、価格は前期の価格や利潤率から判断した調達資金量によって決まるが、これを0期に適用してしまうと価格が算出できなくなってしまうからである。この点に注意して以下の式を書き込む。

$$D2 = K2 * M2 * 1.1 / (1 - S2 * 1.1) \quad (0 \text{ 期の生産財価格})$$

$$D3 = (H3 + I3) / B3$$

$$E2 = (T2 * D2 + L2 * M2) * 1.1 \quad (0 \text{ 期の消費財価格})$$

$$E3 = M3 * J3 / C3$$

消費財産出量も同様の理由で1期とそれ以降の期で式が異なる。

$$C3 = (1 - S3) * B3 / T3 * 1.1 \quad (1 \text{ 期の消費財産出量})$$

$$C4 = I3 / (D3 * T4)$$

あとは前回同様に、必要な式を入れるだけである。ただし、今回はパラメータを変更する可能性も考慮して絶対参照は使っていない。

$$B4 = H3 / D3 / S4$$

$$F2 = D2 / (S2 * D2 + \$K\$2 * M2) - 1$$

$$G2 = E2 / (T2 * D2 + \$L\$2 * M2) - 1$$

$$H3 = (1 + R3 * F2) * D2 * S3 * B3$$

$$I3 = (1 + R3 * G2) * D2 * T3 * C3$$

$$J3 = \$K\$2 * B4 + \$L\$2 * C4$$

$$M3 = N3 * O3 * J3^P3$$

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T		
1	Q	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%		
2	0		3.28%	2.87%	0.1	0.1						1	1	1	2.87%	0.06	0.1	0.1	0.5	0.6	0.5	
3	1	100	88	3.53%	2.94%	0.134	-0.26	209.3	149.5	180.8	1	1	1	1	0.86%	2.87%	0.06	0.1	0.1	0.5	0.6	0.5
4	2	86.1%	84.92	2.81%	1.89%	0.154	-0.28	217.5	150.1	172.3	1	1	1	1	0.86%	2.78%	0.06	0.1	0.1	0.5	0.6	0.5
5	3	100.3%	71.88	3.44%	2.31%	0.147	-0.13	234.2	111.1	177.9	1	1	1	1	0.87%	2.71%	0.06	0.1	0.1	0.5	0.6	0.5
6	4	113.4	64.5	3.13%	2.88%	0.114	0.156	251.4	108.9	200	1	1	1	1	0.84%	2.67%	0.06	0.1	0.1	0.5	0.6	0.5
7	5	133.7	66.29	2.82%	3.41	0.06%	0.439	265.7	112.1	236.1	1	1	1	1	0.85%	2.65%	0.06	0.1	0.1	0.5	0.6	0.5
8	6	155.2	79.34	2.92%	3.50%	0.073	0.513	274.4	136.7	278.6	1	1	1	1	0.89%	2.76%	0.06	0.1	0.1	0.5	0.6	0.5
9	7	174.4	104.2	2.97%	3.11%	-0	0.34	277.1	172.1	312.8	1	1	1	1	1.08%	2.84	0.06	0.1	0.1	0.5	0.6	0.5
10	8	178.2	133.6	2.66%	2.84%	0.006	0.069	275.6	205.4	323.9	1	1	1	1	1.05%	2.86%	0.06	0.1	0.1	0.5	0.6	0.5
11	9	172.8	151	2.80%	2.47%	0.003	-0.14	277.4	206.3	323.9	1	1	1	1	1.03%	2.82%	0.06	0.1	0.1	0.5	0.6	0.5
12	10	164.6	149.3	2.80%	2.03%	0.006	-0.18	261.8	185.8	306.2	1	1	1	1	1.06%	2.78%	0.06	0.1	0.1	0.5	0.6	0.5
13	11	161.8	134.8	2.89%	2.10%	0.006	-0.13	289.7	178.1	290.3	1	1	1	1	0.97%	2.69%	0.06	0.1	0.1	0.5	0.6	0.5
14	12	167.1	120.4	2.78%	2.19%	0.006	-0.08	289.3	168.3	286.3	1	1	1	1	0.95%	2.63%	0.06	0.1	0.1	0.5	0.6	0.5
15	13	179	119.3	2.64%	2.54%	0.041	0.12	308.3	165.1	319.1	1	1	1	1	0.95%	2.62%	0.06	0.1	0.1	0.5	0.6	0.5

N3 =N2+Q3*(E2-N2) (なお、セルN2は0期の予想価格であるが、
ここには=E2と記入し、0期の消費財価格と同じとする。)

O2 =\$M\$2/\$N\$2/(\$K\$2*\$B\$3+\$L\$2*\$C\$3)^\$P\$2 (Lの値は固定
的であると想定されているので絶対参照を使う。)

後は置塩の想定した数値をそのまま記入し、必要などころまでコピー（オートフィル）すれば完成である。グラフの作成方法も前回同様である。

4. 置塩の想定を変更した場合の剰余価値率の変化

第3章において、賃金率が0.9よりも大きい場合には生産の有機的構成を高度化する新技術を導入するという想定を持ち込んでいる。これは価値タームにおける計算で使った表を以下のように変更すればよい。

E3 =IF(C2>0.9,E2*1.015,E2)

単なるIF式であるからそれほど難しいものではないだろう。IF式はいくつも重ねることができるので（ネスト）、本来であればもっと複雑な条件を取り入れることが可能である。今回は時間の関係上できなかったが、今後さまざまな場合を想定した検証を行いたい。

セルE3を上記のように書き換えたらあとは好きなどころまでコピー（オートフィル）すればよい。ただ、先に絶対参照を相対参照に変更したが、ここにおいても同様の操作が必要である。

A Study on Language and Autism

— Defective Communication as the Reflection of Human Mind —

Noriko Nakaoka

1. Introduction

Communicating with an autistic child is not easy, sometimes very difficult or seems almost impossible to ordinary people. However, this does not mean that he or she avoids or hates communicating with others. The word "autism" is often misunderstood by many people, particularly in Japan. The word 'autism' is translated into 「自閉症 (jihei-sho)」 in Japanese, using three Chinese characters: 「自」 meaning 'self', 「閉」 'closed', and 「病」 'disease'. Because of the Japanese terminology, many of the Japanese are apt to hold a false impression that an autistic child is a child who avoids interaction with others by his or her own will. In another word, an autistic child is often regarded as a child who has locked himself/herself up in his/her own cell of self as he/she wants to be separated from the outside world.

"Autism" is a disease caused by serious defects in the function of brain. Autistic children are those whose communication ability is not fully developed because of damages in their brain tissue for some reasons. Because of this, they cannot communicate with others as ordinary children do.

The symptom of autism varies greatly depending on individuals suffering autism. Specialists argue that if there are 100 autistic children, there would probably be 100 different patterns of symptoms.

Some of autism children remain totally mute throughout their whole lives. Some speak out only a single word, not even a short sentence, and some repeat

same phrases over and over again. Some only repeat what they hear, the symptom of which is called "echolalia." In particular, sing-a-song repetitions are calming, joyous activities for many autistics who are occasionally engaged in. In general, many autistics have a keen sense of tone or rhythms. Therefore they can sometimes understand meanings of spoken language much better which have rhythm and sound like a song. Some seem to have suffered from only a slight delay of development of language ability, and to have acquired a large number of vocabulary. But even so, they cannot continue conversation with others. They cannot make an ordinary conversation in such a way as two-way communication. They often speak to themselves on favorite subjects.

We are going to take a short glance at language confusion among autistics. The following list of words was made by a 12-year-old autistic girl. As "NO" and "KNOW" are pronounced in the same way of [nou], she might have confused the two words and was supposed to make a guess that a negative word of "NO" was inserted into a different word of "KNOW." Then she seemed to make another guess that there must be a word 'KYESW' in which an affirmative word of "YES" was put between K and W, and was pronounced in the same way of YES [jes].

NO (negative)	KNOW
YES (affirmative)	KYESW (?)

Though this type of confusion, however, is not necessarily observed among autistic children, her confusion observed here must block her development of language. She created a new word such as "KYESW" by making her own guess by hearing some words, which means that she has a high level of intelligence. But in spite of her high level of intelligence, she seems to have lost her way in the labyrinth of language.

Even if they cannot speak language or cannot avoid confusions of words, autistic children have intelligence. If they are put in appropriate language

environments or are given proper aids for learning language such as flash cards, picture cards, and a computer, they would begin to understand the meanings of language: what they are required to do; what is today's schedule; which step they should take next; and what they are not allowed to do. Being assisted with these tools, some would become able to communicate with others to some extent. It is a case in point that they stay in a computer room and continue "talking" for hours with others in a computer network. In the chat rooms, discussion boards or websites only for autistics, some of them can communicate with other autistics by using computers terminals. This is a good example how they can learn to communicate with others with the aid of learning tools.

The followings are chat rooms in the United States.

#autistichat (<http://www.autismforum.net/>)

#chatautism (<http://www.chatautism.com>)

#wrongplanet (<http://www.wrongplanet.net/>)

#aff (<http://www.aspiesforfreedom.com>)

The purpose of this paper is to decipher the mystery of a hidden language property of autistic children. It is difficult to collect data about problems of language acquisition by autistic children and to make analyses about them because, as already mentioned, symptoms of individual autistics are totally different among them. However, if we choose one autistic child as a case study, and observe her peculiarities and difficulties she was faced in her daily life, the study of autism will provide us a clue to analyze the relationship between language ability and the human nature.

2. Language as the Reflection of Human Mind

Cognitive science teaches that mind is part of the function of brain, that is

to say, part of phenomena of human beings. The function of brain is also supported by biological factors such as heredity, embryo, and evolution. Language is so closely related with human mind that language should not be regarded just substance outside of mind, but as part of the function of mind.

Noam Chomsky argues that large parts of what adult mind can do are innate. No child is born to be able to automatically speak a language. All people are born only with a powerful language-learning ability, which allows them to learn a mother tongue very quickly and easily in their early years.

Noam Chomsky considers that the ability of language acquisition is the universal property which human beings innately born with. Therefore, language is a mirror which reflects human mind in a deeper sense. Language is a production of working of human intelligence and is acquired by each individual through the process far beyond the dimensions of intension and awareness.

Human language is an extraordinarily complicated system. It would be impossible for any other creatures to achieve such a highly intellectual development as language. If a creature, which is not innately born with a language, could have its own language, it must need an extraordinarily large amount of well-organized and unbearable learning effort to acquire it.

In case of human beings, however, no infant needs special efforts or programs to acquire a mother tongue. Within a comparatively short period of time, every normal infant can acquire a language without fail. What is needed is that they should be put in language learning environments. Every infant soon comes to discover, to generalize and to use specified rules of a language and its complicated structures. Even though inside structures of a particular language look quite complicated and specified, no infant feels it difficult to perceive this complicated system. In short, any infant will never fail to acquire this elaborate language system. Thanks to a language, we can exchange ideas and share feelings with others. Through this interaction with others, we can create new

ideas and subtle perception of the world and can influence a decision making of others.

"Chomsky made the concept of "modularity" a critical feature of the mind's cognitive architecture. The mind is composed of an array of interacting, specialized subsystems with limited flows of inter-communication."

Chomsky also states that by making researches about specified features, structures, organizations, and usage of natural languages, we could comprehend intellectual characteristics of human beings. If the cognitive capacity of human beings is truly unique and the most remarkable, the studies on languages would necessarily lead to deep understanding of the human nature.

Even though every child is innately born with language ability, most of autistic children are actually born defective in their language ability and have troubles with acquiring their mother tongue. For a long time, the real problem of language acquisition by autistics has been ignored by treating them as being mentally deterred or psychopath. But as the language acquisition problem of autistics reflects the function of brain, the study of these issues will certainly shed light on the relationship of human intelligence and brain.

If autistic children are accepted as a member of their society, and are given proper instructions and education in the early stage of their childhood, they will develop communication ability which is sufficient for them to communicate with others. As the study of particular languages such as English or Japanese provides us with "significant knowledge about human nature" as Chomsky said, the study of the phenomena of language defects of autistics would also provide us with significant insight about the human nature.

3. Definition of Autism

1) Autism

Autism is not a mental disease, but it is a life-long biological condition that affects adversely the development of the function of brain of children. In another word, it is not a psychological condition but a neurological one. Autism is not caused by childhood trauma or abuse after their birth, but by physical damage done to certain areas of the brain either before birth or in the early childhood. Damaged brain will affect not only their ability to make social interaction with others, but also their ability to have perception, to make motor coordination, to envision imagination, and to use language.

2) Classic Autism

Of the most common descriptions of autism, Dr. Leo Kanner's syndrome is referred as classical autism, which implies low-functioning of brain. Dr. Kanner is the medical doctor who first coined the word of "the early infantile autism" in 1943, based on the study of a group of eleven children at the Johns Hopkins Hospital.

Classic autism can be referred to the most severe form of autism. Many of them suffering classic autism are nonverbal. They suffer from hypersensitivity to environments such as sounds and color, and also have a great deal of difficulty of adapting themselves to changes of their surroundings. Certain sounds, color, and textures, which do not usually give any unpleasant feeling to ordinary people, will cause them to feel extremely upsetting. Occasionally some adhere to ritualistic behavior patterns and routines in their daily life. Any changes in routines can upset them, cause a panic in them and make them retreat from daily life to their own confined world.

3) High and Low Functioning of Autism

The terms of high functioning and low functioning are applied to people with an autism diagnosis. Although the actual distinction between high functioning and low functioning is ambiguous, the followings are the common criteria for each of them.

High Functioning of Autism: those who have language skills

(those who can read, write, listen and speak)

those who score an IQ above 70~80

Low Functioning of Autism: those who do not have language skills

(those who cannot read, write, listen or speak)

those who score an IQ below 70~80

4) Asperger's Syndrome

Dr. Hans Asperger, a German scientist, studied a different form of autism at the same time when Dr. Leo Kanner did, but Asperger's work came to be known to the world after World War II.

Asperger's syndrome is considered as the "highest form" of autism. Unlike High Functioning Autism, Asperger's syndrome does not have delay of language acquisition. Even though those who suffer high function autism can speak a language as seemingly ordinary people, they actually cannot make a social interaction with others. They have sensory issues and obsessive compulsive disorder. As in the case of this syndrome, there is no language acquisition problem, we will not discuss it in this paper.

5) Symptoms of Autistic Children

Following symptoms in relation to language acquisition are possible indicators to measure autism spectrum disorders.

- ① By one year of age, a child does not babble, point, or make meaningful gestures.

- ② By 16 months of age, a child does not speak even one word.
- ③ By 2 years of age, a child does not start pivot words: two-word sentences.
- ④ A child does not respond to his or her name called.
- ⑤ A child lacks language or social skills.

There are some other indicators which seem to have little relationship directly with language.

- ⑥ A child lacks eye contact.
- ⑦ A child seems not to know how to play with toys in a usual manner.
- ⑧ A child excessively lines up toys or other objects.
- ⑨ A child is attached to one particular toy or object.
- ⑩ A child doesn't smile socially. (But he or she may smile during periods of self-stimulatory behavior.)
- ⑪ A child seems to have hearing problems occasionally.

4. Normal Language Acquisition Promoted by the Daily Interaction

1) Being Soaked in Daily Repetition of Communicative Exchanges

Since they breathed for the first time after their birth, through daily activities such as bathing, feeding and dressing, infants have been exposed to environments of communicative exchanges with their parents, family and caregivers. During these activities, parents and caregivers give some comments on the infants' reactions and unconsciously often repeat and exaggerate their vocalizations. This sort of daily interaction helps build intimacy between them and their parents or caregivers. It also provokes infants' interests in their surrounding situation. Communicative exchanges in daily interaction provide them with necessary intellectual stimulation for later language development. Through the process of language acquisition, infants are socialized step by step and learn how to communicate, to behave, and to think appropriately in given situations. In this way, infants begin to acquire the skills how to use language

to convey messages to others, to express their own feelings and to achieve their intentions. There are several steps for them to acquire a mother tongue, which are considered to be programmed innately.

2) Response by Cooing and Babbling

Though no one can teach infants how to coo and how to babble at the beginning stage, they begin to respond to their parents or caregivers by cooing and babbling. This means that infants are programmed to coo and babble so as to develop a sense of the role of a language in communication by the end of the first year after their birth. The connection between communication and sound-making such as cooing and babbling marks the opening of true language.

At about one month of age, when their parents or caregiver interact with infants, they generally begin to respond by cooing. Cooing is to repeat vowel-like sounds such as "oooooh" or "aaaaah." At around 3 or 4 months old, infants will add consonant sounds to their cooing.

At between 4 and 6 months old, infants begin to babble. Babbling usually consists of bilabial consonants and vowel sounds. Infants are able to combine these consonants and vowel sounds into syllable-like sequences, such as mamamamamam, bababababa and papapapapa.

3) The First Word :Holophrases:

At the beginning of the second year after their birth, infants start to utter "holophrases": the first words, which usually contain only one or two very simple words at a time. By uttering a single word in certain situation, however, infants seem to represent a whole meaning of an entire sentence.

Pronunciation of infants' first words is usually very different from that of adults. Usually only their parents can catch their sound and identify what they are saying. Most of the first words are nouns: names for things, animals, persons, or events.

When infants start to utter a single word, they pronounce them slowly. However, once they have learned ten words, their speed to learn new words will accelerate faster and faster. This is called "vocabulary spurt".

4) Pivot Words: Two-Word Sentences

By their second birthday, children begin to combine words and to generate simple sentences. Initially, the first sentences are often two-word sentences, gradually evolving into longer ones. Children's first sentences have been called "telegraphic speech" because these sentences resemble an abbreviated language of a telegram. Like a telegram, children's first sentences contain mainly essential content words, such as verbs and nouns, but omit function words, such as articles, prepositions, and pronouns, auxiliary verbs.

Although children's first sentences are unavoidably ungrammatical, they are far more than strings of random words combined. Instead, they have a structure of their own. A characteristic of the structure is that some words, called "pivot words," are used in a mostly fixed position, and are combined with other less frequently used words referred to as "open words," which can be easily replaced by other words. For example, a child may use "more" as a pivot word, and create sentences such as, "more cookie, "more car," and "more doggie."

5) Creativity and Overgeneralization

Creativity also plays an essential role in 'pivot words' at the first sentence stage. When children discover some general rule of grammar, they apply that rule and check its effect, and sometimes generate a completely new, but never heard expression, such as 'goed' for 'went', and 'eated' for 'ate'. This overgeneralization of the rule reflects a creative aspect of children's language acquisition. This has been revealed through researches that many of children's early sentences such as "all gone cookie" and "more read" are creative

statements which are not heard in adult speeches.

In Japanese, I once found 「*ちががでた」 '*chigagadeta', instead of 「ちがでた」 'chigadeta', in my daughter's talk in her early language acquisition stage. In Japanese 'blood' is 'chi' , 'bled' is 'chi-ga deta.' She seemed to misunderstand that 'chiga' is 'blood.' When she began to notice the grammatical role of 'ga', she over-generalized it and created 'chiga-ga deta', which she never heard before.

Like the first-word creation, context and actual communication situation plays an important role to understand children's pivot words. This is because first-words and pivot words cannot be separated from the context in order to understand exact meaning expressed by children. As children's use of pivot words increases, the number of single-word use declines, and then the pivot words expression become increasingly elaborate and sophisticated, and develop into sentences.

5. Difficulties, Anxieties, and a Sign of Communication Observed in the Daily Life of One Autistic Child

The followings are excerpts from the nonfiction *For the Love of Ann* written in 1973 by James Copeland, a newspaper reporter of Daily Mirror in Manchester. As this nonfiction was based on the past 20 year-dairy of Ann's father, Jack Hodges, the details of Ann's daily life was reported in a quite exact, vivid and persuasive touch. The following parts are excerpted and underlined by Noriko Nakaoka.

Situations surrounding autistic children in 2005 and those of 50 years ago are dramatically different. However, the excerpts of the book still show us a clear image of difficulties and anxieties of autistic children in their daily life. They also vividly describe us an interacting process of the family life, from the day they heard no cooing from the baby, to the day they heard the first sound

from the eight-year-old girl.

1) A Very Good Baby but No Cooing

Ann was an exceptionally good baby. But she was quite different from other babies. There was no communicative response to her parents from her. She neither cooed nor showed any interest in the outside world.

"Ann was a good baby. An exceptionally good baby. She cried when she was hungry---and that was all. As the weeks rolled by EVERYONE remarked on just how good she was. She would lie in her pram for hours at a time and it was easy to forget she was even there. She was developing perfectly, took all her feed and was putting on weight at a normal rate. But she appeared to take very little interest in the things around her.

But as the weeks rolled on the niggling doubts began. Ann didn't gurgle and coo like other babies. She didn't make a sound except when she was hungry. Now she was sitting up by herself and yet not once did she put out her arms to be picked up and cuddled. Nothing. She showed no recognition." (FLA :For the Love of Ann, p.19)

2) Something Abnormal with her Nerve System

There was something abnormal with Ann's eyesight or nerve system. Ann did not sleep, but only kept staring fixedly at the light for hours.

"Nights became alarming experiences. She would lie staring fixedly at the light above her cot for hours on end. Jack decided to fix a paper shield over the light. But as soon as he did that Ann started to cry. No tears. Just a dry crying sound that eventually turned into a horrifying scream. And the shade had to be removed.....Those first niggling doubts were taking on an aura of horror. No matter what time of night they went in to her, she

appeared to be awake-staring at that light." (FLA: p.20)

3) Unmentionable Fears in her Walking

Generally speaking, parents can find a great pleasure and relief from anxiety when they notice that their baby begins to walk. But Ann's parents felt unmentionably scared in her walking.

"Now her walking was bringing unmentionable fears. She had boundless energy and would run around the house for hours on end, bumping into furniture, falling and fumbling---and never showing any sign of hurt or pain. If anyone tried to pick her up she would start those piercing screams and fight to get away." (FLA:p.21)

4) Mealtime as a Marathon Mind-shattering Experience

Eating time is usually a joyful time for children, even for children who are sick in bed at a hospital. However, eating time became unbearable and heartbreaking for Ann's family. Every mealtime became a marathon mind-shattering experience.

"Weaning her was also proving virtually impossible. Every time they tried to spoon-feed her she screamed until they gave her back the bottle. One particular bottle and teat. She would entertain no other." (FLA: p.2)

"They managed to get her to suck semi-solids from a spoon. But only giving her the bottle to suck between mouthfuls. Each mealtime became a marathon mind-shattering experience for Jack and Ivy. The bottle had become the child's centre of affection. Part of her very life. It went everywhere with her. And that bottle eventually nicknamed "dolly" by the family---was to be part and parcel of Ann's life until she was seven years

old." (FLA:p.20)

5) Scaring Behaviors and Doubt of her Nerves

Probably a two-year-old adorable girl like Ann is a center of affection in a family and neighbors. Even strangers will feel happy to watch such a girl. In case of Ann, however, nobody could feel happy about her, but were scared to watch her behavior. The visiting district nurse doubted the development of her nerves.

"By now her behavior was beyond all reason. She had become obsessed with a chair-one particular chair---and would sit for hours rocking to and fro in it. Then she would bang her head against the wall, and scream if anyone tried to stop her. She pulled her hair out in handfuls and stuffed it in her.

The district nurse who came to visit Ivy after Leslie was born became concerned about the little girl and suggested that they should take her to see a specialist. He admitted he was baffled and sent them on a round of other specialists. Her ears were examined, her eyes, her arms and legs and her chest. But no one could come up with a reason for her behavior."
(FLA: p.22~23)

6) Difficulties with Something New

Almost all autistic children have a problem to accept anything new. However, there are lots of goods around us for daily use, such as dishes, tables, chairs, refrigerators, TV sets, wallpaper, bookshelf, cars, bicycles, bags, clothes, shoes, toothbrushes, towels, and so on. In daily life housekeepers have to replace them with new ones if needed. Family members have to help autistic children do these daily practices. This situation is clearly described in the following paragraph.

"Clothes and shoes were now becoming a problem. It took weeks of perseverance to get her to put on anything new. Ann would scream and try to tear them off. Eventually they found a way round it by letting her wear her old clothes on alternate days, until she became obsessed with the new clothes."(FLA:p.25)

"The teat had now grown to obscene proportions through constant sucking and being scalded with boiling water. Jack and Ivy tried to change it for a new one, but Ann was not deceived. In a way it was uncanny. Here was a child showing every sign of being mentally subnormal, but she could immediately tell if the teat had been changed, even though Jack had spent hours doctoring a new one to look like the old." (FLA: p.25)

"Ivy, who had dreamed for so long of dressing her little daughter up in bows and frills, grew to dread the days when the child required anything new at all. Ann hated change of any kind---including new wallpaper. When Jack re-papered their little lounge, Ann screamed for three days."
(FLA:p.25)

7) Difficulties to Play with Other Children

Autistic children are usually in trouble to play with other children including their brothers or sisters. They are occasionally regarded as visitors from the outer space, and they are mostly excluded from the playing group. Even if close family members try to do their best to help autistic brothers or sisters play together with them, their efforts may result in vain because they cannot communicate with them. Again, this situation is described in the following sentence.

"They (Ann's brothers) had soon given up trying to play with her. She

was vicious and destructive with any toy they gave her. All she wanted were pieces of string, sticks and stones and to be left alone rocking in her chair. Ann always at hand was 'dolly'." (FLA:p.25)

8) Being Forced to Do, but No Response

Though Ann's brothers tried to persuade Ann to look into their eyes, she avoided eye contact. They forced her to pronounce words, but no response came from her.

"By now Ann responded almost immediately to their commands, but she would not look them straight in the eye. They tried holding her face with both hands and putting their own faces close to hers and talking to her. But she seemed to fix her eye on some middle distance and would not look into their eyes. They spent weeks telling her the names of objects, but her only response was to blow down her nose. Apart from that she did not make any attempt to speak." (FLA: p.76)

9) No Sound Uttered for Eight Years

When Ann became eight years old, she could not speak even one word loudly.

"There was no struggling sound fighting to get out, no attempt at anything but blowing down her nose.....She was eight now and they desperately wanted her to have an education. If only those words would come they would get her into a school, or die in the attempt..." (FLA:p.76)

10) Mimicking her Brothers

By mimicking her brothers, she finally began to laugh and show an interest in television programs.

"She now had started showing an interest in television, and with her brothers became a fan of children's programs. She would laugh when they laughed, but Jack was sure she was only mimicking them. But strangely, somehow, she knew when it was time for her favorite programs-even when the boys were not there. That was something they could not understand. It was uncanny in a way. They encouraged her to watch. Perhaps through television there would be the breakthrough."

(FLA:p.76~77)

11) The First Sound, the First Word

She spoke the first word by mimicking her brothers.

"It came on the evening of March 14,1960.(8 years and 2 months old).....Jack and Ivy were watching a quiz program while the children played on the floor with their toy cars. A row blew up between the boys over one particular cars. Jack angrily told them to be quiet, and they continued their argument in whispers. Leslie was trying to take a car out of Leonard's hand, saying 'Yes' and Leonard was adamantly refusing to let it go, 'No,' he said. So it went on for a few minutes, those whispered words 'Yes' and 'No'. And then suddenly there was another whispered voice. Ann had a car in one hand and was pulling it with the other saying 'YEH' and then pulling it back and saying 'NAH'. What a marvelous moment!

(FLA:p.77)

6. Symptoms of Autistic Children in Relation to Language Acquisition

1) Homonym

For persons suffering autism, one sound is strictly bounded with one meaning. This is because they cannot comprehend homonym. It would be very hard for them to accept two or three meanings for one sound. There is one

example to show the case. As "Thai" and "tie" have the same sound [tai], an autistic person refused to eat "Thai" food because, when he heard it, he imagined the food made of "tie."

2) Auditory Defect Doubted by Parents

Autistic children usually neglect sentences spoken to them. The first response from parents to witness the negligence of sounds by their children is that as their children may have serious hearing problems, they cannot hear the sound at all. Parents often take them to a clinic for auditory tests. After the tests, a doctor would explain them that their children have no problems in auditory organs. However, in most cases, parents are not satisfied with doctor's diagnosis, and continue to seek for the real reason for the hearing problems of their autistic children by visiting one clinic after another.

Against parents' expectation, unfamiliar situations at a clinic where they visit may cause panic to autistic children. Their panic may prevent medical tests from being conducted in a proper way. If this happens, parents may not be given diagnosis they need to know. Without full understanding of the problems which their children have, parents cannot treat their children properly and fail to provide necessary training to them at the early stage of their growth. That would aggravate the situations for them.

3) Abnormal Response to Sound

In most cases, autistic children respond certain sound abnormally. Without intensive and careful observation about them, parents may fail to realize what is going on for their children. For instance, autistic children seem to behave as if they do not hear sound of not only ordinary conversation but also a big sound around them. They do not make any clear responses even when they hear even noisy sounds of engines or sirens. But some of them have keen auditory sense to very small fricative sounds produced by crumpling a piece of paper into a

ball. A certain sound torments them so hard that they are driven to panic and try to avoid hearing it by covering their ears with their hands. Surprisingly some of autistic children can perceive sounds beyond the range of the normally perceptible frequency level.

4) Echolalia

Echolalia comes from a Greek word "echo," meaning "repetition of sound," and from another Greek word "lalia," meaning "a form of speech." By putting together these two Greek words, you have a new terminology of "a form of speech sounded repeatedly." Echolalia means that autistic persons repeat a speech made by someone else in an involuntary and meaningless way. People with echolalia may repeat a word, a phrase, or an entire sentence. For example, if someone said to a person with echolalia, "Have you ever watched this film?" he or she would respond by repeating the same sentence of "Have you ever watched this film?" Not only word or sentence but also tone and accent of a speaker is repeated as well.

You may regard echolalia as something like a parroting. Echolalia is observed among patients with Schizophrenia, who suffer a type of mental disorder in which one loses contact with reality. Echolalia is also observed as a symptom of some patients who are mentally retarded (with very low intelligence and poor ability to adapt themselves to new environments). Echolalia is also part of symptom of autistic patients who fail to establish personal and social relationships with others and have language disturbances.

5) Positive Aspect of Echolalia

There are two types of echolalia: one is "immediate echolalia" and the other "delayed echolalia." Immediate echolalia means that a word or phrase is repeated immediately after another person speaks. Delayed echolalia means that echoing of a phrase is uttered after some delay or lapse of time. They will

start to repeat speeches after hours, days, or weeks pass since they hear them. For example, autistic persons repeat TV commercials, favorite movie scripts, or parental scolding whenever they come to mind

However, echolalia is not always a bad sign. It is normal for babies to display echolalia, since they imitate sounds and words uttered by others. Thus, echolalia occurs normally in the process of growing of children. When echolalia occurs outside of this context, it is considered abnormal.

Around 75% of autistic persons exhibit echolalia in one form and another. When autistic children use immediate echolalia, they intend to communicate something with others. If you understand autistic children very well, you come to understand that they have specific intentions of using echolalia. In case of immediate echolalia, language information is stored in short-term auditory memory. In case of delayed echolalia, language information is stored in long-term auditory memory. Reciting entire scripts, autistic children with delayed echolalia are occasionally thought to have near-genius intellect.

7. Conclusion

In Generative Grammar, repetitive phenomena of language have never been discussed. It has been neglected in the academic field. But repetitive phenomena of language should be studied through researches about a peculiar language used by autistic children. If the goal of linguistic study is to explain the nature of human language, the repetitive property observed in the process of language acquisition should be explored in a more appropriate way.

In Generative Grammar, essential characters of a human language are creativity, abstractness, and universality. Generative linguists accept that repetition of phrases and sentences does not reflect the essential character of human language. Repetitive property has been considered out of the purpose of the study by linguists.

However, echolalia is normally observed when babies begin to imitate sounds and words pronounced by others. Besides, most of autistic children display echolalia when they want to communicate with others. In another word, echolalia has been used by autistic children as a substitute for a complete use of language. Complete use of language is only possible when there is full interaction between speakers and listeners.

Analyzing Ann's process of developing language, we will discover that there was a high barrier for her to pronounce sound. No matter how strongly her family forced her to pronounce a word, she didn't. Her first sound came out only after she really wanted to make an interaction with her brothers. Eagerness to interact or to be involved in their activity triggered her to mimic their sounds and to repeat "YEA" and "NAH" which were used in her brothers' conversation. In this case, echolalia means a sign of communication and a sign of language.

As autistic children have difficulties to cope with something new to them, they always feel uneasy about how to interact with others, to respond to something new, and to accept unexpected situations and new information. These prevent them from innovating use of language. What they can do is only to repeat memorized expressions again and again.

Potential capacity of children to acquire language is greater than what we generally suppose. This is also true for potential capacity of autistic children. In order to develop their hidden capacity, we should not neglect their echolalia, but we should accept it as a sign to start to use language and provide them with proper devices to assist the development of their communication ability. Echolalia must reflect one of the essential properties of the ability of language acquisition. Linguists try to pursuit the human nature through the research of language so far. But echolalia should be paid more attention to and should be included in the area of linguistic study.

Reference

Autistic Children Activity Program

<http://www.autismwebsite.com/acap/tic>

Autism Information Library---Autistic Authors Booklist and Facts

<http://www.autistics.org/library/booklist.html>

新井 康充 1997 “ Part 1 最新「脳・意識」 7大理論—男の脳と女の脳はこれだけ違う ”
p.196~205, 『最新科学論シリーズ 心と意識のハード・プロブレム最新脳科学』 学習研究社

Chat rooms in the U.S.A

[#autistischat \(http://www.autismforum.net/\)](http://www.autismforum.net/)

[#chatautism \(http://www.chatautism.com\)](http://www.chatautism.com)

[#wrongplanet \(http://www.wrongplanet.net/\)](http://www.wrongplanet.net/)

[#aff \(http://www.aspiesforfreedom.com\)](http://www.aspiesforfreedom.com)

Chomsky, Noam. 1965, *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge, Mass: MIT Press.

- 1975, *Reflections on Language*, New York: Pantheon Books, 井上和子, 神尾昭雄, 西山佑司訳『言語論』大修館, 1979
- 1980, *Rules and Representations*. New York: Columbia Univ. Pr., 井上和子, 神尾昭雄, 西山佑司訳『ことばと認識』大修館, 1984
- 1997, “A Man without a Language is Not a Human Being” interviewed by Peter Catalano, 花積子訳, p.31~50, 『最新科学論シリーズ 心と意識のハード・プロブレム 最新脳科学』 学習研究社

Copeland, James. 1973, *For the Love of Ann: The true story of an autistic child*, Arrow Books

Grandin, Temple・Scariano, Margaret M. 1994, *Emergence: Labeled Autistic*, カニングハム久子訳『我, 自閉症に生まれて』 学習研究社

石井 哲夫・山岸 裕 1988 『自閉症克服の記録—書くことによって得たもの』 三一書房

石井 哲夫・白石 雅一 1993, 『自閉症とこだわり行動』, 東京書籍

石井 哲夫 2002, 『自閉症児の心を育てる—その理解と養育』 明石書店

石井 聖 2002, 『自閉症児（言語認知障害児）の発語プログラム：無発語からの33ステップ』 学苑社

Hart, Charles. 1989, *Without Reason: A Family Copes with Two Generation of Autism*, Harper & Row, Publishers

北原 キヨ 1980, 『自閉症児のための生活療法・百問百答』 たいまつ社

— 1983, 『生活療法・花の実り—統一・可能性を求めて』 明治図書出版

北原 キヨ・武蔵野東教育研究所編 1981, 『自閉児のための生活療法—武蔵野東小学校

- の実践記録』明治図書出版
- 2000, 『北原キヨの混合教育・生活療法への道—自閉症児と健常児の教育に
ささげた生涯』学苑社
 - 武蔵野東学園ホームページ
<http://www.musashino-higashi.org/top.htm>
 - Boston Higashi School Home Page (in U.S.A)
<http://www.musashino-higashi.org/english.htm>
- 熊谷 高幸 1991, 『自閉症の謎心の謎：認知心理学からみたレインマンの世界』 ミネル
ヴァ書房
- 1993, 『自閉症からのメッセージ』（講談社現代新書），講談社
- 日本自閉症協会・東京都支部 <http://www.autism.jp/>
- 太田昌孝・永井洋子 1992, 『認知発達治療の実践マニュアル—自閉症のstage別発達課題
自閉症治療の到達点』日本文化科学社
- 酒井 邦嘉 2002, 『言語の脳科学：言語はどのようにことばを生みだすか』中公新書，
中央公論新社
- 坂井 聡 2002, 『自閉症や知的障害を持つ人とのコミュニケーションのための10のアイ
ディア—始点は視点を変えること』エンパワメント研究所
- 佐々木正美, 宮原一郎 2004, 『自閉症児のための絵で見る構造化—TEACCHビジュアル
図鑑 学研のヒューマンケアブックス』学習研究社
- 榎原 洋一 2002, 『アスペルガー症候群と学習障害：ここまでわかった子供の心と脳』
講談社α新書, 講談社

フロイト研究（1）

— Sigmund Freudの年表 —

飯 田 宮 子

フロイトと精神分析

オーストリアの神経学者、ジークムント・フロイト（1856－1939：安政3－昭和14）が創りだした精神分析という概念は、心の研究に従事するすべての人が、必ず出会う関門である。フロイトは現在でも、科学的に実証することのできない無意識という心の領域のなかに、溢れるように湧き出る生命の源、リビドー（性的なエネルギー）があると仮定し、そのさまざまな働き・作用により人間の意識生活が営まれていることを唱え続けた。

自分自身が意識する事さえ出来ない無意識，目に見えない無意識，観察不可能な無意識の探求はヒステリー患者に用いた催眠療法にはじまり，夢分析療法，そして精神分析療法をあみ出していった。フロイトは学問の最高学府である大学の中で彼の考えを理論化したのではなく，町医者として1人1人の患者との対話を通して得た，極めて個人的な臨床データに基づき，彼独自の考え方を展開しながら精神分析という理論を構築した実践家であった。フロイトが実践家であることは，彼が自分自身へ向けた深い洞察による自己分析を通して，精神分析理論のキーワードとなる「エディプス・コンプレックス」を発見したことで示される。

フロイトの研究は当時19世紀の終わり，精神の薄弱な者，劣等遺伝子を受け継いだ者，あるいは，悪霊に取りつかれやすい者が罹りやすい，医学的治療の対象外とされていた神経症（ノイローゼ）治療の扉を開いたのである。同時にそれは，心の病を治療する精神医学の出発点であり，暗い心の闇に，奥深く踏み入る初めての挑戦でもあった。

当時の社会体制の中で禁句とされた性に焦点をあてたフロイトの考え方は医学界のみならずあらゆる分野の学者から相手にされず、一般市民の道徳的非難的となった。しかし実際の所、多くの患者はフロイトとの対話療法により治癒していったのである。その治療過程は詳細に書き留められ、貴重な症例研究となり、次第に心の病に取り組む医者たちの注目を引くようになっていった。心の働きに関するフロイト独自の考えは統合され、理論化され、20世紀の初め、精神分析：Psychoanalysisという名でヨーロッパ中に、そして大西洋を越えて、アメリカにまで知れ渡るようになる。人間の心とはいかなるものなのかを探究するフロイトの研究対象は、病んだ個人の心から家族、社会、国家、民族、人類全体に見られる心理現象の解明にまで及んだ。フロイトによりもたらされた、神の存在さえも無視した人間観は哲学、宗教、医学、文学、教育をはじめとして、あらゆる学問に新たな視点で人間を根本的に見直す機会を与えた。フロイトが人々に与える学問的そして社会的影響力が強くなるに従って、精神分析に対する抵抗と圧力は絶え間なくフロイトを押しつぶそうとしたのである。無意識の中に溢れ出る性的な、そして攻撃的な力が人間を突き動かしているという考えを提示し続けたフロイトの闘いは休むことなく粘り強く続いた。その闘いの経緯は、晩年フロイトが、ウィーンに進入したナチス・ドイツから逃れ、イギリスへ亡命した後に録音したBBC（英国放送協会）に残されている。力をこめて読まれた英文スピーチの声がかすれ、発音が所々不明瞭なのは、16年の間フロイトを苦しめた顎のがんによるものである。この放送の翌年、フロイトは亡命先のイギリスで亡くなった。

“I started my professional activity as a neurologist, trying to bring relief to my neurotic patients.

Under the influence of an older friend and by my own efforts I discovered some important new facts about the unconscious in psychic life, the role of instinctual urges and so on.

Out of these findings grew a new science, psychoanalysis, a part of psychology and a new method of treatment of the neuroses.

I had to pay heavily for this bit of good luck. People did not believe in my facts and thought my theories unsavoury.

Resistance was strong and unrelenting.

In the end I succeeded in acquiring a few things and leaving us^(注) an International Psycho-Analytic Association but the struggle is not yet over.”

Sigmund Freud, BBC broadcast recorded at Maresfield Gardens,

7 December 1938.

(Cited in Multimedia from Encarta, Sigmund Freud)

私は神経症に悩む患者たちの苦痛を取り除くことを試み、神経学者として専門的な活動を始めました。

古い友人の影響と私自身の努力により、私は心の中の無意識についていくつかの重大なそして新しい事実を発見しました。

その事実とは本能的衝動の役割やはたらきに関するものです。

このような発見の中から、心理学の一部である精神分析という新しい科学が創りだされ、そして神経症の新しい治療方法が生まれました。

私はこの幸運に対してかなりの代償を支払わなければなりませんでした。

というのは、多くの人々は私が発見した事実や私の考え、私の理論を道徳的に好ましくないものとしてまったく信じなかったからです。

抵抗は大変強く厳しいものでした。

最後に、私は多少の力を得て、国際精神分析学協会を残すことに成功しましたが、その闘いはまだ終わっていません。

1938年12月7日、メアースフィールド・ガーデンズにてBBC（英国放送協会）録音、ジークムント・フロイト

（「Sigmund Freud」エンカルタのマルチメディアから引用）

（飯田宮子訳）

(注) 録音スピーチでは、in acquiring a few things and leaving us という文言になっているが、フロイトが残した英文原稿では、in acquiring pupils and building up と書かれている。フロイトは原稿を書き終えた後に、あるいは録音直前にin acquiring pupils and building up International Psycho-Analytic Association（弟子たちの力を得て、国際精神分析協会を築き上げること）を in acquiring a few things leaving us an International Psycho-Analytic Association（多少の力を得て、国際分析協会を残すこと）に変更したのである。上記引用文では、録音された文言そのままを記載し、訳す。

本稿では、オーストリア、ウィーンにあるフロイト博物館に記載されているフロイト年表を基礎として、彼の生い立ちとその理論成立の背景となった人々との出会いと出来事を年表順にたどる。

Sigmund Freudの年表

1856（安政3）：0歳 ユダヤ人であるジギスムント・フロイト（Sigismund Freud）は1856年5月6日 モラビアのフライベルグ（現在、チェコスロヴァキア共和国のプリボール）に生まれる。ユダヤ人の習慣に従って、シロモ（Schlomo）というユダヤ名もつけられていた。22歳の時に、オーストリア人が呼びやすいように、ジギスムント（Sigismund）からジークムント（Sigmund）という現在広く知られている名前に改名する。彼の父ヤコブは毛織物売るユダヤの商人であった。母アマリエは父ヤコブと親子ほど離れた（20歳年下の）3番目の妻である。フロイトは彼らの最初の子供として生まれたが、父ヤコブには先妻の間にすでに成人した二人の息子がおり、その一人はすでに結婚し、フロイトよりも年長の孫（フロイトにとっての甥）もいた。ヤコブを家長とするフロイト一家は小さな家の2階を間借りして日々の生活を営んでいた。

1859（安政6）：3歳 フロイト家の経済的困窮により、家族は仕事を求め、オーストリアの首都、ウィーンのレオポルトシュタットに移る。そこにはユダ

ヤ人ばかりが集まるユダヤ人街（ユダヤ人ゲットー）があった。フロイトはその後、1938年までの79年間ウィーンに住み続ける。

1865（慶応1）：9歳 フロイトはふつうの子どもより1年早く、ジムナジウム（中学・高校）に入学を許可される。すでに8歳でシェークスピアを読み、思春期には、ゲーテの随筆“自然について”という講義を聴き、感動する。

1873（明治6）：17歳 ウィーン大学医学部に入学する。

1874（明治7）：18歳 ウィーン大学で反ユダヤ主義があることを知り、ユダヤ人差別に対し強く反対する。

1876（明治9）：20歳 生理学者ブリュッケ教授の指導下、神経系の解剖生理学の研究に没頭し、ウナギ、ザリガニの神経細胞を調べる。

1877（明治10）：21歳 最初の学術論文「ウナギの生殖腺の形態と構造について」を発表する。

1879（明治12）：23歳 脳解剖学者マイネルト教授の精神医学の授業を受ける。

1880（明治13）：24歳 1年間、兵役に従事する。

1881（明治14）：25歳 ウィーン大学にて医学博士号を取る。

1882（明治15）：26歳 ユダヤ人であるため、ウィーン大学において研究職につけないことをブリュッケ教授より言い渡される。大学における研究者の道を断念し、生計を立てるため、ウィーン総合病院に見習い医師の職を得る。そこでフロイトは神経病の医者として身体的原因がわからない症状に悩む神経症

の患者を診察し、その不思議な症状に強い関心を持ち始める。同じ年、生涯の伴侶となるマルタと出会い、婚約する。以後、結婚までにマルタと900通におよぶ手紙のやりとりをする。これらの書簡は「マルタへの手紙」と呼ばれ、フロイト研究の貴重な資料となる。

1884（明治17）：28歳 コカインが目や鼻の外科的手術の局部麻酔薬として医学的に用いることが出来るのではないかと最初に考えたのは、フロイトである。しかし、フロイトの考えは同僚に盗用され、同僚の業績になってしまう。さらに、フロイトは、コカインが元気をなくした神経症の患者に精神強壮剤（精神を鼓舞する薬）として医学的に使用可能かどうかを臨床的に研究した。フロイトの友人にコカインの服用を薦めたところ、その友人が中毒になり発狂の果て、死亡する。コカインの中毒性が明らかになり、フロイトはウィーン医学界から非難をあびる。

1885（明治18）：29歳 フロイトは将来に対する希望を失い、今までに書いた日記の類をすべて捨てる。奨学金をもらい、フランス、パリにある慈善病院サンペトリエール病院（有名な精神病院）にいるシャルコー教授の下で神経症の一種である、ヒステリーについて勉強する。シャルコーは当時神経の損傷による病気の治療についての世界的権威者であった。シャルコーは、身体的に病気の原因がわからないヒステリー患者に催眠術を用い、人為的にヒステリーの症状（大発作）を作りだし、多くの学識者の前でデモンストレーションをして見せた医者である。フロイトはそのデモンストレーションを目の前にして、大変驚くとともに、感動する。サンペトリエール病院で、女性と同じヒステリー症状を訴える男性患者を多く発見する。なぜ身体的原因のない所に病気が存在するのかという疑問を抱きつつ、フロイトは神経症、特にヒステリーという病気の原因について探求し始める。

ヒステリー：その病名は子宮（ギリシャ語で子宮を意味するヒステロン）を持っている人の病気という意味で、古くから女性のみが罹る病気と考え

られていた。その症状は体に生じる麻痺、チック、震顫（ふるえ）、吐き気、けいれん、痛み、および視覚、味覚、触覚、臭覚の障害や異常（例：皮膚が焼けるように、ぴりっと感じるなどの触覚異常）、言語失調、心臓の発作、のどのつまり、頭が重いなどがある。ヒステリーの大発作というのは、髪を振り乱し、あお向きに寝ているからだを弓なりにそらし、頭と足だけを床につけた格好をするものである。古くからの治療法としては、子宮の上に氷枕を置き、冷やし、安静にしているという一時的な対処療法がある。

1886（明治19）：30歳 ウィーンに戻り、フロイトは精神医学会でヒステリーが女性のみが罹る病気ではなく、男性にも見られることを報告する。しかし、まったく相手にされず、ウィーンの医学界からつまはじきにされる。フロイトはウィーンのラサシュトラーセ7番地に神経科の診療所を開き、開業医となる。シャルコーの著書『神経系の障害に関する講義』を翻訳、出版する。その年、マルタと結婚する。

1887（明治20）：31歳 多くの患者が診療所に訪れる。フロイトは医学書にあるすべての治療法を神経症患者に施す。休養療法、エネルギー療法（適度な活動・運動をする療法）、温水療法、冷水療法、そして最新の電気療法を試みるが、効果がみられなかった。フロイトはシャルコーの弟子ベルネームにより書かれた『暗示とその治療的応用』の内容通りに、患者に催眠をかけ、その間に暗示（覚めた時には症状が良くなっていますよという暗示）を与える催眠療法を使い始める。

1888（明治21）：32歳 ベルネームの著書『暗示とその治療的応用』を翻訳し出版する。

1889（明治22）：33歳 催眠療法を完全にマスターするため、フランス北部にあるナンシーの総合病院にいるベルネームに会いに行く。フロイトはそこで、

ベルネイムが患者の額に手を置きながら催眠療法をおこなっている時に、患者の意識の底に潜んだままになっているものを引き出すことができることを目のあたりにして驚き、「無意識」の存在を発見する。

フロイトはウィーン総合病院の見習い医師だった頃知り合った、耳鼻咽喉科の医師ウィルヘルム・フリースと深い親交を持つようになる。フリースはフロイトと同じユダヤ人の医者であり、ウィーンの医学界から孤立しているフロイトの最も良き理解者であった。1887年以降から1902年までの15年にわたり、250通あまりに及ぶフリースとの文通を通してフロイトは精神分析理論の礎となる「抑圧」の概念、「夢分析」の概念、「エディプス・コンプレックス」の概念を構築していく。フリースの存在なくしてフロイトの精神分析は誕生し得なかったとも言われている。しかし、1903年以後フロイトとフリースは意見のくい違いにより、再び会うことはなかった。フリースと訣別したフロイトは、フリースからの手紙をすべて焼き捨ててしまう。一方、フロイトがフリースへ宛てた手紙はフリースの死後、彼の未亡人により古本屋に売られる。その後、フロイトの弟子であり友人であるデンマーク王妃のマリー・ボナパルトを経て、ウィーン銀行の金庫に預けられる。これらの書簡は、「フリースへの手紙」と呼ばれ、精神分析誕生のプロセスを知る貴重な資料となる。

1891（明治24）：35歳 ウィーンのベルグガッセ19番地に転居する。この場所は診療所と住まいを兼ね、フロイトがロンドンへ亡命するまでの47年間居住した家で、80年後の1971年より、ウィーンのプロイト博物館となる。

『失語症の理解のために』を出版する。失語症とは口や喉などの発声器官に損傷がなく、耳がきこえるのに言葉が話せなくなる病気である。この病気は脳の言葉を発する部位が侵されることにより生じると考えられていたが、フロイトはヒステリー症例に見られる症状を参考にして、従来の病理学的見解に反対し、心理学的に失語症を捉える必要性を述べる。

1892（明治25）：36歳 フロイトは催眠術にかからない患者に自由連想法を用いるようになる。自由連想法とは患者の心に浮かぶ事柄を、何でも話してもらうものである。フロイトは患者に「長いすに横たわり、目の前に浮かぶことを何でも話してください。夢も、空想もすっかり」と言い、患者の心を乱さないように、患者の後頭部に位置する場所に安楽椅子を置き、静かに座り、患者が語る事柄に、ひたすら耳を傾ける。不思議に患者は次から次へと語り始めるのである。以後、フロイトは患者に催眠をかけるのをやめ、自由連想法を用いるようになる。

1895（明治28）：39歳 年上の友人であるユダヤ人医師ブロイエルと共に、『ヒステリー研究』を出版する。

ブロイエルは、かつて治療した若いヒステリー患者アンナ・Oに催眠術を施している最中、ブロイエルの問いにアンナが答えはじめ、その後不思議に、ヒステリー症状が1つ1つ消えていき、病気が治癒したことをフロイトに話したのである。

アンナ・O（本名ベルタ・パッペンハイム）の場合

アンナが治療中「ほんとうに、ひどいめにあった。」と口走るので、ブロイエルが「どうかしたのですか」と問いかけると、アンナは半意識状態のなかで、過去の記憶に焼き付けられた苦しい状況や、辛い感情を語り始めた。そして話した後に症状が消えていったのである。アンナはその後も、ブロイエルの診療を希望した。熱心に治療するブロイエルに、彼の妻がアンナに嫉妬しはじめ、とうとう、ブロイエルがアンナの治療を中止した所、アンナはブロイエルの子供を想像妊娠し、ヒステリー性の陣痛発作を起こしたのである。症状が良くなったと見えたのは、実はブロイエルへの「感情転移（後に記載）」によるものであった。その後、アンナは療養所生活を送り、完治する。アンナは孤児院の院長を務め、女性社会運動家となり、ドイツ郵便切手の肖像モデルにもなった。

フロイトはアンナの症例の他に、4つの症例（ルーシーの症例、エリザベータの症例、カタリーナの症例、エンミ・フォン・Nの症例）をも参考にして、ヒステリーが恐ろしい体験、認めたくない体験にともなう感情の抑圧により生じ、それらの感情が性的なことと関係していることに注目し、ヒステリーの原因を性的外傷によるものであると結論づけた。この考えはブロイエルとまったく異なるものであった。ブロイエルとフロイトは本の出版後、ウィーンの町で出会っても目を合わせることも、声を掛け合うことも決してなかった。

フロイトは、自分自身の夢分析を始める。夢は「無意識への王道」と述べ、夢の内容を分析することにより、無意識の中に隠された願望が明らかになると考えたのである。

フロイトの精神分析を受け継ぐ、6番目の子供アンナが生まれる。

1896（明治29）：40歳 この年、フロイトは彼の患者に施した治療法を始めて精神分析：psychoanalysisと呼んだ。この言葉は、心（ギリシャ語：^{フシケ}psyche／英語：^{サイコ}psycho）の分析（^{アナリシス}analysis）という意味で、フロイト独自の考えにより名づけられたものである。精神分析療法を行う過程でフロイトは患者に見られる興味深い2つの現象に気がついた。フロイトはそれらを、「抵抗」と「感情転移」と名づけた。

抵抗：患者が治療に来ているにもかかわらず、さまざまな策略をもうけて治療の進行を妨げ、隠れた記憶の表出を抑制する現象である。患者は約束の時間に遅れる、無断で休む、あるいは思い出すことなど何も無いと言ったり、発熱したり、治療方法に文句をつけたりなど、ありとあらゆる方策を使って、自分の心の中に埋め込んでしまった苦しい、辛い記憶を呼び起こさないように抵抗するのである。フロイトはこの抵抗がなぜ生じるのかを患者に認めさせ、患者がこの抵抗を克服した時に、患者との信頼関係が生じ、治療が促進すると考えた。

感情転移：患者が治療の過程のなかでフロイトに対してあらわす強い愛着や敵意そして嫉妬などの感情は、フロイト自身に向けられているものではなく、実は、患者が幼児期にその親に対して抱いていた感情をフロイトに転じていることを発見する。女性の患者はフロイトに、娘が父に抱く愛着を求め、男性の患者はフロイトに、息子が父に向ける尊敬とともに軽蔑をあらわした。フロイトはこの現象を感情転移と名づけ、幼児期において患者と両親の間に生じた感情はあらゆる人間関係に転移すると考えた。

父ヤコブが81歳で亡くなる。

1897（明治30）：41歳 父ヤコブの死を契機にフロイトは自己分析を開始する。この自己分析の経緯はフリースへ送った手紙の中に詳細に記載されている。父ヤコブと息子フロイトの心理的關係は「エディプス・コンプレックス」と呼ばれるものであり、その関係は親と子の間に存在する普遍的な心理的アンビバレンスとその葛藤：愛着と敵対あるいは愛と憎しみがともに存在し、互いに葛藤し続けることを説明するものである。家族間に存在する愛憎のテーマは親殺し、子殺し、近親相姦などの心理的説明へと発展していく。

エディプス・コンプレックス：幼児期の3歳から6歳頃にかけて、子どもは異性の親に強い愛情を向ける。男の子は母親に愛を向けると同時に父親に嫉妬し、女の子は父親に愛を向けると同時に母親に嫉妬する。

異性の親と一体化したいという愛着の感情は、同性の親を敵対視する嫉妬の感情と罰せられる不安や罪の意識を生じさせる。子どもの立場から捉えた親子の心理関係をフロイトはソフォクレスが書いたギリシャ神話の戯曲「エディプス王」の主人公エディプスに準じて、「エディプス・コンプレックス」と呼んだ。

エディプス王の物語：テーバイの王ライウスは、生まれてくる息子はおまえを殺すという神託を受け、妻のイヨカスタが男の子を生んだとき、この

乳児を山麓に捨てて死ぬにまかせるように命じた。だが、羊飼いが乳児をコリントのポリパス王のところに連れてゆき、王はその子どもを養子にした。青年に達したエディプスは、コリントを後にし、たまたま十字路で実父ライウスと遭遇する。道の譲り合いから喧嘩になり、エディプスはライウス王を父と知らずに殺害した。エディプスは次にスフィンクスと出会う。スフィンクスはテーバイへの道をふさいで旅人に謎を出し、解けないと殺していたのだが、エディプスがその謎を解いたため、屈辱から自殺する。テーバイの人々は感謝してエディプスを王とし、彼をイヨカスタと結婚させた。ところがテーバイに悪疫が流行し、神託によれば、ライウス殺しが悪疫の原因であるという。エディプスは犯罪者を明らかにして町を救おうと誓ったが、その結果、彼自身が父の殺人者であり、母親と近親姦の罪を犯していたことを知る。イヨカスタは首を吊って死に、エディプスは彼女が着物を留めるために使っていたブローチで自らの目をえぐって盲目となり、放浪の末にアテナイで死ぬ。（小此木，2002，pp.222-223）

1899（明治32）：43歳 『夢判断』を出版する。フロイト自身の夢と患者の夢を分析したもので、1899年11月に出版したにもかかわらず、その印刷、発行日を1900年1月2日と記載した。フロイトは奥深い心の扉を開く夢分析を「無意識への王道」とたとえ、その発見が新たに迎える20世紀の幕開けにふさわしいものと考え、この日付をつけたのである。

1901（明治34）：45歳 フロイトはウィーン大学医学部の准教授に任命されるが、以前と同じように、診療所の中で患者の治療に専念する。ヒステリー症状に悩むドーラの分析を開始する。

『日常生活の精神病理』を出版する。フロイトは日常生活に起こる小さなことがら（ちょっとした言い間違い、聞き違い、読み違い、書き違い、やり間違い、ど忘れ、置き忘れ、紛失など）は、偶然に生じたものではなく、それらの現象は無意識の中に隠されている願望が、知らず知らずのうちに行為として表

出したものであり、一見、何の意味を持たない失錯行為にも、すべて意味があるとみなした。

1902（明治35）：46歳 毎週水曜日の晩、好奇心旺盛な若い医師たち数人（最初は4名）が、フロイトの自宅に集まり精神分析理論およびその治療法について互いの意見を交換する会合が開かれるようになる。これは「水曜日の学習会」と呼ばれ、1908年ウィーン精神分析学会となる。

1905（明治38）：49歳 『あるヒステリー患者の分析の断片（ドーラの症例）』、『性に関する3つの論文』、『ウィットの言葉』を刊行する。

『性に関する3つの論文』：この論文内容は、現代の「発達心理学」および「パーソナリティの心理学」などの教科書の中に、フロイトの心理性的発達理論として取り上げられているものである。

心理性的発達：フロイトは、人が生きる原動力をリビドー（性的エネルギー）とみなし、リビドーは子どもにもあると仮定した。ただし、成人のリビドーは性器による異性との性行為によって満たされるが、子どものリビドーは性器以外の粘膜部位で性的快感を得、相手を求めないもの（自体愛）である（丹野、2003. p.164）。リビドーは、成長とともに、口唇（0－1歳）、肛門（1－3歳）、男根（3－6歳）、潜伏／身体の中のどこか（6－12歳）、性器（12歳以上）の順に移動する。リビドーの対象は自体愛から自己愛（ナルチシズム）そして対象愛（他者愛）へと向けられ、心はリビドーとともに発達するという考えから、心理性的発達理論と呼ばれる。

1906（明治39）：50歳 スイスの精神医学者、ユングと文通を開始する。ユングは当時、精神医学界の権威であったチューリッヒ大学医学部の講師であり、世界中の精神医学者が研究のために訪れるチューリッヒのブルクヘルツリ病院、主任教授ブロイラー（精神分裂病という病名を提唱した人）の助手でもあった。

ユングはフロイトの『夢判断』の学術的価値を認め、精神分析理論およびその治療方法が精神病、特に精神分裂病の解明にも役立つものであると評した。ウィーンの医学界で変人呼ばわりされていたフロイトの精神分析は、世界的権威を持つチューリッヒの精神医学界から確実に支持されたのである。ユングを通してフロイトの精神分析はヨーロッパ各地に広まる。

1907（明治40）：51歳 『W. イェンゼンの小説「グラディーヴァ」にみられる妄想と夢』を出版する。フロイトはユングに勧められてこの小説を読む。別れと再会、死と再生というテーマに感動し、精神分析的な考察をまとめる。

1908（明治41）：52歳 フロイトの周りには、アドラー、ランク、ユング、フェレンツィ、アブラハム、ジョーンズなどが中心となり、5つの国から40名が参加し、初めての国際精神分析学会（International Congress of Psychoanalysis）がザルツブルグで開催される。そこでフロイトは強迫神経症の「ねずみ男の症例」を発表する。会議後、雑誌『精神分析年報』が出版される。

1909（明治42）：53歳 アメリカの心理学者ホール教授は、アメリカ人に精神分析という新しい考えを伝えて欲しいと、ユングを通じて、フロイトにクラーク大学で講演をすることを依頼した。フロイトはユング、フェレンツィを同伴してアメリカに渡り、アメリカ、マサチューセッツ州、ウースターにあるクラーク大学創立25周年の記念講演でフロイトはアメリカ中から集まった多くの学者の前で精神分析理論とその治療法について講演した。それ以後フロイトの著作は英語に訳され、精神分析の考えはアメリカへ浸透していく。

『ある5歳男児の恐怖症分析（ハンスの症例）』を出版する。

『強迫神経症の一例に関する考察（ねずみ男の症例）』を出版する。

1910（明治43）：54歳 国際的な精神分析協会（International Psychoanalytical Association）が設立される。最初からフロイトの下で精神分析の活動を推進してきたアドラーを先頭としたユダヤ人医師からなるウィーン派は、ユング率いるスイス派のグループが力を持つことに異議を唱える。しかし、フロイトの推薦を受け、ユングが国際精神分析協会の会長に任命される。その後、各国で精神分析協会が設立される。1911年アメリカ精神分析協会の設立、1912年イギリス精神分析協会の設立、1913年ブタペスト精神分析協会の設立など。

『レオナルド・ダ・ヴィンチの幼年期の一記憶』を出版する。

イタリアの芸術家レオナルド・ダ・ヴィンチのパーソナリティを、「聖母と幼児イエスと聖アンナ」、「モナリザの微笑」の絵画をとおり精神分析理論を用いて説明したもの。

1911（明治44）：55歳 アドラーはウィーン精神分析協会を脱退し、フロイトから離反する。アドラーは劣等感コンプレックスとその補償の概念を唱える。その後アメリカへ移住し、「個人心理学」を打ち立てる。

『自伝的に記述されたパラノイア（妄想性痴呆）の一症例に関する精神分析的考察（シュレーバーの症例）』を出版する。

1912（大正1）：56歳 精神分析運動の公式雑誌、「イマーゴ」を発刊する。

1913（大正2）：57歳 フロイトとユングの関係が悪化する。

フロイトは生命の源をリビドー（性的エネルギー）とみなしたが、ユングは生命の源をサイキック・エネルギー（靈魂のエネルギー）とみなした。ユングはフロイトがいう無意識を個人的無意識とし、その奥底に人類全体が共有する集合的無意識があるとした。その集合的無意識の中には元型（アーキタイプ）が潜在的エネルギーとして存在し、元型（アーキタイプ）はイメージとして意

識の中で体験され、パーソナリティ形成の要因となる。

ユングによるフロイト批判のスピーチ

Carl Gustav Jung

Well, he was complicated, actually, you know.

I liked him very much, and... but I soon discovered that when he had thoughts on things, then it was settled while I was doubting all along the line and... it was impossible to discuss something really "au fond."

You know, he had no... philosophic education, particularly... you see

I was studying Kant, and I was steeped in it and that was far from Freud.

So from the very beginning, there was a discrepancy.

His approach was naturally different from mine because his personality was different from mine that led me into my later investigation of psychological types.

(Cited in Multimedia from Encarta, Carl Jung Discusses Sigmund Freud)

まあ、実際あなた方がよくご存知のように、彼は複雑な人でしたね。

私は彼に大変好意を持っていました・・・がまもなくわかったのです。

私があらゆる面にわたって疑問を持っているにも関わらず、彼がある考えや意見を抱くとそれが決定されてしまうのです・・・実際のところ、基本的に彼とある問題についていろいろな角度から論じ合うということは、まったく不可能でした。

何しろ、彼は何の・・・哲学的な教育を受けていませんでした・・・ご存知のように特に、私はカント哲学を勉強し、その研究に没頭しましたが、フロイトにとって、このようなことはまったくかけ離れた、意味のないものでした。

従って、始めから彼と私の間には食い違いがあったのです。

彼と私のアプローチは当然、違っていました、なぜなら、彼と私のパーソナリティが異なっていたからです、この違いは、後に探求することになる心理型の研究へと私を導くことになりました。

(「カール・ユング、フロイトを批判する」エンカルタのマルチメディアから引用)

(飯田宮子訳)

『トーテムとタブー』を出版する。トーテム（社会：原始社会共同体）がいかに営まれ、その営みの中でどのようにタブー（規範：禁止されていること、してはいけないこと）は取り決められていったのかという過程を「エディプス・コンプレックス」（原父と息子たちの闘争そして罪障感）の概念を用いて説明したもの。

1914（大正3）：58歳 第一次世界大戦が勃発する。おびたしい数の兵士にヒステリーと同じ症状が現れ、戦争神経症と名づけられる。

戦争神経症：戦闘場面での死の恐怖体験が心的外傷になり、ヒステリー同様に気を失う、手足が麻痺する、泣き叫ぶなどの症状が現れる病気。かつて、フロイトがヒステリーは男性にもみられると主張した症例が8万人のドイツ・オーストリアの兵士に見られたのである。この事実は心の病を治療する医者フロイトの存在を名実ともに世界に知らしめることになる。

『ミケランジェロのモーゼ』を出版する。フロイトは1901年はじめてローマを訪れた時、ミケランジェロのモーゼ像の造形美に強く魅せられた。フロイトがモーゼ像から受けた精神性について述べてある。

『精神分析運動の歴史』を出版する。

ユングは国際精神分析協会の会長を辞任し、フロイトから離反する。その後、

「分析心理学」を設立する。

1917（大正6）：61歳 『悲哀とメランコリー』を出版する。フロイトは愛の対象や依存の対象を失った時、人々がしなければならない喪の仕事ならびに悲哀の心理過程について精神分析的に説明したもの。

『精神分析入門』を出版する。フロイト初期の精神分析および前期の精神分析に準ずる内容をまとめたもの。

初期の精神分析：ヒステリー研究から無意識論と性的病因説を成立する時期。

前期の精神分析：フリースとの自己分析を介した「エディプス・コンプレックス」の発見と幼児性欲論・心理性的発達理論を確立する時期。

1918（大正7）：62歳 第一次世界大戦終わる。700万人の青年の命を奪い、1800万人を不具者にした第一次世界大戦は、人間の野蛮さ、愚かさ、弱さをフロイトに提示した。フロイトの探求は病んだ人間の心から人類がつくりだす文化、社会、宗教へと向けられる。

『ある幼児期神経症の病歴より（おおかみ男の症例）』を出版する。

1919（大正8）：63歳 国際精神分析出版協会がウィーンに設立される。

1920（大正9）：64歳 ウィーン大学の教授に任命される。娘（次女）のゾフィーがインフルエンザに罹り26歳で亡くなる。

『快感原則の彼岸』を出版する。フロイトは「死の本能（タナトス）」と呼ぶ本能を理論化する。人間には生の本能（エロス）にさからい、緊張状態を徹底的に衰退させ、生あるものを生命のない状態に引きずり込む本能（タナトス）

があるとみなすものである。つまり「生あるものはすべて、本能的に死を求める」という考えを述べている。

1921（大正10）：65歳 『集団心理学と自我の分析』を出版する。個人の精神生活においても、集団心理においても同様な精神過程が行われるという観点で、人間の社会・集団の形成と維持についての心理を述べている。集団心理の本質はリビドーの結合によるものであり、リビドーの結合は精神分析用語である「同一視」と「ほれこみ」によって形成されると述べている。

1922（大正11）：66歳 フロイトはベルリンでの精神分析学会に出席し、ジョーンズ、ランク、ブリル、アブラハム、フェレンツィ、アンティゴンの6名をひそかに集め、最も信頼する弟子たちに、今後の精神分析学界の核となり、精神分析学の科学性を世界に広め、指導することを互いに誓わせる。その証としてフロイトは、一人ひとりに誓いの指輪を贈る。これはベルリン委員会と呼ばれるものとなる。しかし、弟子たちの離反によりベルリン委員会は数年後崩壊する。

1923（大正12）：67歳 フロイトの口蓋に癌が発見される。病状は次第に悪化し、フロイトを苦しめ続け、彼の死まで33回の手術をすることになる。孫のハイネルレ（ゾフィーの末っ子）が4歳で亡くなる。

『自我とエス』を出版する。心の構造についての説明を試みたもの。『夢判断』の中で明らかにした意識、前意識、無意識という心の領域には、超自我、自我、エスという3つの構造があり、それらの機能と役割そして互いの関係性を明らかにした。

エス：無意識のなかに存在し、リビドー（性的エネルギー）の本能的衝動であふれ、生きる原動力となるもの。エスは外界の現実を考えず、善、悪、道徳を無視し、盲目的にただひたすら快感をもとめる。エ

スは快感原則に従う。

自我：意識のなかに存在し、外界を知覚するもの。自我は現実に適応しながらエスの欲求と超自我の命令を調整する役割を果たす。自我は現実原則に従う。

超自我：自我の一部が分化したもの。超自我は本能的欲求に対し禁止と脅しを行い、自我に対し道徳的罪悪感を生じさせる機能を持つ。内面化された道徳的規範や良心のこと。

1924（大正13）：68歳 ランクは「出産外傷」という概念を唱えフロイトから離反し、「意志療法」を創り出す。その年、フロイトはウィーン市より市民権を与えられる。

1925（大正14）：69歳 『ジークムント・フロイト、自らを語る』を出版する。

1926（昭和1）：70歳 『制止、症状、不安』を出版する。不安理論と呼ばれるものを提示する。エスからの欲求（本能衝動）は緊張の高まりを生じさせ、それを抑圧するために不安が危険の存在を告げる信号となり、自我の防衛機制がさまざまに働くことについて述べている。

フロイトに会いにアインシュタイン、ベルリンに来る。

1927（昭和2）：71歳 『幻想の未来』を出版する。宗教の本質と宗教の機能、役割について精神分析的説明を述べる。フロイトによると、宗教とは、乳幼児の自我が外界（母親）から分化する以前の、外界と自我の一体感を求める幼児的な憧憬、幻想であるとする。フロイトはこの本の中で彼自身が無神論であることを表明する。

1930（昭和5）：74歳 フロイトの明確で完璧な文章にゲーテ文学賞が与えられる。

『文化への不満』を出版する。フロイトは、「生の本能（エロス）」の営みとしての文化の進歩は、潜在的な「死の本能（タナトス）」つまり自己破壊力の高まりをもたらし、本来は人類生存のための手段であった自然に対する支配力が、逆に人類の自己破壊を引き起こす危険性を招くことになるだろうと述べている。

母アマリエが93歳で亡くなる。

1932（昭和7）：76歳 フェレンツィは国際精神分析学会の会長任命を辞退し、フロイトから離反する。ナチス・ドイツによるユダヤ人迫害が激しくなる。

『続精神分析入門』を出版する。フロイト後期の精神分析に準ずる内容をまとめたもの。

後期の精神分析：超自我、自我、エスの心的構造論、生と死の2大本能論、不安信号説と自我の防衛機制論などを展開する時期。

1933（昭和8）：77歳 ヒトラーがドイツ帝国の首相になる。アインシュタインと共に戦争と平和について交わした手紙『なぜ戦争か』を出版する。ナチス・ドイツはフロイトおよび精神分析に関する書籍をわいせつであるという理由から禁書とし、公にベルリンで焼き捨てる。さらに、精神分析用語の使用を禁止する。

1934（昭和9）：78歳 ドイツ、オーストリアにいるユダヤ人精神分析医がアメリカ、イギリス、ブラジルへ移住する。

1935（昭和10）：79歳 英国医学王立協会の名誉会員に選ばれる。

1936（昭和11）：80歳 ウィーン市をあげてフロイト生誕80年祝賀の催しが行われる。ドイツの作家トーマス・マンは、病身のフロイトを自宅に訪れ「フロイトと未来」というスピーチをフロイトの枕元で読む。

1938（昭和13）：82歳 ナチス・ドイツはオーストリアを併合する。ゲシュタポはフロイトの家ならびにウィーン精神分析協会本部を捜査する。娘のアンナが逮捕され、終日尋問を受ける。フロイト救出のため、デンマーク王妃マリイ・ボナバルト、アメリカのルーズベルト大統領、イタリアのムッソリーニ総統は、ナチス・ドイツと交渉する。フロイトは6月4日、妻マルタ、娘アンナ、家政婦、そして看護婦の4人と共に、イギリス、ロンドン、メアースフィールド・ガーデンズ20へ亡命する。ロンドンの家は48年後の1986年からフロイト・イギリス博物館となる。

フロイトが生活の面倒をみていた4人の年老いた姉妹はロンドンへ行くことを拒み、ウィーンに留まったが、フロイトの死後、第二次世界大戦中（1942年）に、ユダヤ人強制収容所のガス室で全員亡くなる。

1939（昭和14）：83歳 第二次世界大戦起こる。『モーゼと一神教』を出版する。ユダヤ人に見られるモーゼ信仰を精神分析理論に基づいて解釈し、ユダヤ人がなぜ迫害を受けなければならないのかという理由ついて、フロイト自身の見解を述べたもの。

フロイト、9月23日、口蓋の癌によりロンドンで死去。

1940（昭和15）：フロイトの死後『精神分析概論』が出版される。フロイトが構築した精神分析の体系を総括したもの。

参考文献

- 浜川祥枝・生松敬三・馬場謙一・飯田真編（1986）『フロイト精神分析物語ーフロイト思想の像を描くー』 有斐閣ブックス
- Multimedia from Encarta 「Carl Jung Discusses Sigmund Freud」
（http://encarta.msn.com/media_461550003_761578837_-1_1/Carl_Jung_Discusses_Sigmund_Freud.html（2004年12月）
- Multimedia from Encarta 「Sigmund Freud」
（http://encarta.msn.com/media_461545190_761562859_-1_1/Sigmund_Freud.html）
（2004年12月）
- 小此木啓吾（1995）『フロイト その自我の軌跡』 NHKブックス179 日本放送出版協会
- 小此木啓吾（2002）『フロイト思想のキーワード』 講談社現代新書1585 講談社
- ビエール・ババン・小此木啓吾監修・小林修訳（1994）『フロイト 無意識の扉を開く』
知の再発見双書24 創元社
- ラッセル・ベイカー・宮城音弥訳（1975）『フロイト その思想と生涯』 講談社現代新書383
- Sigmund Freud Museum Wien 「SIGMUND FREUD CHRONOLOGY」
<http://www.freud-museum.at/e/index.html>（2004年12月）
- 丹野義彦（2003）「第12章 性格は変えられるか1」『性格の心理 ビッグファイブと臨床からみたパーソナリティ』 サイエンス社 pp. 162-1741

東京立正女子短期大学紀要編集委員会規定

(設置)

第1条 東京立正女子短期大学（以下「本学」という）に、紀要編集委員会を設置する。

(目的)

第2条 紀要編集委員会は、教育研究に資するため研究紀要の編集および刊行を行う。

(任務)

第3条 紀要編集委員会の任務は、次の通りとする。

- (1) 研究紀要誌「東京立正女子短期大学紀要」の編集、刊行、配布
- (2) 編集方針の決定と編集内容の選定
- (3) 寄稿者の選定と依頼
- (4) 原稿の整理、保管
- (5) 合評会等の開催
- (6) その他必要な事項

(組織)

第4条 紀要編集委員会は、教授会の議を経て学長の委嘱する委員若干名をもって組織する。

2. 委員長は委員の互選とする。委員長に事故ある時は他の委員が代行する。
3. 委員は専任教員より選任、委嘱する。
4. 委員の任期は1年とする。但し、再任を妨げない。

(寄稿細目)

第5条 紀要編集委員会は、円滑な寄稿・掲載を図るため、別に寄稿細目を定めるものとする。

(事務処理)

第6条 紀要編集委員会の業務は、紀要編集委員会が行う。但し、研究紀要誌の保管、配布に関しては図書館運営委員会と提携して処理する。

附則 この規定は、平成13年4月1日より施行する。

「東京立正女子短期大学紀要」寄稿細目

1. 寄稿者は本学専任教員および非常勤教員とする。但し、紀要編集委員会が特に認めた者はこの限りではない。
2. 未発表の論文、翻訳、エッセイ並びに書評、資料紹介、記録などを掲載する。掲載の採否は紀要編集委員会が決定する。
3. 枚数は論文の場合400字詰原稿用紙50枚以内（和文）または7500語以内（英文）とする。その他は和文20枚以内、英文はこれに準ずる。手書き・ワープロ、縦書き・横書きいずれも可とする。
4. 原稿は返却する。寄稿の際、表題に英文を付し氏名はローマ字で表記する。現在の研究職名を和文で明記する。また原稿のコピーを一部添付する。但し、ワープロ原稿の場合は使用機種名を記しフロッピーディスクを提出する。
5. 寄稿者に初校、再校を依頼する。
6. 稿料は支払わない。但し、「紀要」10部・抜刷り30部を進呈する。なお特殊製版（図版、写真版など）の費用は寄稿者が負担する。
7. 原稿提出期限は毎年10月末日とし、発行は年1回、3月末日までとする。
8. 紀要に掲載された論文は、国立情報研究所主催の「研究紀要公開電子化支援事業」のウェブページ <http://kiyo.nii.ac.jp> で公開され、閲覧される。

編集後記

▶春の光の中、桜の蕾が少しづつ膨らみ始める季節に『紀要33号』を発刊する運びとなりました。2005年の4月より、本学「現代コミュニケーション学科」に、保育士養成課程が設置され、新たに「子どもコミュニケーションコース」が誕生いたしました。豊かなコミュニケーション能力をさらに育てる専攻科も設置され、男女共学となり、校名が「東京立正女子短期大学」から「東京立正短期大学」へ変更されます。時代の流れの中で、本学も新たな一歩を踏み出しました。

▶本年度の紀要には、専任教員、非常勤教員あわせて7名の先生方からの研究論文が寄稿されました。お忙しい中、紀要執筆に従事していただいた先生方に深く感謝いたします。7本の論文は、社会、経済、言語、心理、観光の領域に関するものです。有泉論文は、社会学を再検討する試みがスコットランド啓蒙批判に照らし合わせて書かれており、幸田・楡木論文は、電子メールを用いたカウンセリングの可能性と限界について事例研究を通して述べています。土田論文では、多人数を対象とした質問紙による実験計画における問題ならびに信頼性と妥当性の基準について考察しています。下田論文は外国人観光客の誘致上の問題点と提言を具体的に取上げています。東論文は一昨年に掲載した「ITによる産業構造の変化とマクロ経済への影響」の続編であり、置塩氏の理論を検証した数少ないものです。中岡論文は、自閉症児の言語コミュニケーション上に現れる特徴の一部を考察したものです。飯田論文は精神分析を世に広めたフロイトの生い立ちと理論成立の背景を年表にまとめたものです。

▶2005年度から専攻科が設置され、今後、保育関連を含む幅広いコミュニケーションの教育と研究において、本学の紀要が先生方の布石となることを願ってやみません。

(『紀要』編集委員会)

執筆者紹介（掲載順）

有 泉 正 二 …… 本 学 非常勤講師
幸 田 達 郎 …… 本 学 非常勤講師
榆 木 満 生 …… 立正大学 教 授
土 田 昌 司 …… 本 学 非常勤講師
下 田 将 文 …… 本 学 非常勤講師
東 浩 一 郎 …… 本 学 講 師
中 岡 典 子 …… 本 学 助教授
飯 田 宮 子 …… 本 学 教 授

第33号 紀要編集委員

紙 谷 威 廣 ・ 飯 田 宮 子

東京立正女子短期大学紀要 第33号

平成17年3月20日 印刷

平成17年3月25日 発行

編 集 東京立正女子短期大学紀要編集委員会

発行所 東 京 立 正 女 子 短 期 大 学
〒166-0013 東京都杉並区堀ノ内2-41-15
TEL 03（3313）5101（代）

印刷所 株式会社 三 協 社
〒164-0011 東京都中野区中央4-8-9
TEL 03（3383）7281（代）

THE JOURNAL OF TOKYO RISSHO JUNIOR COLLEGE FOR WOMEN

No.33

March 2005

CONTENTS

Sociological Thought Reconsidered: On Criticism of Scottish Enlightenment	ARIIZUMI, Shoji	1
Features of Brief Counseling Using E-mail.....	KOHDA, Tatsuo NIREGI, Mitsuki (Rissho Univ.)	20
Experimental Designs for Questionnaire Method.....	TSUCHIDA, Shoji	39
Suggestions on the Attraction of Tourists from Foreign Countries	SHIMODA, Masafumi	52
The Law of the Tendential Fall in the Rate of Profit and Okishio's Theory	AZUMA, Koichiro	72
A Study on Language and Autism — Defective Communication as the Reflection of Human Mind —	NAKAOKA, Noriko	101
On Freud Study (1) — Sigmund Freud's Chronology —	IIDA, Miyako	124
◇Editors' Notes.....		149

Published by
Tokyo Rissho Junior College for Women

TOKYO JAPAN

ISSN 0386-7161